第一講 文法

Step 1

一 次の～～～線の部分と、修飾・被修飾の関係にあるものはどれか。

前からよく僕は、アこんな初夏に、一度、イこの高原の村に来て見たいものだとウ言っていましたが、やっと今度、その宿望がエかなったわけです。

（堀辰雄「美しい村」より）

【栃木県】

二 次の――部の動詞の活用の種類が他と異なっているものを、ア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

厳しい寒さの中を、二千里の果てから、ア別れて二十年にもなる故郷へ、わたしはイ帰った。

もう真冬の候であった。そのうえ、故郷へウ近づくにつれて、空模様は怪しくなり、冷たい風がヒューヒュー音をたてて、船の中まで吹き込んできた。苫のすきまから外をエうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。

（魯迅著、竹内好訳「故郷」より）

【埼玉県】

三

次の文中の――線をつけた「の」のうち、同じはたらきをするものの組み合わせとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

雪アの降り積もった広場で、近所イの友だちと時ウのたつエのも忘れて雪合戦をした。

1　アとウ　　2　アとエ　　3　イとウ　　4　イとエ

【神奈川県】

四

次の＝＝部「で」と、同じ意味（働き）で使われている「で」を含む文を、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

昨日、自動車で家族と牧場に出かけた。

ア　日本は平和である。
イ　やかんでお湯を沸かす。
ウ　彼は疲れていたようである。
エ　シラコバトが飛んでいる。

【埼玉県】

Step 2

五 (1)~(4)の――の部分について、敬語の種類が他の三つと異なるものはどれですか。一つ答えなさい。

(1) どうぞご覧になってください。
(2) 明日お話をうかがいます。
(3) 何になさいますか。
(4) 会にはいらっしゃいますか。

【岡山県】

六 次の会話は、PTA主催のレクリエーションで食堂の係になった中学生の山田さんとお客さんが話した内容の一部である。――線をつけた部分ア~カの中から、敬語の使い方が**正しくないもの**を**二つ**選びなさい。

山田さん「いらっしゃいませ。何にアなさいますか。」
お客さん「カレーライスをください。辛口はありますか。」
山田さん「辛口はありませんが、小袋の辛みスパイスをイ差し上げますので、お好みでかけて、ウいただいてください。エお使いになりますか。」
お客さん「では、辛みスパイスをください。」
山田さん「分かりました。ほかに必要なものがありましたら、遠慮なくオ申し上げてください。」
お客さん「ありがとう。大丈夫です。」
山田さん「では、準備ができましたら、カお呼びします。」

【福島県】

七

敬語の使い方として誤った表現を含む文を、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア　母が先生にお会いしたいと申しております。
イ　私たちの学級新聞ができましたので、先生も拝見してください。
ウ　学習発表会の当日は、お客様が大勢いらっしゃいます。
エ　春休みに、先生のお宅にうかがってもよろしいですか。

【高知県】

八

次の文の申し上げについて、適切に説明したものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

卒業式で母が先生にお礼を申し上げた。

ア　尊敬語で「母」への敬意を表している。
イ　尊敬語で「先生」への敬意を表している。
ウ　謙譲語で「母」への敬意を表している。
エ　謙譲語で「先生」への敬意を表している。

【和歌山県】

Step 3

九

次の――部の文節と‖部の文節の関係を、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

丘の　上の　大きな　家まで　ゆっくり　歩く。

ア　主述（主語・述語）の関係　イ　修飾・被修飾の関係　ウ　並立の関係　エ　補助の関係

【埼玉県】

十

次の問いに答えなさい。

一　次の文の――線部の「あたかも」の品詞を、後のア～エから一つ選び、その記号を書け。

今日は、あたかも春が来たかのように暖かい。

ア　動詞　イ　形容詞　ウ　副詞　エ　助動詞

二　次の文の――線部の「高く」と‖線部の「そびえる」の二つの文節は、どのような関係にあるか。後のア～エから一つ選び、その記号を書け。

山が　高く　そびえる。

ア　主語・述語の関係　イ　修飾・被修飾の関係　ウ　補助の関係　エ　並立の関係

【高知県】

十一 次の文章は、交通安全ボランティアなどでお世話になっている地域の方々に宛てて、中学生が作成した運動会の案内状の一部です。あとの問いに答えなさい。

> さて、今年の夏休みも終わり、いよいよ運動会が近づいてきました。私たちは、集団演技や個人競技の練習に、毎日一生懸命取り組んでいます。
> つきましては、日頃からお世話になっている地域の方々にも運動会においでいただきたいと考えています。私たちの練習の成果をぜひごらんになってください。お忙しい中とは存じますが、よろしくお願いいたします。

「なっている」の二つの文節はどのような関係にありますか。次のア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 主語・述語の関係　イ 修飾・被修飾の関係　ウ 並立の関係　エ 補助の関係

□

【鳥取県】

第二講 論理的文章の読解①

Step 1

一　次の文章を読み、各問いに答えよ。

①人工知能の周辺がにわかに騒がしくなってきた。

人工知能が近い将来、人間の能力を超えるのではないか、人間の仕事は機械にA奪われてしまうのではないか、というのである。「人間VS人工知能」の戦いはすでにあちこちで繰り広げられている。

将棋の世界では、②プロ棋士が人工知能と戦っている。そして、元名人をすでに破っているのだ。二〇一三年には、プロ棋士五人と人工知能が戦い、プロ棋士が一勝三敗一分けで負け越した。二〇一四年にはさらに対戦成績が悪化し、一勝四敗と、プロ棋士は一勝しかできなかった。人工知能がますます強くなっており、コンピュータの能力を少し制限したほうがいいのではという議論すら起こってきている。世間をにぎわせている人工知能だが、実は、人工知能は二〇一五年現在、まだできていない。このことは、多くの人が誤解しているのではないだろうか。

世の中に「人工知能をB搭載した商品」や「人工知能を使ったシステム」は増えているので、人工知能ができていないなどと言うと、びっくりするかもしれない。しかし、③本当の意味での人工知能――つまり、「人間のように考えるコンピュータ」はできていないのだ。人間の知能の原理を解明し、それを工学的に実現するという人工知能は、まだどこにも存在しない。したがって、「人工知能を使った製品」や「人工知能技術を使ったサービス」というのは実は嘘（うそ）なのだ。

嘘というのは少し言い過ぎかもしれない。人間の知的な活動の一面をまねしている技術は、「人工知能」と呼ばれるからだ。人工知能の歴史は、人間の知的な活動を一生懸命まねしようとしてきた歴史でもある。しかし、人間の持つ知能は深遠で、はるか手のCトドかない

ところにあり、いまだに④その原理はわかっていないし、それをコンピュータでまねすることもできない。

これは、考えてみれば驚くべきことである。⑤私はいつもこのことを考えるとワクワクしてしまう。

科学技術が進んで、宇宙物理学から素粒子論まで、われわれの住む世界の仕組みについては、かなりのところまでわかってきた。人類は、飛行機をつくったり、原子力発電所をつくったり、農作物を大量に生産したり、ありとあらゆることを地球上でやり尽くしている。ところが、そんなわれわれでも、自分たちの脳がどういう仕組みでできているか、わかってない。

われわれは、なぜ世界をこのようにDニンシキし、思考し、行動することができるのか。なぜ新しいことを次々と考え、学ぶことができるのか。その根本原理は何なのか。いまだによくわかっていないのだ。

（松尾　豊「人工知能は人間を超えるか」より。一部省略がある。）

（注）人間VS人工知能＝人間対人工知能

(一) □A、Bの漢字の読みを平仮名で書き、□C、Dの片仮名を漢字で書け。

A われて
B
C かない
D

(二) 〰〰線部の動詞と同じ種類の音便形をとるものを、次のア〜エから一つ選び、その記号を書け。

ア 乗る　イ 積む　ウ 頂く　エ 預ける

(三) ――線①とあるが、「周辺が騒がしくなる」とはここではどのような意味か、分かりやすく書け。

(四) ――線②の人工知能は、――線③と違ってどのようなものか。文章中から二十字で抜き出して書け。

(五) ――線④とはどのような原理か。それが具体的に述べられている段落を探し、その段落の最初の五字を抜き出して書け。

㈥　――線⑤について、陽一さんと春香さんが次のような会話をした。次の――線部とはどのような思いだと考えられるか、十五字以内で書け。

陽一　この「ワクワク」って、どういう気持ちなんだろう。
春香　すぐ前に「驚くべきこと」とあるよ。だから、例えば人間の知能がまだまだ謎ばかりだと驚くような気持ちじゃないの。
陽一　でも、筆者は研究者なんだよ。驚いているだけかな。それに、「ワクワク」って、普通は楽しみにしているということだよね。実は、同じ本の中に、「私は変わりゆくものが好きだ。変化が好きだ。既存のものが衰退し、新しいものが出てくる話を聞くとワクワクする。」と書かれているところを見つけたんだよ。
春香　なるほど。陽一さんは、その二つの「ワクワク」が同じ思いを元にしたものだと考えているんだね。

㈦　この文章の述べ方の特色として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア　今後の発展が見込まれている分野について、その発展が予想できる理由を、根拠を挙げ論理的に述べている。
イ　あまり知られていない分野について、当面の課題を最初に示し、その解決に向けた独自の計画を述べている。
ウ　専門的な話題について、一般によくある誤解を糸口にしつつ、研究の内容と現状を分かりやすく述べている。
エ　科学的な話題について、最後に今後への展望が広がるよう、これまでの研究の道筋を順序立てて述べている。

【奈良県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、後の各問に答えよ。解答はすべて各問の答の欄に書き入れ、句読点等は字数として数えること。

愛知万博では、微生物によって分解される生分解性プラスチックでできた食器やゴミ袋を使用したことによって、七二〇トン分の二酸化炭素の排出を削減できたという。これは様々な技術のおかげである。環境との共生を謳(うた)った愛知万博らしい成果であったと言える。

しかし、ふと疑問に思うこともある。道徳が技術に肩代わりされていくことで良いのだろうか、という疑問である。愛知万博では、食器やゴミ袋に環境に優しいものが使われるようになって、何も気にすることなく容器を捨てることができた。これが堆肥(たいひ)になると思うことが、使い捨てすることの後ろめたさを薄れさせてしまったのだ。技術が道徳の代行をしてくれたためである。

本来、私たちの良心と行動によって地球環境を守るよう求められている。地球に優しいと自ら感じたことを自発的に実行し、生活まで変えていこうとする覚悟が重要なのである。そのような意識は人間が持つべき「道徳」として定着しつつある。道徳と言えば堅苦しいが、人間としての行動の規範のことで、そのような発想を身につけた人間が増えていくことこそが人類の未来への希望とも言えるだろう。

ところが、そのような個人の道徳心を涵養(かんよう)するのではなく、技術によって問題が発生しないように前もって手を打っていくことが増えている。それによって表面的には道徳が機能しているかのような状態が作り出されるのである。

映画館や学校では通信妨害電波を発信して、ケータイを実質的に使えなくする方法が広がり始めている。これによって映画館や学校での静寂が守られるというわけだ。また、クルマの速度制御装置を制限速度以下になるように設定しておけば、スピード違反をしなくて済む。速度制御装置を取り付けようと考えたのは道徳心から来たものだが、後はそれにまかせておけばもはやクルマのスピードのことを考える必要がない。

確かに、それらによって公衆の安寧と安全が保たれ、地球環境に優しい行為が自動的になされるようになるのだから、けっこうなことと言うべきかもしれない。

しかし、技術が発達すれば、その分だけ私たちの能力が失われていくことに注意する必要がある。鉛筆がシャープペンシルに取り替わっ

て子どもたちはナイフを使うことができなくなり、クルマを使うことが増えて走力が衰え、エアコンがあらゆる場所に普及して体が汗をかかなくなった。パソコンを使うようになって漢字の書き方を忘れることも増えた。技術が手や足や体や頭脳の役割を肩代わりしてくれることによって、知らず知らずのうちに私たちが原初的に持っていた能力を失っているのだ。

　これと同じだとすれば、<u>技術が道徳の代行をする</u>うちに、私たちが生来的に持ち、あるいは成長の過程で獲得してきた道徳的な判断力が衰えていくことにならないだろうか。大勢の人がいる場でケータイを使わないのは、人に迷惑をかけないための配慮ではなく、通信妨害電波があるためになってしまう。スピード違反をしないのは、事故を起こさないためではなく、速度制御装置が働いてくれるためになるかもしれない。本来の道徳的な目標が忘れられ、ただ技術が命じるままに行動しているだけになりかねないのだ。

　このような技術はまだ一部でしか使われていないから考え過ぎと思われそうだが、それが全面的に広がって当たり前になってしまったらどうなるかを想像する必要があるだろう。ひょっとすると、人々は道徳心を失ったロボット同然の行動しかしなくなるかもしれない。

　迂遠（うえん）なようだが、人々の道徳心を涵養し、どのように判断すべきかを決めていける人間であり続けねば、社会は荒廃してしまうだろう。道徳を技術で置き換えることの<u>危なさ</u>を考えておくべきではないだろうか。

（池内　了「科学の落し穴」より。一部改変）

（注）謳った…目立つように主張した。
　　涵養…徐々に教え養うこと。
　　安寧…平穏なさま。
　　迂遠…遠回りなさま。

Step 2

問一　本文中のまかせて　けっこうに適切な漢字をあて、楷書(かいしょ)で書け。なお、送り仮名が必要なものは、平仮名で正しく送ること。

まかせて

けっこう

Step 2

問二　本文中に道徳とあるが、それを言い換えている最も適当な十一字の語句を、本文中からそのまま抜き出して書け。

Step 3

問三　本文中に公衆の～ようになるとあるが、それらのことを実現するための技術として挙げられているものを、本文中からそのまま三つ抜き出して書け。ただし、それぞれ六字以上、十字以内とする。

Step 3

問四　本文中の技術が道徳の代行をするとはどのような状態か。十字以上、十五字以内でまとめて書け。ただし、**配慮**という語句を必ず使うこと。

Step 3

問五　本文中に危なさとあるが、筆者はどのような危なさを予測しているのか。二十字以上、二十五字以内でまとめて書け。

【福岡県】

第三講 論理的文章の読解②

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

九州の南の海にある屋久島に、縄文杉と呼ばれる大木のあることはよく知られている。九州地方でいちばん高い宮之浦岳（一九三五メートル）を主峰にして山また山のかさなりあう屋久島のA山奥に、樹齢七千年ともいわれる老大樹が立っている。

――いまごろ、あの木の茂みは賑やかだろうなあ。

若葉の季節になると、ふっと、①あの老いた杉の茂みを思うことがある。

――いろいろな新緑にあふれている茂みに、蝶が舞い、鳥が飛びまわっていることだろう。根かたにはたくさんの虫が這っていることだろう。

ふつう杉の木には虫も鳥もすくないものだが、縄文杉にはさまざまの広葉樹が着生しているので、虫も鳥もやってくる。あの老大樹の前に立ったとき、僕ははじめ目を疑ったものだった。杉の木とは見えなかったのだ。太い幹のねじれやこぶも異様ではあったが、それよりも、葉の茂みがとても杉とは思えない豊かさで、風にさわさわと揺れていた。茂みのなかを虫も鳥も飛んでいた。

たしか二十種類ばかりの着生木が、縄文杉を足場にして育っているのだ。その大半が落葉広葉樹だ。新緑の季節にはB樹種によってさまざまな色合いの若葉を茂らせるだろう。ずいぶん大きい木も育っている。地上に下ろせば一人前の木が何本も、あの木の肩や首に乗って伸びている。

縄文杉そのものも、たくさんの種類の木々が共生している森のなかの一本の大木なのだが、縄文杉と着生木もまるでそれだけでもひとつの森のように共生している。

僕が②あの木の下で一夜を過ごしてきたのは七年ばかり前の春のことだったが、そのときよりも今のほうが、あの共生の姿に目をひかれている。

縄文杉の下での夕方と夜と朝の時間、僕は着生木をたくさん宿らせているあの木を、まるで森だなあと思いながらも、むしろ木の大きさに圧倒され、七千年という歳月に圧倒されていた。

着生木と共生しているからこその長大な生命なのではないか。そう思いだしたのは、あとで繰り返し縄文杉の姿を思い返してからのことだった。あの木がなぜ七千年を生きてきたのか。四千年、いや三千年という説もあるけれども、それはどうでもいい。とにかく数千年を生きてきたのには、たくさんの幸運がかさなっているだろう。C雨量とか地形とか、土質とか日射量とか、いろんな条件もよかったのだろう。だが、そのうえで、着生木との共生があの大木を生かしつづけているのではないかという気がする。

種類のちがういろんな落葉が、あの木の根もとには散りつづけてきたはずだ。広葉樹の落葉が多いから、腐植が早い。虫たちが寄ってきて噛(か)みくだいてもくれる。地中菌がD分解してくれる。縄文杉自身の杉葉よりもはるかに豊かな落葉が、土を育ててくれているのだ。

虫がたくさん飛びまわり、彼らの死骸も土を肥やしてくれる。その虫や着生広葉樹の花や実を食べにくる鳥たちが、しょっちゅう糞(ふん)をおとしている。糞のなかの種子がまた新しい着生木を芽生えさせもするのだが、なにより鳥の糞は最良質の肥料である。雪の季節はともかくとして、春から秋にかけては四六時中鳥たちの糞が縄文杉の根まわりの土を養っている。

着生木たちが縄文杉のおかげで生きているのはもちろんのことだが、③縄文杉もまた着生木のおかげを受けているのではないか。

（高田　宏「森へ行く日」より）

（注）着生＝植物が他のものに付着して生育すること。
腐植＝ここでは、落葉などが地中で分解されること。

1 本文中のA～Dの━━を付けた熟語のうち、熟語の構成（組み立て）が他と異なるものが一つだけある。その記号を○で囲みなさい。

A　B　C　D

2 ①あの老いた杉とあるが、次のうち、この縄文杉の説明として本文中で述べられていることがらと内容の合うものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 縄文杉の着生木はすべて落葉広葉樹であり、新緑の季節にはあざやかな緑一色の若葉を茂らせる。
イ 縄文杉は太い幹のねじれやこぶが異様ではあるが、風に揺れる豊かな葉の茂みは他の杉と同様である。
ウ 縄文杉は二十種類ほどの着生木を宿らせており、一本の木でも全体としてひとつの森のようになっている。
エ もともと杉の木には虫や鳥が集まりやすく、大きな縄文杉の葉の茂みには一年中たくさんの虫や鳥が飛んでいる。

ア　イ　ウ　エ

3 ②あの木の下で一夜を過ごしてきたとあるが、縄文杉の下で一夜を過ごしたときの筆者の様子についてまとめた次の文の□に入る内容を、**十五字程度**で書きなさい。

多くの着生木が育っている縄文杉を見た筆者は、□に強く心を打たれていた。

4　③縄文杉もまた着生木のおかげを受けているのではないかとあるが、本文中で筆者は、縄文杉はどのような点で「着生木のおかげを受けている」と述べているか。本文中のことばを使って、**五十五字程度**で書きなさい。

【大阪府】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、〔問1〕〜〔問7〕に答えなさい。※印には（注）がある。

　私たちa人間は、自然や生きものの世界からさまざまな恩恵をb受けている。その恩恵は、日本ではc古くから「自然の恵み」といわれてきた。わかりやすいのは、海の幸、山の幸として知られる魚介類や山菜など、食料となる自然のA恵みである。日本は四方を海に囲まれ、魚や貝、エビやカニなどの魚介類にめぐまれている。私たち日本人は、この海の幸をd重要な食料として生活を成り立たせている。また、日本の陸地の多くは森林におおわれ、そこでは山菜からキノコまで、多様な山の幸が得られる。これも、四季折々の食材として重要視されている。

　最近、自然の恵みは、「生態系サービス」という語に置き換えられることが多い。意味するところは基本的に同じだが、生態系サービスの方は、自然や生きものの保全や利用、管理のあり方を視野に入れた、より積極的な概念として位置づけられる。生態系サービスは、供給サービス、調節サービス、文化的サービス、基盤サービスの四つに区分される。

　供給サービスとは、食料、水、木材、医薬品原料、燃料などの供給にかかわるものである。調節サービスとは、人間が生きていく場としての環境の諸条件を調節する自然の恵みのことだ。B文化的サービスとは、生きものや自然にふれあうことによって得られる、喜びや楽しみなどの精神的な恩恵のことである。バードウォッチングで得られる楽しみは、その代表的な例だ。基盤サービスは、ほかのサービス全般を支える生態系の基本的な機能そのものといえる。植物による光合成などがそこにかかわっている。

　このように、どう呼ぶかは別にして、私たちは自然や生きものの世界から、じつにさまざまな恩恵を受けている。だが、私たちは日頃（ひごろ）、こうした恩恵をどれだけきちんと認識しているだろうか。魚や貝、あるいは澄んだ水や空気はあってあたりまえ、木々だって、伐（き）ってもまたすぐに生えてくるもの、くらいに思っている。しかし、こうした自然や生きものが織りなす世界「生物多様性」とそれがもたらす自然の恵みは、人口増加と一人あたりの消費量増加にともない、身近なところからも地球規模でも急速に失われていっている。Cあたりまえに思っていることが、あたりまえではなくなってきているのだ。

二〇一〇年一〇月、名古屋で第一〇回生物多様性条約締約国会議が開かれた。生物多様性の危機の現状が報告され、その保全や管理のあり方などが活発に議論された。その様子は、新聞やテレビなどでも広く報道され、ちょっとなじみにくい生物多様性ということばも、国民の間にどうにか浸透したかに見える。

だが、世の常として、会議が終われば関連の物事への関心は日々薄まっていく。しかし、日本や世界の今後の生物多様性の状況を考えると、薄まっていってよいものでは絶対にない。では、どのようにして関心を保っていくことができるだろうか。理屈を並べたてても、日常的には効果は少ないのではないかと思われる。ひとつのよい方法がある、と私は思っている。次のようなことだ。

私たち日本人は、食事をする前に、「いただきます」という。これは通常、農家の人たちが苦労して育て収穫したお米や野菜を食べることに対して、あるいはそうした食事ができるひとときに感謝の気持ちを込めていっている。しかし、私たちが口にしているものの多くは、たいせつな自然の恵みであり、生態系サービスの［　　］サービスにかかわるものである。私たちは、じつは古くから、こうした自然の恵みに感謝し、あるいは、ほかの生命（いのち）を犠牲にして自分の生命をつないでいることへのありがたい気持ちを表現するものとして、「いただきます」といっていたのではないだろうか。つまり、いただきます、とは、あなたの生命をありがたくいただきます、という生きものや自然への※畏敬（いけい）の念をあらわしていたのではないだろうか。それがすべてではなかったにしても、少なくともそうした意味は込められていたのではないかと思われる。

最近、内田美智子（うちだみちこ）さんの『いのちをいただく』という本に出合った。ほかの生きものの命を犠牲にして私たちの命が成り立っていることを、牛をめぐる日々のことがらの中で見事に描いた本だ。牛以外のいくつかの生きものをめぐる話も展開されている。生物多様性との関連で書かれているわけではないが、命をいただく、という意味を考えるうえでは共通したところがある。

D 現在では多くの家庭で、「いただきます」は儀礼的、あるいは単なる習慣として使われているように思われる。しかし、たちかえって、自然の恵みに感謝し、あなたの生命をありがたくいただきます、という思いをたいせつにすることは、私たちが身近な自然や地球の未来を考えていくうえで大事な一歩となるように思われる。

食事の前に、いただきます、といったことばを声に出す習慣、文化は、日本独自のものであるようだ。豊かな海の幸、山の幸のある中ではぐくまれ、そうした恵みに感謝しつつ、それを絶やすことなく利用してきた日本人の文化がもつ、すぐれた一面であるように思われる。

この、いただきます、のことばは、自然の恵みに感謝し、あなたの生命をありがたくいただきます、という意味とともに、国内外にもっと拡（ひろ）められてよいのではなかろうか。

おそらく、食後の「ごちそうさまでした」のひとことにも同様なことがあてはまる。

このささやかなひとこと、ふたことによって、生物多様性の保全が飛躍的に進むことにはならないだろうし、生命の尊厳と利用をめぐるむずかしい問題を解決することにもならないだろう。しかし、E日本や世界の人が、自然の恵みに感謝しつつ「いただきます」「ごちそうさまでした」を日常的に口にするようになれば、自然や生きものの世界は少なからずよい方向に向かうのではないかと思われる。

（樋口広芳（ひぐちひろよし）「鳥・人・自然」より……一部省略等がある。）

（注）・畏敬＝おそれ敬うこと。

Step 2

〔問1〕本文中のA恵みと品詞が同じものを〰〰を付したa～dの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

Step 2

〔問2〕本文中、B文化的サービスとは、生きものや自然にふれあうことによって得られる、喜びや楽しみなどの精神的な恩恵のことであるとありますが、そうした生きものや自然の恩恵については、多くの古典で取り上げられてきました。

次の古文を読み、あとの(1)～(3)に答えなさい。

Ⅰ 三月三日は、うらうらとのどかに照りたる。Ⅱ 桃の花の今咲きはじむる。Ⅲ 柳などをかしきこそさらなれ。Ⅳ あそれもまだ、まゆにこもりたる（芽ぶいて十分にひろがらない）はをかし。ひろごりたるはうたて（不愉快に）いぞ見ゆる。

（「枕草子」より）

(1) 文中のあそれが、指す内容を古文から抜き出して書きなさい。

(2) 文中のいぞ見ゆるには係り結びという表現が用いられ、「うたて」が強調されている。同じように係り結びが用いられている一文を、Ⅰ～Ⅳの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

(3) 筆者は、この文章全体を通して、草木のどのような様子を「をかし」と言っていますか。最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア うららかな春の日差しの下で、草木がのんびりと休んでいる姿。
イ うららかな春の日差しの下で、草木が芽を外に出そうとしない姿。
ウ うららかな春の日差しの下で、草木がようやく立派に成長した姿。
エ うららかな春の日差しの下で、草木がこれから育っていこうとする姿。

Step 3

〔問3〕本文中、Cあたりまえに思っていることが、あたりまえではなくなってきているとありますが、これはどのような状況を述べていますか。文中の言葉を用いて、四十字以内で書きなさい。（句読点やその他の符号も一字に数える。）

Step 3

〔問4〕本文中の□にあてはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア　供給　イ　調節　ウ　文化的　エ　基盤

Step 3

〔問5〕本文中、D現在では多くの家庭で、「いただきます」は儀礼的、あるいは単なる習慣として使われているとありますが、これはどのようなことを言ったものですか。最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア「いただきます」という言葉が日本人の生活に深く浸透して使われているということ。

イ「いただきます」という言葉に込められた思いが忘れられたまま使われているということ。

ウ「いただきます」という言葉を子どもへのしつけとして大人が無理やり使わせているということ。

エ「いただきます」という言葉が料理した人に対する感謝の念を欠いたまま使われているということ。

Step 3

〔問6〕 本文中、E日本や世界の人が、自然の恵みに感謝しつつ「いただきます」「ごちそうさまでした」を日常的に口にするようになれば、自然や生きものの世界は少なからずよい方向に向かうのではないかと思われるとありますが、なぜよい方向に向かうと筆者は考えていますか。その理由を述べた次の文の［　］にあてはまる表現を、文中の言葉を用いて、七十字以内で書きなさい。（句読点やその他の符号も一字に数える。）

「いただきます」「ごちそうさまでした」を日常的に口にするようになれば、［　］

Step 3

〔問7〕　本文中で取り上げられている「いただきます」「ごちそうさまでした」のように、日常生活で私たちがよく使う言葉として「おはよう」「行ってきます」「ただいま」「おやすみ」という言葉があります。

この四つの言葉の中から一つを選び、その言葉がもつ、人と人とのコミュニケーションにおける言葉の力について、あなたの体験を含めて書きなさい。

ただし、次の条件(1)、(2)にしたがうこと。

［条件］

(1)　原稿用紙の正しい使い方にしたがって書くこと。ただし、題名や自分の氏名は書かないこと。

(2)　八行以上、十行以内であること。

【和歌山県】

第四講　論理的文章の読解③

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの㈠〜㈧に答えなさい。

　太古、人類は頭で「知る」ということを、まずはものを目で「見る」ことと同一視していたと考えられる。いまでは知ることは耳で聞くこと、手で触れること、さらには行動で関(かか)わることによっても可能だとわかっているが、最初の知的認識はとくに視覚の働きから誕生したと推察することができる。1示唆深いのは、古代ギリシャでは真の知の対象はイデアとかエイドスとか呼ばれていたが、どちらも語源的には目で見ること、ものの形という言葉と同根だったということである。おそらくさらに古く、古代メソポタミアやエジプトや黄河2リュウイキの昔から、この事情は同じだったにちがいない。なぜなら知的な認識は知る［　　］と知られる客体が向かい合い、［　　］が客体に距離を置いて、見渡したり分解したり総合したりする仕事であるが、これはすぐれて視覚のおこなう営みに3ニているからである。

　そしてさらにいえば、そうした最初の知的認識を生んだ目の活動は、ほかならぬあの天空を見ることから始まったと考えてよいだろう。もちろん古代人の見るものには山も川も森も、日常の道具や収穫物もあったにちがいないが、それらはすべて視覚以外の感覚にも訴えかける存在であった。ただひとつあの大空の遠い姿だけが、日月星辰(じつげつせいしん)の形と運行だけが、手で触れることも足で分け入ることもできないままに、視覚に4鮮烈な印象を与えてくる存在であった。その天上の無限の彼方(かなた)を仰ぎ見ることによって、古代人は現実には感じられないが現実よりも、確実な存在があること、のちにイデアやエイドスと呼ばれた本質的な存在があることを、史上初めて予感する端緒を得たとすら想像できるのである。

　さらに天空の観察は人類に心の内の想像力という能力に気づかせ、その働きを飛躍的に発展させることを教えたであろう。ちなみにここでいう想像力とは夢想や幻想の力ではなく、あらゆる現実についてそれを認識の対象として統一する能力をさしている。外から与えら

れる無数の感覚刺激を形にまとめ、それに個物としての名前を与える準備をする力を意味している。たとえば球体を見てそれを丸い輪郭線で描いたとすると、球面上にはそんな輪郭線などどこにもないのだから、これは見る人の想像力の5産物だということになる。その意味で、想像力は人間があらゆる現実を認識するための基礎的な能力なのである。

だが、地上にある対象の場合は、それを確かめるために人間は別の感覚能力の助けを借りることができる。先の球体についていえば、その表面を指で撫(な)でてそれが連続する球面であることを確認することができる。そしてこの連続性の知覚を頼りにすれば、同じく連続的な輪郭線を思いつくことは容易になるはずである。ところが天空に6チる星くずが対象となると、与えられているのは光の点ばかりであって、連続する線というものを見る助けはない。思うだに驚くべきことだが、古代人はあの星くずを見てその間を想像上の線でつなぎ、白鳥や大熊(おおぐま)や神話の中の英雄など、おびただしい星座の絵を描いたのである。

そのときから数千年、人類はいまだに星座という架空の形態を手がかりにして、時間ごとに7ウツり変わる星の位置を見定めている。もっと重要なことだが、その星の位置を座標として人間は自己の位置を確認している。このことは砂漠の旅人や大洋の航海者を助けただけでなく、空想を逞(たくま)しくすれば、風景の中の相対的なものの位置とは別に、無限空間のなかの絶対的な位置という観念がありうることを、人類に教えたかもしれない。

（山崎正和(やまざきまさかず)「大停滞の時代を超えて」より）

（注）イデア・エイドス＝どちらもギリシャ語で「姿・形」の意。哲学では、「存在の本質」を表す。
日月星辰＝太陽と月と星。

㈠　文章中の〰〰部1～7について、漢字は読み仮名を書き、片仮名は漢字に改めなさい。

1　示唆
2　リュウイキ
3　ニて
4　鮮烈
5　産物
6　チる
7　ウツり

㈡　文章中の□には、いずれも「客体」の対義語が入る。「客体」の対義語を、漢字で答えなさい。

㈢　「端緒」と同じ意味を表す語を、文章中から四字で書き抜きなさい。

(四)「想像力という能力」とあるが、筆者はこれをどのような能力と考えているか。最も適切なものを、次の1～4から選び、記号で答えなさい。

1　あらゆる現実について、言葉で表現すると同時に、外界からの無数の感覚刺激を基に、夢想したり幻想したりする能力。
2　あらゆる現実について、言葉で表現する前段階で、外界からの無数の感覚刺激を認識の対象として一つにまとめる能力。
3　あらゆる現実について、言葉で表現した後に、外界からの無数の感覚刺激を的確に表現し得たかどうか分析する能力。
4　あらゆる現実について、言葉で表現した上で、外界からの無数の感覚刺激をどの程度まで統合できたか検証する能力。

□

(五)「これ」の指し示す内容を、文章中から五字で書き抜きなさい。

□□□□□

(六)「驚くべきことだが」とあるが、筆者が「驚くべきこと」と述べているのはなぜか。次の文がその理由を説明したものとなるように、[A]には四字の表現を、[B]には五字の表現を、それぞれ文章中から書き抜きなさい。

古代人は、[A]の感覚能力の助けを借りることなく、連続する[B]を用いて天空の星くずを結び付け、たくさんの星座の絵を描いたから。

A □□□□

B □□□□□

(七) 「砂漠の旅人や大洋の航海者」とあるが、この「砂漠の旅人や大洋の航海者」が置かれていた状況はどのような状況か。文章中の表現を用いて二十五字以内で説明しなさい。

(八) 前の文章で述べられている筆者の考えと合うものを、次の1～4から一つ選び、記号で答えなさい。

1 手で触れ、耳で聞くことで、古代人は、現実よりも確実な存在があることを初めて実感した。
2 天空という触れることのできないものの存在は、古代人にとって、恐怖の対象であった。
3 天空を仰ぎ見ることは、古代人が最初の知的認識能力を身に付けることにつながった。
4 古代人は、自らの足で自然の中に分け入り行動することと、知ることとを同一視した。

【山口県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

　現代は機械の精緻さが飛躍的に高まり、従来の単純反復労働を極限まで肩代わりする時代だが、そうなると人間の肉体労働も質的に変化せざるをえない。すでに徴候の見える事態だが、①もの造りは大きく二つに分かれ、それぞれ過去の単純反復労働から訣別（けつべつ）することになるだろう。一つはいうまでもなく余暇時間を埋めるホビーとしての手仕事、もう一つ重要なのは知的活動の延長としてなされる手仕事、すなわち設計図の立体化というべき試作品を造る仕事である。

　ホビーとしての手仕事は多岐にわたるが、木工、金工、料理、裁縫、機械製作にいたるまで、どれをとっても作品はつねに一品製作に終わり、しかもその一品の完成が最終目的とされるのが通常である。いいかえれば作業は目的と手段の無限連鎖から離れ、その過程それ自体が目的とされていることは明らかである。［②］作品には質的な高さが要求され、作業は苦しい緊張を③強いられるが、それは芸術制作の場合も同様であり、［④］この緊張が現在の充実をもたらしていると考えられる。現に多くの芸術活動そのものが素人（しろうと）によってホビーとして愉（たの）しまれているが、これはホビーの本質を裏側から証明するものだろう。

　これにたいして工業生産の一環としておこなわれる試作品の生産は、産業全体の流れのなかでは当然、目的・手段の長い連鎖に組みこまれている。だがこのことは科学研究を含むすべての知的活動にあてはまることであって、目を向けるべきはその営みの内部構造だろう。そして試作品製作を内部から見れば、これがほかならぬ一品製作であり、その完成が一連の知的活動の終着点であることに疑いの余地はない。試作品は表面的には設計図の立体化を目的とするように見えるが、本質的には逆に試作品が設計の正しさを検証するのであって、目的が手段によって修正を迫られることも少なくない。ここでも明白に⑤時間の意味的な逆転が促され、現在は完結した経過として充実を見せるのである。

　こうして多くの実用的な日常行動が芸術に似た時間構造を示すなかで、本来の近代芸術もまた若干の変質を蒙（こうむ）りながらも生き延びてゆくだろう。ここでは（注）ステントのいう進歩は他の知的分野よりも大きな停滞を見せ、その代わりにジャンルの多様化がAサイ限もなく進む

だろう。ステントによれば芸術の進歩とは同一性の範囲内の変化のことであり、鑑賞者の予想が⑥満たされるかぎりでの意外性のことであった。だが彼も指摘する通り、現代の先端的な芸術家は個性の発揮を競うあまり、ジャンルの同一性を破るような変化、鑑賞者の予想を裏切るほどの意外性を追い求めたのであった。生みだされるのが進歩ではなく、進歩を計る尺度そのものの変更だったために、進歩は原理的に停滞を余儀なくされた。

　これは私の定義によれば現在の充実の感覚そのものが多様化され、時間の逆転の仕方が普遍性を失ったということだが、しかしそれにもかかわらず、芸術が現在の完結の営みだという本質が変わったことを意味しない。むしろ今後、芸術は[⑦]の分野でますます広く愛好され、そのことによってジャンルの無限の多様化にも一定の歯止めがかかるかもしれない。大衆化は芸術のジャンルをも人気Bトウ票にかけることになり、親しみやすさを基準とした(注)淘汰(とうた)がおこなわれる可能性があるからである。ちなみに芸術のホビー化は万人を鑑賞者から素人芸術家に変え、結果として職業芸術家の存続を危うくする恐れもあるが、それへの対処は職業芸術家の自己努力にかかることであり、文明の危機とは無関係の問題だろう。

　それにしても⑧現代人が現在の完結と充実をいかに熱烈に求めているかは、観(み)る娯楽としてのスポーツの興隆に現れている。人気の野球やサッカーや格闘技のように、対抗試合形式のスポーツがドラマにも似た起伏を見せ、試合ごとに完結した現在をかたちづくるのはいうまでもない。面白いのは記録を争う陸上、水上の競技でさえ、歴史的な記録を競うばかりではなく、各種の競技会を開いてそのなかで勝負を決することである。生理的身体という限界を課されたスポーツの場合、歴史的な記録に永久の進歩がありえない反面、大会ごとの勝負ではその時点における現在の完結を見ることができる。現代人はそうした名勝負に喝采を送り、さながら古代人が舞踊に感じた充実を享受している。なにしろ世界の大多数の新聞において、今やスポーツ欄のページ数は政治欄のそれを抜いたというのである。

　最後にあらためて強調したいのは、(注)知識基盤社会は人間関係のうえでは社交が鍵となる社会であり、人びとが互いに顔の見えるつながりを回復する社会だということである。

　知的活動は宿命的に孤独な営みであり、偶然の「湧きあがり」によって動かされる仕事だが、そうであればこそ人は互いに有Cエキな刺激を受けやすい環境を不可欠とする。そしてそういう環境は階Dソウ構造の固定した「組織」のなかにもなく、まして顔の見えない(注)茫漠(ぼうばく)たる大衆社会のなかにもありえない。それは相互に尊敬しあえる他者によって評価を受け、個人の独立を保ちながら刺激を与えあ

う人間関係、ほかならぬ社交の交遊のなかにしか期待できないはずなのである。

　そしてこの社交の交遊それ自体がまた、じつは現存という時間の充実、完結した行動の成就（じょうじゅ）というかたちを必要としていることを忘れてはなるまい。もちろん社交は長い時間の継続を基盤とするが、そのうえに立ってそれはときに緊張したサロン(注)の昂揚（こうよう）を欠くことができない。かつて日本の茶道の世界に、「一期一会（いちごいちえ）」という戒めがあったことを思いだしてもよい。一夕の気品ある宴席にせよ、囲碁や将棋を楽しむ午後にせよ、数時間の潑溂（はつらつ）と緊迫した研究会にもせよ、滑らかに流れつつも構造を持った時間の共有が人の心を結ぶのである。そういう現在の充実をおりに触れて味わうことが、じつは明日のない無常の世を生きるよすがとなることは、茶の湯が戦乱の時代にこそ栄えたことを思ってもうなずけるだろう。

（山崎正和（やまざきまさかず）「世界文明史の試み」より）

（注）ステント――アメリカの生物学者。
淘汰――条件に合わないものを取り除くこと。
知識基盤社会――知的活動があらゆる領域の活動を支える社会。
茫漠――ぼんやりして、つかみどころのないさま。
サロン――芸術家などの社交的な集まり。

Step 2

問一　二重傍線部A～Dの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のア～エからそれぞれ一つずつ選んで、その符号を書きなさい。

A　ア　サイ心の注意を払う。　イ　無病息サイを願う。
　　ウ　サイ算がとれない。　エ　卒業後も交サイが続く。

B　ア　単トウ直入に尋ねる。　イ　意気トウ合して語り明かす。
　　ウ　対策を検トウする。　エ　会員としてトウ録する。

C　ア　趣味と実エキを兼ねる。　イ　エキ晶テレビを視聴する。
　　ウ　不エキと流行。　エ　エキ伝で優勝する。

D　ア　準備に奔ソウする。　イ　ソウ意工夫を凝らす。
　　ウ　石油を輸ソウする。　エ　深ソウ心理がわかる。

A
B
C
D

Step 2

問二　傍線部③・⑥に含まれている動詞の終止形を書きなさい。

③
⑥

Step 2

問三　傍線部①について、「もの造り」は何と何に分かれるというのか。本文中からそれぞれ八字以上十字以内で抜き出して書きなさい。

Step 3

問四　空欄②・④に入ることばの組み合わせとして適切なものを、次のア〜エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　②　たとえ　④　さらに
イ　②　たしかに　④　なぜなら
ウ　②　もちろん　④　むしろ
エ　②　すなわち　④　まして

Step 3

問五　傍線部⑤について、「もの造り」における「時間の意味的な逆転」を説明した次の文の空欄に入る最も適切なことばを、a・bは【A群】のア～エから、cは【B群】のオ～クからそれぞれ一つずつ選んで、その符号を書きなさい。

従来の単純反復労働によるもの造りにおいては、［a］は［b］を達成するためのものだったが、現代のもの造りにおいては［c］ということ。

【A群】

ア　a　作業過程という手段　　b　完成という目的
イ　a　知的活動という手段　　b　作業過程という目的
ウ　a　完成という目的　　b　作業過程という手段
エ　a　作業過程という目的　　b　知的活動という手段

【B群】

オ　達成された目的が次の目的を達成するための手段となり、それが繰り返されるようになる
カ　手段が目的から切り離され、目的に到達するまでの見通しを立てることが困難になる
キ　手段そのものの価値が高まり、手段が目的となることや、手段によって目的が見直されることがある
ク　目的と手段が入れ替わり、手段そのものが重要視され、目的を達成することには価値がなくなる

a・b［　　］

c［　　］

Step 3

問六　空欄⑦に入る適切なことばを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　鑑賞　　イ　産業　　ウ　職業芸術　　エ　ホビー

Step 3

問七　傍線部⑧について、「現在の完結と充実」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　もの造りにおける一つの作品の製作と同様に、スポーツにおいても試合や競技会ごとに勝負を決するまでの時間が、変化に富んだ展開により、観る者にとって充実したものになるということ。

イ　芸術のジャンルの多様化と同様に、スポーツにおいても様々な種目で競技者が個性を発揮することで、再現することのできない充実した勝負が繰り広げられ、大衆を熱狂させるということ。

ウ　芸術の大衆化と同様に、スポーツが観る娯楽として大衆に親しまれるようになった結果、歴史的な記録よりも人気に左右されるようになり、かえってそれぞれの大会が充実を見せるということ。

エ　もの造りにおける作業と同様に、スポーツにおいても大会に至るまでの過程が重要な意味を持つようになり、観る者の予想を裏切るドラマのような名勝負が、観る者に充実をもたらすということ。

問八　本文に述べられている内容として最も適切なものを、次のア〜エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　現代社会では他者との心の結びつきが失われてしまったので、顔の見える人間関係を回復させるために、茶の湯などの伝統的な交遊の場が必要である。

イ　知的活動は偶然が影響する孤独な営みであるからこそ、互いに尊敬しあい刺激を与えあう人間関係の中で、充実した時間を共有することが求められる。

ウ　現代では顔の見えない大衆社会の中に個性が埋もれてしまっているので、知的活動を充実させ、個人としての独立を保つことが求められる。

エ　現代の人間関係は緊張を強いられることが多いため、囲碁や将棋など仕事以外の場における顔の見える交流を通じて、余暇時間を充実させる必要がある。

□

【兵庫県】

〈*Note*〉

第五講　論理的文章の読解④

Step 1

一　次の文章を読んで、1〜7の問いに答えなさい。（1〜13は、それぞれ段落を示す番号である。）

1　日本人の伝統的な文化観に「見立て」がある。日本人は、この見立てという比喩（ひゆ）的な美意識が好きである。

2　①見立てとは、あるものを別のものになぞらえることである。つまり、ある状況を、それとは別の状況や物事の様子からa見て取ることである。日本文化には、この見立ての表現が、②多岐にわたって存在する。

3　例えば、日本独自の造園に枯山水（かれさんすい）がある。植物や水を一切b用いず、石や砂だけで自然を表現する。ここでは、石は山を表し、砂や小石は大海原を表現する。［A］、落語では、噺家（はなしか）が手ぬぐい一本を用いて様々な情景を表現し、客もこれを想像しながら見立てを楽しむ。

4　見立てという切り口から日本の文化を総覧すると、その理解なしに日本文化の真の理解は得られないと言ってよいほど、見立ての表現は、数多く存在する。

5　私たちの祖先は、大陸文化を移入して以来、徐々に独自の美意識に目覚めて日本文化を作り上げてきた。その中でも、特に日本文化に大きな影響を与えたのが見立てであったと言える。日本文化には、見立てのかたちに託した美学が多く息づく。日本人の日常生活には、古くから、縁起を担（かつ）ぎ、祈願を込めた様々な見立てのかたちが取り入れられている。単に形状が似ているという理由で、また、色や語呂（ごろ）合わせから、祝意を表すものも多くある。

6　正月のおせち料理を見ても、見立てのオンパレードである。昆布は巻き物に似ていることから、文化・教養を表す。きんとんは金色で、［B］、財の見立てである。黒豆はまめまめしく働くという語呂合わせから勤労を、数の子は子宝を、鯛（たい）は「めでたい」から、とい

うように見立てづくしである。

7 茶の湯の茶室は、千利休（せんのりきゅう）（注1）が草庵（そうあん）と呼んでいるように、簡素な造りであった。利休は、できる限り③野趣に富んだ演出を心がけ、壁はわらがむきだしの荒壁のままで、天井にはいぶし（注2）たすす竹を、床柱にはゆがんだままの木を用いた。さながら洞窟（どうくつ）のような風情（ふぜい）である。これらはすべて、茶室という閉じられた住空間に、大自然の姿を再現するための演出と言える。

8 このように、④日本人は、古くからありとあらゆる見立てに囲まれながら生きてきたと言ってもよいだろう。

9 先に、おせち料理における見立ての例を見た。おせち料理にとどまらず、日本料理には、見立てを目で楽しみながら味わうといった、他国にはあまり見られない料理の慣習がある。色とりどりの旬（しゅん）の食材と陶器や漆器などによる、かたちや色柄の組み合わせは見事というほかない。

10 最近、アニメ、ゲームなど、日本発の大衆文化が「クール・ジャパン（注3）」として世界中から好感をもって受け入れられている。クール・ジャパンの流行によって、伝統的な日本文化が世界から注目を c 浴びているが、このことには日本料理も一役買っている。日本料理は、色かたちや盛りつけに心を砕いており、食後のスイーツも、和菓子ならば、四季おりおりの花鳥風月に見立てた細工や工夫が見られ、情緒深さを感じさせてくれる。

11 このように、日本独自の見立てという美意識は、対象をストレートに風流とかきれいなどとは表現せず、別のものの様子をその対象に見立てることによって間接的に美を表現する高度な方法で表されてきた。この間接的な方法によって表されてきた見立てという美意識は、日本人がもっている粋（いき）という美意識につながっているのではないだろうか。

12 粋は、上品で優雅な感覚の上に、あでやかさとしゃれ心がとけ合って生まれた日本人の美意識であり、私たちの祖先は、生活の中に、常に粋を求め続けてきた。季節の花を生け、四季の花々の文様で d 飾られた衣装を身に付け、色やかたち、素材などを楽しむ食器で食事をする。自然の美を身の回りに再現して見立てを楽しむことに心を砕いて生活をしてきたのである。

13 今、見立ての粋という日本人の美意識は、現代ファッションやデザインなどに生かされ、魅力的なメイド・イン・ジャパンが生み出されている。現在、日本文化が世界から注目を浴びていることには、こうした日本人の美意識が深く関与しているのではないだろうか。

（三井秀樹「かたちの日本美　和のデザイン学」より）

（注1）草庵＝わら、かやなどで屋根をふいた小さな家。
（注2）いぶしたすす竹＝煙を当ててすすで黒くした竹。
（注3）クール・ジャパン＝海外で評価されている日本文化を指す言葉。クールは、格好がよい、すばらしい、などの意味。

1　═線a「見」、b「用い」、c「浴び」、d「飾ら」の動詞の中から、活用の種類の異なるものを一つ選び、その記号を書け。また、一つだけ活用の種類が異なるものの活用の種類として適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を書け。

ア　五段活用　イ　上一段活用　ウ　下一段活用　エ　カ行変格活用　オ　サ行変格活用

異なるものの記号 □　活用の種類の記号 □

2　3段落の［A］、6段落の［B］にそれぞれ当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

ア　A　さらに　B　むしろ
イ　A　さて　B　なぜなら
ウ　A　しかし　B　いわば
エ　A　また　B　すなわち

□

3　2段落の――線②「多岐にわたって」とあるが、「多岐にわたる」の意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

ア　他との違いがきわ立っている。
イ　大勢の人から期待されている。
ウ　いろいろな方面に及んでいる。
エ　想像できる範囲を超えている。

4　7段落の――線③「野趣」の「野」は、「人の手が加わっていない」の意味で使われているが、漢字の「野」には、そのほかに「ⓐ広々とした土地」「ⓑ荒っぽい」「ⓒ範囲」「ⓓ大それた」などの意味がある。次のア～エの熟語のうち、「ⓒ範囲」の意味で使われている「野」を含むものを一つ選び、その記号を書け。

ア　粗野　　イ　視野　　ウ　野草　　エ　野望

5　[2]段落の――線①「見立てとは、あるものを別のものになぞらえることである。」について、次の(1)、(2)の問いに答えよ。

(1)　本文に述べられている「枯山水」「茶の湯」の見立てについてまとめた次の表の[a]、[b]に当てはまる最も適当な言葉を書け。ただし、[a]は[1]～[4]段落の文中から、[b]は[5]～[8]段落の文中から、それぞれ**三字**でそのまま抜き出して書くこと。

〈何を何に見立てているか〉

枯山水の場合	「石」を「山」に、「砂や小石」を「[a]」に見立てている。
茶の湯の場合	「茶室」を「[b]」に見立てている。

a □□□

b □□□

(2)　「見立て」について、本文の趣旨に添って述べた次の文章の[c]、[d]に当てはまる適当な言葉を書け。ただし、[c]は、[8]～[13]段落の文中から**十字**でそのまま抜き出して書くこと。また、[d]は、最も適当な言葉を、[8]～[13]段落の文中の言葉を使って、**十五字**以上**二十字**以内で書くこと。

見立てとは、日本文化に大きな影響を与えてきた日本人の美意識である。この美意識は、情景や季節の風物などを[c]のではなく、それとは異なるものを用いて[d]ことによって表されてきた。

c □□□□□□□□□□

d □□□□□□□□□□

6　8段落の――線④「日本人は、古くからありとあらゆる見立てに囲まれながら生きてきた」とあるが、日本人の生活の中に多くの見立てが存在するのは、日本人が、昔から、衣食住の様々な場面で知恵を絞り、工夫を重ねてきたことによる。日本人は、どのようなことに知恵を絞り、工夫を重ねてきたのか。最も適当な言葉を、9～13段落の文中から**二十一字**でそのまま抜き出して書け。

（こと。）

7　本文に述べられていることと最もよく合っているものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

ア　黒豆や鯛は、色や形状のよさから、縁起のよいものとしておせち料理に取り入れられている。
イ　日本の伝統文化が世界に認められたことで、アニメなど、日本の大衆文化が注目され始めた。
ウ　見た目の美しさ以上にその上品な味付けにより、日本料理は人々から高い評価を受けてきた。
エ　現代の日本のファッションやデザインには、日本人が求め続けてきた粋の心が息づいている。

【愛媛県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

言葉遣いも大事ですが、もっと大切なのは、心です。

いくら「〜でございますわよ」などと丁寧な言葉を使っても、つっけんどんな言い方をしたら、冷たい言葉として響きます。逆に、Aたとえ少々言い回しが間違っていても、思いやりに満ちた言い方ならば、相手の心にB温かく届くものになるでしょう。

言葉以前に、相手にどのような心で対するか、その気遣いや姿勢を見つめ直すことが、①良い言葉遣いを生み出します。

確かに、言葉が伝えるものは情報です。しかし、言葉は単に情報が通じればいいというものではありません。〝互いに気持ちよく言葉を交わすことができるようにしよう〟――最近、そういう気持ちが薄れ、②ぞんざいな言い方をしても、まったく悪いと思っていない人を見掛けますが、とても悲しくなります。

言葉遣いに配慮することは、相手を思いやる気遣いから生まれます。言葉は「形」ですが、その元にある心遣いが、重要なのです。

［Ⅰ］適切な言葉遣いができる「会話の達人」になるためには、Cやはり努力の積み重ねが必要です。その第一歩は、言葉遣いに意識的になること。自分の言葉はもちろんのこと、他人の言葉遣い、書物やメディアなどに出てくる表現も意識することです。そして、D特に人とやりとりする中から大いに学び、改善すべきところは改善し、分からないことは辞書などで調べるなどして、言葉遣いを磨くことです。

言葉遣いを良くするためには、やはり敬語の使い方がポイントになります。

敬語といっても、丁寧語、尊敬語、謙譲語、また丁重語、美化語という分類もあり、使い方のルールや仕組みがあります。これらを身に付けていく上で大切なことは、二つの基本を押さえておくことです。

第一に、敬語は［③］表現であるということです。そして、第二に、敬語は人と人との距離を保つための表現であるということです。

第一の点について、例えば「お洋服」と言いますが、これは服を敬って言っているのではなく、持ち主を敬っている表現です。また、行

くの尊敬語で「いらっしゃる」と言いますが、これも行くという行為ではなく、行為する人を敬っている表現です。

「あなたのお洋服」とは言っても、「お前のお洋服」とは言いません。「先生がいらっしゃる」とは言っても「あいつがいらっしゃる」とは言いません。これは、主語と述語の不整合というよりも、〝お前〟とか〝あいつ〟呼ばわりする人は、そもそも敬っていないので、その持ち物や動作なども敬語の対象にはならない、ということです。

第二の点ですが、敬語は、敬うべき人に対してだけ使うものではなく、対等・水平の関係の人に対しても用います。敬語の本質は、相手との距離を保つことにあるのです。

例えば初対面の人には、まずは互いに敬語を使って会話します。これは、知らない者同士、なれなれしくしてはいけない間柄ですから、敬語で距離を保つわけです。そして、学校でも職場でも近所でも、親しくなるにつれて、うち解けた言葉遣い、敬語を使わない会話へと変化していきます。

〝です・ます調〟の言葉遣いを、そんなに早くやめていいのか、あるいは、これ以上続けてよいものか、よく相手や周囲の状況を考えてタイミングを計る、そういう聡明（そうめい）さも備えたいものです。

敬語表現を使いこなせば、相手との距離を縮めたり伸ばしたりすることが可能になります。また言葉の変化に敏感な人は、人との距離感も上手にコントロールできるのです。

（北原保雄「日本語の常識アラカルト」より）

Step 2

1　本文中のA〜Dの――を付けた語のうち、一つだけ他と品詞の異なるものがある。その記号を○で囲みなさい。

A　B　C　D

Step 2

2 ①良い言葉遣いを生み出しますとあるが、本文中で筆者は、良い言葉遣いを生み出すためには、何が重要であると述べているか。その内容についてまとめた次の文の[　]に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中から十字で抜き出しなさい。

良い言葉遣いを生み出すためには、言葉そのものも大切であるが、その元にある[　]や相手に対する姿勢がより重要である。

Step 2

3 ②ぞんざいなとあるが、次のうち、このことばの本文中での意味として最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　落ち着きのない　　イ　分かりにくい　　ウ　無礼な　　エ　思わせぶりな

ア　イ　ウ　エ

Step 2

4 次のうち、[③]に入れるのに最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　主語に用いるのではなく、つねに述語に用いる
イ　モノや行為を敬うのではなく、あくまで人を敬う
ウ　モノを対象とするのではなく、行為や動作を対象とする
エ　敬うべき人にだけ使うのではなく、対等・水平の関係の人にも使う

ア　イ　ウ　エ

Step 3

5　本文中で筆者は、対等・水平の関係の人に対してどのように敬語表現を使い分けていけばよいと述べているか。その内容についてまとめた次の文の a に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中から**八字**で抜き出しなさい。また、b に入る内容を、「敬語」という語を用いて、具体的に**六十字程度**で書きなさい。

a を考慮しながら、b というように言葉を使い分けていけばよい。

a

b

Step 3

6　本文中のⅠで示した箇所では、適切な言葉遣いができるようになるための努力について、筆者の考えが述べられています。この筆者の考えをふまえて、あなたなら、適切な言葉遣いができるようになるために、今後どのようなことに取り組んでいきたいと考えますか。次の条件1・2にしたがって、あなたの考えをあとの原稿用紙に**三百字以内**で書きなさい。

条件1　最初に、あなたやあなたの周りの人たちの言葉遣いに対するあなたの考えを書くこと。

条件2　次に、最初に書いたあなたの考えをふまえて、あなたが今後取り組んでいきたいことを一つあげ、その取組みが適切な言葉遣いにどのようにつながるのかについて書くこと。

・原稿用紙の正しい使い方にしたがって書くこと。

・題名や氏名は書かないで、本文から書き始めること。

100

【大阪府】

300

200

第六講　論理的文章の読解⑤

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「使い続けるにつれて美しくなる」なんていうと、ふつうは経年変化の味わいを楽しむ骨董（こっとう）的なイメージが連想されるかと思いますが、もう少しそれより手前の部分を考えてみましょう。

「使う」、「使いこなす」という言い方がありますが、これは「見る」という作業とセットのいとなみです。柳（やなぎ）はそれを①「用の美」という言葉で表現しました。

柳は従来の美しさの価値基準の中で欠けていたものとして、用の世界の意義を唱えました。「用」とは「使用」の「用」です。単に見て観賞するのではなく、使用して見出（みいだ）される美しさがあると考えたのです。しかし、そのことは単に美の新しい領域を開拓したということに尽きるわけではありません。もう少し広い意味で、美だけでなく、様々な意味での生活の全体性の回復というのが民藝（みんげい）の「用の美」という言葉の中に込められているのではないでしょうか。新しい美の範疇（はんちゅう）としての「用の美」ではなくて、生活あるいは人間存在の全体性の回復です。そういう意味で、用の美とは、使うことと見ることの一体化として理解することができるでしょう。

「使う」というのは時間の経過を念頭に置いている行為です。様々なシチュエーション、バリエーションがあります。「使う」ときには、一つの目的に対して一つの道具と考えがちですが、一つの物が様々な用途を秘めていたり、あるいは同じ用途がいろんな物に解放されていたり、単なる一対一の関係性ではなくて、いろんなバリエーションを秘めた世界です。それを可能にしているのは時間という軸です。たとえば、かつてはAという用途に使われたものが、あるときにBという用途を発見されることで、さらに増幅された物の見方が培（つちか）われるようになることもあります。つまり、発見の過程、プロセスが「使う」「使いこなす」ということです。

それをソフィスティケートしたのが、茶道のいわゆる「見立て」文化でしょう。農家が種を保存するために使っていた壺（つぼ）が、美しい水指（みずさし）として見立てられるとか、そういった時間軸上のズレみたいなものが出て来ることがあります。

用の美は、言葉としては柳によって広められたものですが、その発想自体は、柳自身が繰り返し言及しているように、実は茶道において体系化されたものとしてありました。お茶の眼目の一つは物を使いこなすということです。単に作法や平面的な茶室の美しさではなくて、その中で物が物として生き生きしてくるために、使うという行為の意義が問わ②れてきました。ただし、それはあくまで茶室という非日常的な空間に閉じ込められていました。民藝は、それを日常化したということができるでしょう。

一方で、使いこなすということは、人と物との関係の親密さを表すものでもあります。例えば、簡単な例でいうと、メガネをかけているときに、メガネのことを気にする人っていません。物の機能性が本当に発揮されているときっていうのは、その存在が意識にのぼらないくらいに自分にフィットしている。

柳と同年生まれの思想家マルティン・ハイデガーもまた、こうした日常の物との関わりの本質を追究しました。彼の道具論にならうわけではありませんが、道具という、物として人間が最も身近に接している存在というのは、実は日常的には意識にのぼっていません。距離的には自分から最も近いところにあるのですが、意識の部分では、むしろ忘れられているくらいに身近な存在。むしろそれくらいまで使いこなさないと、物の本当の価値は見えてこない。

「用の美」というのは裏腹で、「美」といってしまうと、常にその美しさを愛（め）でていないといけないとか、ある種、［③］、対象化しているイメージがありますが、実はそういうことではなくて、どれだけその美が忘れられているかに本義があるのです。

その発想で考えた場合、誰か他人が与えた物の役割、物の意味付けに束縛されないで、自分と物との距離感をゼロから取り戻すことで、見立て的な使いこなしが可能になってくると思います。④<u>与えられた、規格化された距離感でしか物と出会えない</u>のであれば、新しい意味付けなんて不可能になります。自分にフィットした自分の新しい距離感ということを念頭に置いたとき、同じ物が別の意味付けや用途をもつことも可能になってくるし、そういう自由な広がりが出て来る。

それはもちろん、物理的に近ければいいという問題ではなくて、自分との親密さの問題であり、「用の美」もつまるところは、さきほどの自己化ということにつながります。

（鞍田　崇「使い続けるにつれて美しくなる」より）

（注）柳＝柳宗悦（むねよし）。思想家、美術評論家。
民藝＝民衆の生活の中から生まれ、その地方に伝えられてきた実用的な工芸。
範疇＝領域。
ソフィスティケートした＝洗練した。

1　次のうち、①「用の美」について本文中で述べられていることがらとして、最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア「用の美」は、従来の美しさの価値基準の中で欠けていた考え方であり、人間存在の全体性を回復することによって一般に広まった概念である。

イ「用の美」は、日常生活の中で見出される美であり、広々とした空間に置かれることで物が生き生きとする様子をとらえた新たな美の領域である。

ウ「用の美」は、使用される中で見出される美のことであり、新たな美の領域を開拓しただけでなく、生活の全体性の回復にもつながる発想である。

エ「用の美」は、使うことと見ることが一体化した考え方であり、物を使いこなそうとする茶道の本義から柳が着想を得て体系化したものである。

ア	イ	ウ	エ

2　次のうち、本文中の②れと同じ意味で使われている助動詞を含む一文を一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　私ならこの壁を越えられる。　　イ　道に捨てられているごみを拾う。

ウ　先生は何時に出発されますか。　エ　昔のことが自然と思い出された。

ア　イ　ウ　エ

3　本文中の ③ には、「対象化」と意味の近いことばが入る。次のうち、 ③ に入れるのに最も適していることばはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア　客観化　　イ　実用化　　ウ　活性化　　エ　多様化

ア　イ　ウ　エ

4　④与えられた、規格化された距離感でしか物と出会えないとあるが、これは本文中ではどのようなことだと述べられているか。その内容についてまとめた次の文の a 、 b に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中から抜き出しなさい。ただし、 a は**七字**、 b は**十九字**で抜き出すこと。

ある物とその用途とが a にあると考え、物を使うときには b でしか物をとらえることができないということ。

a

b

5　本文中で筆者は、物を「使いこなす」とはどのようにすることであると述べているか。その内容をまとめた次の文の□に入る内容を、「発見」「親密」という二語を用いて、**七十五字程度**で書きなさい。ただし、解答するときには、これらのことばにかぎかっこ（「　」）を**付ける必要はない**。

物を使いこなすとは、□ということである。

【大阪府】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、〔問1〕～〔問6〕に答えなさい。※印には（注）がある。

> 布について研究をしていた筆者は、鳥取市（とっとりし）で一人の紙漉（す）き職人と知り合った。戦後、工業化の波が押し寄せる中で、その職人は、手漉き和紙の仕事を時代遅れと考え、やめようとしたこともあった。しかし、「和紙は美しい」と考える人がいることを知って、この仕事を続けていこうと決意し、手漉き和紙と機械漉き和紙とを併存させ、技術保存と経営を両立させた。筆者は、その職人の話を聞く中で、「手仕事」について考えをめぐらせた。

この地域に来るようになって、かつては多くの村で布の手仕事と紙漉きの手仕事が共存していたのではないか、と思うようになった。少なくとも職人さんたちにとって、布であろうと紙であろうと、「手仕事」という<u>A価値観</u>は今や無視することができない。この紙漉きの工房で目にし、手に触れ、職人さんから話を聞くたびに、私は「手仕事とは何か」について、単に本を読む時とは違った考えを獲得する。

まず第一に、「手仕事」とは手のする仕事である以上に、「身体」の仕事である。ある時職人さんが流し漉きに使う木製の水槽を背に、「結局機械ではできないからね」とぽつりと言った。どういう意味かと思い、問いを重ねてゆくと、つまりこういうことだった。流し漉き（この方法は日本独特のもの）をおこなう時は、網を張った枠を両手でつかんで、水の中で何度も前後に振る。腰を軸にしたたいへんな仕事だ。時間もかかる。そこで、これを機械化してみようとした。前後に振るのだから、枠をつかんで前後に振る機械さえ作ればいいのである。まったく同じ材料で機械にやらせてみた。しかし、できあがった紙を破ってみて驚いたという。見た目は変わらない。一方向にも強い。しかし他の方向から切ると、簡単に破れてしまうのだ。手で漉いた紙は、どこから破こうとしても簡単に破くことはできない。手漉き和紙で作った江戸の本を見ている私にも、その「<u>B容易には破けない</u>」という感覚がわかる。

なぜこういうことになるのか。人間は腕だけ前後に動かしているつもりでも、じつは身体全体が左右にも上下にも斜めにも、微妙に動

いているのである。紙の繊維は動きによってからまってゆく。あらゆる方向に動く繊維はあらゆる方向にからみ合い、一方向にしか動かない繊維は一方向にしかからみ合わない。「手仕事」とはつまり手の仕事ではなく、全身のしている仕事なのである。

　またこういうことでもあった。前後に動く機械が枠を動かしても、そこには眼がついていない。たとえカメラをつけたとしても、何を見るべきかをレンズは知らない。しかし職人は腕を動かしながら、水の中で浮いたり沈んだりしている紙の繊維と、それ以外の要らないごみ類を見分けているのだという。そして水の中を上下させて、要らないものが枠に入らないよう、自然に避けている。この動きは機械にとっては不可能に近いが、人間にとってはさほどの苦労ではない。

　この、あらゆる方向に不規則に動きながら、小さな不要物を見分けて避ける、という仕事を機械にやらせたらどうなるか。今のコンピュータ技術ならあるていど可能かも知れない。しかしとてつもない費用がかかる。機械化の目的はコストダウンであるはずなので、研究開発と設備導入に費用がかかることは、仕事として何の［　　］もないことになる、と。職人さんはそう話す。

　第二に、「手仕事」とは自然力を征服することではなくて、C自然の偶然性に身をゆだねることである。どんなに熟練しても自然の不規則性を除くことはできず、職人はむしろそのことを「もの」の中に、「もの」の個性として取り込んでしまう。

　たとえば、様々な段階が機械化可能である。紙漉きの場合、紙を漉き上げると、その次には水を切る、乾かす、という作業がある。水を切るには重ねた紙の上に板を置き、石を置いて何日か放置する。もっと早くやりたいなら、いっきに押すためのプレス機を使う。しかし、このようにして押す時間を短縮すればするほど、紙は柔らかさを失い、一様になる。

　干す時には、江戸時代だったら板に張って天日で乾かす。今では、巨大なステンレス板を熱して、そこに貼り付ける。これもまた、時間が短縮されたぶんだけ、紙は風合いを失う。このような機械化のプロセスが各段階で重なってゆけば、当然、そこにはまったく違うものが現れるのである。その違いは、一方が空気の湿気や風や石の重さや太陽の状態など、コントロールしきれないものに紙が身をゆだねている状態である。その結果として紙のもつ風合いつまり個性が現れるのだが、プレス機とステンレス板を使うことで、その風合いは一様になるのだ。

　このことは布の場合にはもっと顕著だ。糸を紡（つむ）ぎ出す段階でそれが「手紡ぎ」であるなら、すでに人間の身体の微細なリズムによるムラが生じている。機織りの段階でそれが「手織り」であるなら、一回ごとの力のいれ具合の不規則性に左右されて、糸の間隔はムラが出

る。さらに糸や布の染色段階では、それが植物染料であるなら、使う個々の木や草の生産地、育ち具合、個性、煮た時間、煮た時の燃料の種類、染色した季節や時間帯、※媒染の量、漬けた時間と回数によって、同じものが二度とできないほどの違いを生じる。すべて、ものごとが「自然」の側にゆだねられているからであり、手仕事はそれを避けようがない。

第三に、「手仕事」とは、自然とひとりの人間のかかわりによって、あらゆる物を生み出すことのできる仕事をいう。あいだに他の何もののの介在も必要とせず、一個の人間が自然に立ち向かうことで充分、ものを作り出すことのできる、D<u>その方法</u>をいうのである。紙漉きの職人さんが、「僕が無人島に漂流したら、きっと紙を漉くと思う」とぽつりと言ったことがある。「ほら、元日本兵の※横井さんという人は※テーラーだったから、森の中で様々なものを縫い合わせて使っていたよね。僕だったら木から繊維をとって煮て、それで紙を漉いて、そこからいろいろなものを作ると思うな。どんな繊維でもできるんだから」と。

かつて紙は衣類にも籠にも物入れや簞笥にも建物にも使った。なるほど紙を漉けばたいていのものは作れるだろう。もしそれが機織り職人であれば、やはりどんな植物からでも糸を紡ぎ、立っている木で簡単な織り機を作り、そこからあらゆる生活必需品を作るだろう。手仕事とはこうして、単に「手でする仕事」という意味ではなく、一方ではおのれの全身と、もう一方では自然そのものと、深くかかわってする仕事のことをいうのである。

第四に、「手仕事」によって作られたものの特徴とはすでに見たように「素朴な味わい」などではなく、じつは本来の生産現場では、機械製よりはるかに精巧で丈夫なものを結果する。ただしそこには「手間」と「時間」という、近代ではもっとも贅沢なものが入っているのだ。

（田中優子「布のちから　江戸から現在へ」より……一部省略等がある。）

（注）・媒染＝ここでは、染料と繊維とを結びつける薬剤のこと。
・横井さんという人＝太平洋戦争終結後も二十八年間、グアム島のジャングルで生活していた横井庄一氏。
・テーラー＝男子服専門の仕立て業。

Step 2

〔問1〕本文中、A価値観とありますが、これと同じ意味で使われている「観」を含む熟語を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　観客　　イ　景観　　ウ　人生観　　エ　観光地

Step 2

〔問2〕本文中、B容易には破けないとありますが、手漉き和紙が「容易には破けない」のはなぜですか。その理由を文中の言葉を用いて、簡潔に二つ書きなさい。

Step 2

〔問3〕本文中の□にあてはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア　メリット　　イ　リスク　　ウ　ハードル　　エ　チャンス

Step 3

〔問4〕 本文中、C 自然の偶然性に身をゆだねるとありますが、紙漉きの場合、「自然の偶然性」には、具体的にどのようなものがあると筆者は考えていますか。文中から二十字でそのまま抜き出して書きなさい。

Step 3

〔問5〕 本文中、D その方法とありますが、これは機織り職人の場合、どうすることですか。文中の言葉を用いて、五十字以内で書きなさい。（句読点やその他の符号も一字に数える。）

Step 3

〔問6〕 本文中、手仕事の価値を筆者はどのように考えていますか。筆者の考えとして、最も適切なものを、次のア〜エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 作り手が、多くの時間をかけて自然の不規則性を完全に取り除き、手間を惜しまず、おのれの身体すべてを使って、精巧で丈夫なものを作り出すこと。

イ 作り手が、自然そのものと深くかかわりながら、自然を支配し、おのれの身体すべてを用いて、多くの手間と時間をかけ、精巧で丈夫なものを作り出すこと。

ウ 作り手が、自然と同化し、その中にある魅力を取り入れながら、おのれの全身を使い、手間と時間を費やすことによって、均一かつ精巧で丈夫なものを作り出すこと。

エ 作り手が、おのれの全身を使って、自然そのものと深くかかわり、その不規則性を個性として取り入れながら、手間と時間をかけ、精巧で丈夫なものを作り出すこと。

□

【和歌山県】

〈Note〉

第七講　論理的文章の読解⑥

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

新しいことを発見する力をつけるには、いま、専門の本だけを読んではいけないのである。いろんな本を、手当たり次第読む。乱読である。そうすると、読む側の頭に眠っていた関心とひびき合う考えに、偶然の出会いをする。まず、何より不思議な喜びを覚える。おもしろいと感じる。新しいものを見つけたという気がする。

これが、小さいながらセレンディピティである。自分の専門とする分野の本を読んでいたのでは決しておこらないことが、乱読で得られる。

ⓐ

近代の人間は、日本だけでなく、どこの国においても、活字の方が話すことばより、高級であるという考え方にとらわれている。学問のある人間は、本を多く読んでいる。学問のない人、本を読まない人は、耳学問だといって軽蔑（けいべつ）される。

頭のはたらきから言えば、話すのは書く以上に難しいらしい。ただ、書くには読み書きの技術を学ぶ必要があり、かつてそういうことを学ぶ人が少なかったため、多くはあきらめたのである。

知的活動として話すことはきわめて重要なものである。ときには、文章を書く以上に価値のあることもある。活字文化によってそのことがかくれてしまってきたのである。

話す、といっても、ひとりごとは別である。ひとりごとは、ことばらしいことばではない。相手がいるときの話は力をもっている。話すことばによる知的活動は、文字表現を支える論理とは異なるルールを求める。それを結晶させたのが、弁証法（注①）と呼ばれる。これは、独語（注②）、執筆にあたっての個人的なことばでなく、コミュニケーションをベースにしていて創造的である。

三人以上が集まって話し合う、おしゃべりをするというのは、いかにも低次に生活的で、知的活動とは考えられないのが普通である。おしゃべりはムダ話としてバカにされている。

果たしてそうであろうか、と考えるところから活字文化とは違った新しい文化が生まれる。

数人のものがクラブ[注③]のようなものをこしらえる。めいめいが違った仕事、専門をもっていることが望ましい。同業者だけというのは多く不毛である。異業種の人ばかりの集まりだと、めいめいが思う存分なことを言える。ときには自分でも考えたことがなかったようなことが、座の(あ)雰囲気にあおられて飛び出すかもしれない。これも、セレンディピティの一部だったりする。

ひとりひとりの言うことは、形式的論理[注④]などは関係のない思考の(い)だんぺんである。同席の人たちがめいめいそういう点のような思考をふりまくから、［　　］小世界がひらける。いろいろな種類のアイデンティティ[注⑤]の星のかがやく夜空のようだと考えられる。半分は意識下にあった関心も星のように飛び出るかもしれない。それが偶然に結び合って、爆発するということがおこる。

知的雑談でするどい興味をかき立てられるのは、小さなセレンディピティがおこっているのである。そういうセレンディピティなら普通の人間でもときどき経験することができる。「きょうの会、おもしろかった。」とつぶやくようだったら、小さいながらセレンディピティがおこっていたのである。

乱読のセレンディピティがあると同じように乱談にもセレンディピティがある。

（外山滋比古（とやましげひこ）「聴覚思考」より）

（注）
① 対話や弁論の技術。
② ここでは、ひとりごと。
③ 共通の趣味などを楽しむための集まり。
④ ここでは、結論に至るまでの道すじ。
⑤ 他とはっきり区別される個性。

問一　二重傍線（‖）部㋐の漢字に読みがなをつけ、㋑のひらがなを漢字に直しなさい。

㋐

㋑

問二　次のア～エの文中の「の」の中から、本文中の波線（〰）部と同じ意味・用法のものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　月の沈むところを見る。　イ　パリは花の都と呼ばれる。

ウ　彼女は本を読むのが速い。　エ　雪の降る日はとても寒い。

問三　本文中のⓐで示した部分には、傍線（――）部の理由について、筆者の考えの要点が述べられている一文がある。その一文の、最初の五字を抜き出しなさい。

問四　次のア～エの中から、本文中の□の中に補う言葉として、最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　平然たる　イ　必然たる　ウ　整然たる　エ　雑然たる

問五　次のア～エの中から、本文の表現の特徴を説明したものとして、最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　全文を通じて、主語と述語、修飾語と被修飾語の倒置が多くみられる。
イ　文末の表現に常体を交えることなく、一貫して敬体を用いて表現している。
ウ　論を展開していく過程で、具体例や比喩表現を用いて説明を補足している。
エ　五音や七音の平易な和語を連続して用いることで、文章全体にリズム感を出している。

問六　筆者は、セレンディピティとはどのようなことだと述べているか。本文中で筆者が述べている、乱読と乱談のそれぞれによって生じることの共通点を含めて、五十字程度で書きなさい。

【静岡県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日常のことばにおいて漠然と論理と考えられているのは、話の筋道である。この筋道がしっかりはっきりしていないと、話が通じにくく、誤解をａマネきやすい。つまり、①「線」的なものである。線は、曲がったり、折れたりせず、まっすぐに一直線であるのが、明快でのぞましい、とされる。

ことばの送り手は、線のようなことばを並べ、つなげていく。それを受け手がたどって意味をとることになる。

その送り手と受け手が、心理的に近接、親密であるとき、形式の整った線的論理が情報過多と感じられるようになる。わかり切った、見当のつく部分を切りすてても伝達が可能になるだけではない。線がうるさくなり、部分的に省略、欠落させる。それが表現を引き締め、密度のあるコミュニケーションとして歓迎されるようになる。そこで線の部分的風化がおこる。

普通の線的筋道がこうして、だんだん短くなり、さらに、退化すると、点になる。線的論理がいわゆる論理であるが、②身近な同士においては、点的論理が通じ合い、おもしろくなってくる。

人と人との心理的距離が大きければ、用いられることばは、つよく線的な性格をおびる必要がある。ｂテンケイ的なケースは法律や法廷のことばであって、ことばはしっかりした線的筋道であるのが好ましい。線が切れたり、曲がったりしては、重大な誤解、混乱をおこすおそれがある。〝水ももらさぬ〟論理が求められる。

欧米語は、送り手と受け手が大きく離れている点で、特異なもので、法律の用語に通じるところがある。日本人が母国語では意識しなかった論理が気になったのはそのためである。もともと日本人は、ひどく立場の異なった人間の間での、コミュニケーションを考えることが稀（まれ）であったから、固い論理を考える余地がなかった。

> 家族の間で交わされることばは、法律用語とは大きく性格を異にする。法律のことばでは一から十をのべるのに、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十とすべての数をおさえなくてはならない。それに引きかえ、親しいものの間では、すべての点をたしかめるようなことばは、うるさく、わずらわしく感じられるのである。一、二とくれば、三、四とつづくだろうことを受け手は予想する。それをはっきり三、四とおさえると、わかり切ったことを言わないでほしいという気持を受け手ももつだろう。三、四を飛ばして五、六とし、そこでまた飛んで九、十に達する。それが省略と感じられないようになっているのが普通である。

家族は、もっとも親密な関係にある。形式的に整ったことばを口にすれば、おかしいと思われる。一、二とんで五、六とんで九、十といった省略でもなお、密にすぎる。一から十までと言えばたいていコト足りるのである。一から十でも、わかり切っていると感じるもの同士の間では、モノゴトをはっきり明示しないで、〝あれ、どうする〟と言うだけで相手ははっきりしたメッセージであると思うのである。

③つまり、論理は、人間関係によって、④密疎を異にする、ということである。人間関係の親密度が高まれば高まるほど、形式的論理の密度は疎になる。ある時点において、線としての論理が風化して、点に近づくと考えられる。

点的表現は点的論理を生む。それが線的論理にない、あたたかさ、含み、おもしろさをもつことが発見されると、省略の文化が生まれる。⑤俳句は世界最小の詩と言ってよいであろうが、この点的論理なくしては存在し得ないことははっきりしている。十七音の小さな表現で、情感を伝えることができるのは、作者の力だけではない。受け手が、その点を結び、あるいは関係づけて、おのずからの理解を成立させるはたらきがないと、成立しない。

線的論理は切れ目がないのが当然とされるから、その線をたどっていけば、脱線ということはない。脱線すれば、受け手の責任であるとして責められる。線的論理の表現には正解があり、誤解がある。

それに対して、点的論理では、いわば、散乱し、切れている。筋道などあろうわけがない。したがって、⑥いわゆる正解は存在しない。

点的論理によって支配されていることば、表現は、必然的な論理、直結関係による意味とは違った情感的意味をもっている。

点的論理による表現は、連続していないが、それを結び合わせて複雑な図形のような意味を結ぶことができる。そうして切れているが、つながりをもつことのできる、非連続の連続が可能になる。線的論理では考えることもできない。

線的論理の表現には、正解が存在する。筋道を外れたら誤りであり、不可である。それに対して、点的表現では意味のｃ半ばは、受け手に委ねられている。散乱しているように見える点と点の結合は、受け手の才覚次第である。十人十色の意味化があっておかしくない。

（外山滋比古（とやましげひこ）「聴覚思考　日本語をめぐる20章」より）

35

Step 2

問一　＝線部ａ～ｃについて、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直せ。

ａ　きやすい　　ｂ　　　ｃ　ば

Step 2

問二　――線部①を説明したものとして最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア　送り手が、話を受け手に正しく伝えるために整えた筋道。
イ　送り手が、親しい受け手との間でのみ共有している知識。
ウ　送り手が、本心を遠回しに表現するために工夫した技法。
エ　送り手が、言葉を見ばえ良くしようと作った美しい表現。

Step 2

問三　――線部②について、「身近な同士においては、点的論理が通じ合」うのはなぜか。本文の［　］で囲まれた部分の語句を用いて、解答欄に合う形で二十字以内で書け。

身近な同士であれば、受け手は［　］から。

Step 2

問四　――線部③の語のはたらきを説明したものとして最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア　これまでに述べてきた話題をまとめている。
イ　関係のある二つの事柄を並べて比べている。
ウ　前に述べたことと対立する内容を挙げている。
エ　直前で述べた内容に新たな事実を加えている。

Step 3

問五　――線部④と構成が同じ熟語を次から一つ選び、その記号を書け。

ア　公園　　イ　豊富　　ウ　表裏　　エ　日没

Step 3

問六　――線部⑤とあるが、俳句が詩として存在し得るのは、点的論理に何がそなわっているからだと筆者は述べているか。――線部⑤より前の本文中から十五字以内で抜き出して書け。

Step 3

問七　――線部⑥の理由を説明したものとして最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア　点的論理の表現は、短く省略されたことばの中に作者の意図が巧妙に隠されているから。
イ　点的論理の表現は、受け手がどのように意味を結ぶかによって多様な解釈が可能だから。
ウ　点的論理の表現は、作者の意図を推測する手がかりがないため意味を理解できないから。
エ　点的論理の表現は、作者と受け手の解釈が一致しない限り本当の完成には至らないから。

Step 3

問八　本文の内容に合うものとして最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア　法廷のように人生に関わるような慎重な判断が求められる場面では、余計な情報を排除した明確な点的表現が用いられる。
イ　家族のように互いに親密な間柄では、年齢差があっても敬語のような改まった言葉ではなくて打ち解けた言葉が使われる。
ウ　引き締まった点的な表現を成熟させることで、形式の整った論理で成り立つ音数の定まった俳句を生むことにつながった。
エ　必然的な論理による表現は直結関係による明確な意味を持つため、誤解が生じた場合は受け手の側に責任があるとされる。

【長崎県】

第八講 論理的文章の読解⑦

Step 1

一 次の文章を読んで、あとの㈠から㈥までの問いに答えなさい。

1 鳥は、本当に自由なのだろうか。私はそうではないと思う。鳥はいわば空の中に閉じこめられている。魚も同様で、水の中に閉じこめられている。鳥は空を「空」とは呼ばず、魚も水を「水」と名づけることはない。人間がするようには自分の住む世界を対象として捉えることがないからだ。人間は言葉を用い、空を「空」と呼び、海を「海」と名づけた。いわば世界と自分をはっきりと分けて認識している。その意味で人間は、世界に閉じこめられてはいない。言い換えれば人間は、鳥や魚と同じような意味では「自然（＝世界）」の中に生きていない。おそらくこのことが、人間、とりわけ若い皆さんが①世界と自分との間にズレを感じる理由だ。

2 重要なことは、このズレがあるからこそ、人間はほかの動物のように②自足することができず、自分が生きる世界を絶えずつくり替えていかなければならないということ。例えば、森を切り開き、田畑をつくる。これこそ人間だけが持っている自由であり、人間が自由である証（あか）しなのだが、見方を変えれば、その自由に閉じこめられているともいえなくはない。人間は、自分が生きている世界と自分との間に越えがたいズレを感じながら、自由に、世界を学び、世界を自分に合うようにつくり替える努力を積み重ねてきた。それが歴史ということ。私たちは今、その結果としての世界を生きているのだ。

3 しかし③現代において、人間が行っている世界のつくり替えは、あまりにも高度で複雑だ。例えば、地下鉄を通したり、ジェット機を飛ばしたりしているが、そのために何が必要かを挙げてみればわかる。まず、言葉を知らなければならない。世界の仕組みを理解して記述するには、数学がなければならない。物理学も工学も欠かせない。いくつものことを積み重ねて、ようやくジェット機が一機、

空を飛べる。そうした数学や物理学、工学は、自然そのものではなく、人間が自然を学びながらつくり出した体系であるから、学ぶことには二段階あることになる。星の運行から暦をつくり、めぐる季節の知識を生かした耕作や狩猟を行うなど、自然を学ぶことが第一段階だとすれば、自然を学んだ人間がつくり出したものを学ぶことが第二段階だ。現代を生きる我々には、この「二重の学び」が宿命づけられており、この第二段階のために特に必要とされているのが学校ということになる。

4　人間がつくり出したものは数えきれず、一人では到底学びきれない。人間は学ぶべきことを増やしすぎたのではないかと思うほどだ。研究分野の細分化も近年ますます進行している。（中略）たしかに、何をするにせよ勉強して覚えるべきことは多い。何か新発見をするほどの研究者になりたいのであればなおさらだ。しかし知識量で勝る者が強者かというと、現実はそうなっていない。実は新発見というものは、発見者が十五〜十六歳の頃からその種を自分の中に宿していることが多い。つまり、あなたたちの年に何かの種が宿されるということ。これは分野によらない。このことが端的に示しているのは、世界を変える力は知識ではなく「若い力」だということだ。「若い力」とは④「知らない」力であり、「知っている」ということよりも「知らない」ということのほうが重要なのである。

5　理由の一つがエラー、つまり失敗する可能性だ。膨大な知識の体系に分け入った若者は、それを骨肉化しようとするとき、誤った理解をすることもしばしばある。物事は、教えられたとおりに学ぶとは限らないからだ。新発見は、それまでの常識からすればエラー、あるいはアクシデントと呼ばれる事態の中でなされることが多い。人間が何かを成し遂げる力は、エラーにこそある。歳（とし）をとると失敗を恥じるようになり、エラーを起こせなくなっていくが、エラーを恐れてはならない。若さとは、弱点であると同時に世界を変えていく力でもあるのだ。

6　物理学者のある友人は、高校で教わった虚数単位が大人になってもずっと頭にひっかかっていたという。虚数単位は−1の平方根だと説明されても「よくわからない。気持ち悪い。なんかおかしい」という思いを、彼は長い間、頭の片隅に置いておいた。三十年後、彼はその虚数を利用してまったく新しいタイプの電子顕微鏡を発明するのだが、皆さんの年頃に抱いたほんの少しの違和感と疑問を持ち続け、それが花開いたのだという。

7　「知らない」ことは大きな力にもなりうる。エラーをする可能性はおおいにあるが、それは、誰も考えつかなかったことを行う可能性でもある。学校では「間違えてはならない」という雰囲気が形成されがちだが、それは世界を変える力を逆に失わせてしまうことにな

るかもしれない。

（小林康夫「学ぶことの根拠」〈中学生からの大学講義1「何のために『学ぶ』のか」所収〉より）

（注）○1～7は段落符号である。
○体系＝一定の原理に基づいて組織された知識の全体。
○骨肉化＝ここでは、自分のものにすること。
○アクシデント＝思いがけない出来事。

㈠　①世界と自分との間にズレを感じる理由とあるが、その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　人間は自分と自分が住む世界とを明確に分けて理解していること
イ　人間は鳥や魚のように単独では世界の中で生きていけないこと
ウ　人間は自分の住む世界を思いどおりにはつくり替えられないこと
エ　人間は昔から自分の住む世界の中で違和感を抱き続けていること

(二) ②自足の意味として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　自由自在に動き回ること　　イ　不足がないか自ら確かめること

ウ　現状に自ら満足すること　　エ　自分の力で成長していくこと

(三) ③現代において、人間が行っている世界のつくり替えは、あまりにも高度で複雑だとあるが、その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。

ア　現代では、飛行機や鉄道などの大型の機械をつくるために、技術開発に加えて世界中から資源を集めてくる必要があるということ

イ　現代では、新発見や技術開発を行うために、昔の人間とは比較にならないほど多くのことを自然から学ぶ必要があるということ

ウ　現代では、人類の歴史を今後も積み重ねていくために、言葉によって世界の仕組みを記述し後世に伝える必要があるということ

エ　現代では、新しいものをつくり出すために、これまで人間がつくり出してきたさまざまな学問体系まで学ぶ必要があるということ

(四) ④「知らない」力とあるが、知らないことが力になるのはなぜか。その理由を述べている一文を、第六段落以降の文章中からそのまま抜き出して、始めの五字を書きなさい。

㈤　この文章の表現の特徴として最も適当なものを、次のアからエまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。
ア　想定される反対意見に対して複数の根拠を挙げて反論し、最後に自分の意見を明らかにすることで、文章に説得力をもたせている。
イ　最初に常識に反する見方を示して読者の注意を喚起し、それを裏付けるデータを列挙することで、文章に説得力をもたせている。
ウ　主張を述べた後で分かりやすく説明を加えたり、根拠となる具体的な事例を示したりすることで、文章に説得力をもたせている。
エ　自分の考えのもとになった研究者の見解を詳しく紹介したり、自分の体験を語ったりすることで、文章に説得力をもたせている。

□

㈥　この文章の内容として最も適当なものを、次のアからオまでの中から選んで、そのかな符号を書きなさい。
ア　若い頃に間違えて記憶した内容は、後の新発見を導く原動力となる。
イ　若い頃に抱いた違和感や疑問は、将来の創造の種となることが多い。
ウ　世界を変える力は、知らないことを恥じる気持ちによって高められる。
エ　知らないことによる失敗は、常識が身に付くことで減る場合も多い。
オ　世界を変えていく力をもつ人間は、最初から常識を信用していない。

□

【愛知県】

Step 2・3

二

次の文章を読み、問い(1)～(9)に答えよ。（1～5は、各段落の番号を示したものである。）

1 しばらく前に、石川県のとある公立高校で、「考える」ということについて、生徒さんたちに向けて語ったことがある。講演を聴いたひとりの女子生徒が書いてくれた感想文のなかにこんな文章があった——
「哲学は、人間の本質について深く疑問に思った時や、そのことによって悩んだり傷ついたりした時に、それを解決する手がかりをつかむための一つの手段なのではないか、と思いました。」

2 さっと読んだかぎりでは哲学についてのaよくありそうな印象を記しているようにみえるが、そのなかのある言い回しにわたしの眼（め）は釘（くぎ）づけになった。b「解決する手がかりをつかむ」という箇所だ。問いに対する答えではなく、その「手がかり」を掴（つか）むために哲学があるらしい、というのである。

3 政治や経済においても、育児や介護にあっても、さらには芸術表現に際しても、不確定な状況のなかでどうするのがよいのかわからないまま、とりあえず事に当たるほかない。正しい答えが一つだけあるわけではないし、みなをc満足させられる答えがあるわけでもないし、そもそもこれからじぶんが知ろうとしていること、創ろうとしているものがあらかじめわかっているわけでもない。答えがすぐには出ない、あるいは答えが複数ありうる、いや答えがあるかどうかもよくわからない、そんな問題群がわたしたちの人生や社会生活を取り巻いている。そんなときにたいせつなことは、わからないけれどこれは大事ということを掴むこと、そしてそのわからないものにわからないままに正確にd対ショできるということ、いいかえると、性急に答えを出そうとするのではなくて、答えがまだ出ていないという無呼吸の状態にできるだけ長く持ち堪（こた）えられるような知的耐性をe身につけることだ、というふうな話をしたのだが、聴いた生徒さんがそれをこんなふうにまとめてくれるとは想像もしていなかった。そしてとてもすてきな捉え返しだとおもった。というのも、哲学の重要な仕事として、問いの構造じたいを問いなおすということ、問題となっていることがらへの視点、ないしはアプローチの仕方を吟味するというところがあるからである。

4 ひとには「なぜ?」と、どうしても問わずにいられない瞬間がある。なぜじぶんの生活というのはいつもこうでしかありえないのか。この息苦しさの理由は何か。あるいは人びとのあいだで、あるいは時代のなかで、どんな方向に進んでいけばいいのか。時代がなにか大きく変わりつつあるような気配がぼんやりとあるが、いったい何が起こりつつあるのか。その動きになにか、軸とか構造とかいったものが見いだせるのか……。そういう問いがしばしば頭をもたげる。時代の空気への抑えがたい不安や違和感に、時代はなにかとんでもない方向に動きだしているのではないかと、問いを投げ返したくなるときもある。つまり問えば問うほど問いは増殖していって、ついに、これまでじぶんが、あるいはじぶんを取り巻く人びとが、fそれを下敷きにしてみずからの生の軌跡を描いてきたその《初期設定》、あるいはじぶんがこれまで属してきたその社会が依拠する《フォーマット》に、歪みなりボタンの掛け違えなり不都合なりがあったのではないかと、それらを根本から再チェックしたくなる瞬間がある。そして、じぶん(たち)の生をそれに照らして理解するその《初期設定》や《フォーマット》をあらためて意識の俎上にのせ、吟味し、場合によってはそれを書き換えることで、より見晴らしのよい(ただし、かならずしも心地よいとはかぎらない)場所に立てるようになること、gそのプロセスとして哲学はある、はずだ。

5「哲学とはおのれ自身の端緒がたえず更新されてゆく経験である」——人生の《初期設定》、あるいは社会生活の《フォーマット》をあらためて問いなおすことを、モーリス・メルロ＝ポンティはそのように表現した。「おのれの端緒がたえず更新されてゆく」というのは、それまであたりまえの前提であったことが崩れる、不明になるということである。いいかえると、問うなかで、問いが解消するどころか、逆に増殖してゆくということ、いってみれば問いじたいにある種の地殻変動が起こるということである。その意味で、哲学はとりあえずの解答を得るためのマニュアルではありえない。前提そのものを問いただそうというのだから、問題解決の「手がかりをつかむ」という、あの女子生徒が書いていたプロセスには、既定のマニュアルなどありえないのである。まずは問いのなかに飛び込むこと。以降のプロセスを歩み抜く知的耐性は、問いを問いつづけるなかではじめてついてくる。

(鷲田清一「哲学の使い方」より)

注
○アプローチ…対象に接近すること
○フォーマット…型式
○俎上にのせ…対象としてとりあげ
○プロセス…過程
○端緒…物事のはじまり
○モーリス・メルロ＝ポンティ…フランスの哲学者

Step 2

(1) 本文中のａよくと意味の異なるものが、波線部（〰〰）に用いられているものはどれか、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア) 夜空を眺めたくなって、僕らは星がよく見えそうな丘を目指して歩いた。
(イ) 彼女の話はよく聞くような内容だったが、その表情が私の心を動かした。
(ウ) 誰もがよくするような失敗をしても、そこから学べることはさまざまだ。
(エ) 古い日本映画によく出てきそうな民家で、彼は静かに暮らすことにした。

Step 2

(2) 本文中のb「解決する手がかりをつかむ」について、筆者がこの表現に注目した理由を説明したものとして、最も適当なものを、次の(ア)〜(エ)から一つ選べ。

(ア) 哲学を、問題に対する唯一の答えを出すものではなく、複数の答えがあることを知るためのものだと捉えた表現であり、筆者が哲学の重要な仕事だと考えていることを、期待以上の言葉で表していると感じたから。

(イ) 哲学を、問題を解決するものではなく、問題そのものを問いなおしたり問題に対する姿勢を考えたりするものだと捉えた表現であり、哲学についての筆者の考えを、思いもよらない言葉で表していると感じたから。

(ウ) 哲学を、身近な問題を解決する方法ではなく、人間の本質についての問いに答えるものだと捉えた表現であり、筆者が考えている哲学の重要性を、自分なりの言葉で見事に表していると感じたから。

(エ) 哲学を、疑問に答えるものではなく、答えを求めながら疑問そのものを深めていくものだと捉えた表現であり、哲学について筆者が思いもよらなかった考えを、わかりやすく的確な言葉で表していると感じたから。

□

Step 2

(3) 本文中の c 満足の熟語の成り立ち（構成）を説明したものとして最も適当なものを、次のⅠ群(ア)～(エ)から一つ選べ。また、c 満足と同じ成り立ち（構成）の熟語として最も適当なものを、後のⅡ群(カ)～(ケ)から一つ選べ。

Ⅰ群
(ア) 上の漢字と下の漢字が似た意味を持っている。
(イ) 上の漢字と下の漢字が主語と述語の関係にある。
(ウ) 下の漢字が上の漢字の目的や対象を示している。
(エ) 上の漢字と下の漢字の意味が対になっている。

Ⅱ群
(カ) 握手　(キ) 洗浄　(ク) 年少　(ケ) 是非

Ⅰ ［　］　Ⅱ ［　］

Step 2

(4) 本文中の d 対ショの片仮名の部分を**漢字**で書け。

対［　］

Step 2

(5) 本文中の e 身につけることだの主語は、本文中の二重傍線部（‖）のうちどれか、最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア) たいせつなこと　(イ) これ　(ウ) 答え　(エ) 知的耐性

［　］

Step 2

(6) 本文中のf それの指す内容として最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア) じぶん　(イ) じぶんを取り巻く人びと
(ウ) 《初期設定》　(エ) 《フォーマット》

Step 3

(7) 本文中のg そのプロセスについて説明したものとして最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア) じぶんや社会についての疑問を抱いて不安や違和感を感じるなかで、《初期設定》や《フォーマット》に原因がないかどうかを点検し、その原因を明確にすることで、不安や違和感を解消しようとするプロセス。

(イ) じぶんや社会についての疑問を抱いて問いを投げ返すなかで、《初期設定》や《フォーマット》を意識の対象としてとりあげて点検し、そのうえで問題を問いなおすことで、時代の変化を明らかにしようとするプロセス。

(ウ) じぶんや社会についての疑問を抱いて問いを深めるなかで、《初期設定》や《フォーマット》についてよく考えたり新しく置き換えたりし、そのうえで問題を捉えなおすことで、問題を明確にしようとするプロセス。

(エ) じぶんや社会についての疑問を抱いて問いが増殖するなかで、《初期設定》や《フォーマット》に問題がないかどうかを考え、その問題を解決することで、じぶんや社会の歪みを解消しようとするプロセス。

Step 3

(8) 本文の段落構成を説明した文として**適当でないもの**を、次の(ア)〜(エ)から一つ選べ。

(ア) [1]・[2]段落には、本文全体で扱う話題を取り上げるきっかけとなったできごとが書かれている。
(イ) [3]段落には、[1]・[2]段落のできごとがあってから、筆者が哲学について考えはじめた内容が主に書かれている。
(ウ) [4]段落には、[3]段落の内容を受けて、哲学とはどういうものかという説明が書かれている。
(エ) [5]段落には、引用を交えながら、[1]〜[4]段落のまとめとなる内容が書かれている。

Step 3

(9) 次の〈ノート〉は、本文を学習した哲郎さんが、本文の[5]段落のまとめとして書いたものの一部である。これを読み、[X]に入る適当な表現を、本文の内容をふまえて、**三十字以上、四十字以内**で書け。

〈ノート〉

[5]段落のまとめ

① モーリス・メルロ＝ポンティの言葉
「哲学とはおのれ自身の端緒がたえず更新されてゆく経験である」

② 筆者の解釈
「おのれ自身の端緒がたえず更新されてゆく」とは
・前提であったことが崩れたり不明になったりすること。
・問うなかで、問いが解消するどころか、逆に増殖してゆくこと。
・問いじたいにある種の地殻変動が起こること。

③　筆者の主張
「その意味で、哲学はとりあえずの解答を得るためのマニュアルではありえない」とは
・哲学とはおのれ自身の端緒がたえず更新されてゆく経験であるという意味で、哲学は問題に対する答えを出すためのマニュアルにはなりえないということ。

④　まとめ
・問題解決の「手がかりをつかむ」というプロセスは、［X］ため、まずは問いのなかに飛び込み、自分なりに考えることが大切である。そのために必要な知的耐性は、問いを問いつづけるなかではじめてついてくる。

【京都府】

〈Note〉

第九講　論理的文章の読解⑧

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

かつてのモラトリアム(注)というのは、半人前扱いで肩身が狭く、権利も大きく制限され、不自由で居心地が悪いため、若者はそんな状態を脱して早く一人前の大人になりたいと思った。［A］、かつてのモラトリアムは、義務はないけど権利もなく、一刻も早く抜け出したい不自由な時期だった。

それに対して、現代のモラトリアムは、義務はないのに権利はあるため、いつまでも抜け出したくない自由で気楽な時期といった感じになっている。［B］、アルバイトでもすれば、消費者としての権利を享受できる。定職に就かず、稼ぎがすくなくても一人前に意見を主張することができる。

そうした変化には、物質的に豊かな社会、価値観の多様化、技術革新による変動の激しい社会といった要因が関係しているといってよいだろう。

IT(注)革命など、科学技術の絶え間ない革新により、人々の働き方もライフスタイルも目まぐるしく変わり続け、まったく先が読めないために、将来も視野に入れた最適の職業選択が困難になった。そんな時代ゆえに、無理に自己確立などせずに可能性を残しておきたい、とりあえずは自由気ままに漂っていたいと思うのも不思議ではない。

こうして1モラトリアム心理が世の中に蔓延（まんえん）し、決断を先延ばしにしていつまでも自由に漂っている若者が増えてきたというわけだ。

一人前の大人になること。これは自己の確立と言い換えることもできるが、それには何らかの社会的役割を担（にな）うことができると周囲から認められることが必要となる。そこに、さらに現代では、「自分らしく」ということが加わる。単に何か社会的役割を担えればいいとい

うのではなく、自分らしい役割を引き受けたいという思いがある。

ここで、アイデンティティについて、考えてみよう。

エ（注）リクソンのいうアイデンティティには、つぎの三つの側面が含まれるといえる。

①自分というまとまりがあり、それが時間的に連続性を保っているという感覚

②そのような自分らしさを他者も認めているという感覚

③自分が社会的役割を担う存在になっているという感覚

①は、自分がそのときどきで気まぐれな行動を起こしているのではなく、何らかの一貫性があり、それが自分らしさだといった感じを指している。

ここで注目したいのは、②と③だ。これらが意味するのは、アイデンティティ確立の条件として、他者からの承認が必須だということ、それには社会の中で何らかの役割を引き受けることが必要になるということだ。

アイデンティティの発達についての研究を精力的に進めている心理学者クロガーも、「エリクソンにとって、アイデンティティの最適な発達は、コ（注）ミュニティの中に個人の生物学的・心理的能力および関心によく『フィットした感じ』を与える社会的役割や適所を見つけることを含むものである。」と述べている。

このように、社会の中に自分の能力や関心によくフィットした役割や居場所が見つかったとき、アイデンティティが確立できたことになる。つまり、アイデンティティの確立のためには、他者から［Ⅰ］が得られ、かつ自分らしい［Ⅱ］を担えるようになることが必要なのだ。▲

そうは言っても、自分はどう生きるべきか、どんな生き方が自分らしいのかという問いに答（こたえ）を出すのは容易ではない。しかも、周囲から認められ社会に役立つ生き方という点とも折り合いをつけなければならない。

モラトリアムを維持しながらも、限りなく自己実現を求め続ける人物。それが新たな時代の適者かもしれないといって、プロテウス的人間という生き方を描いたのは社会学者リフトンである。

プロテウスというのは、自分の姿をヘビやライオン、竜、火、洪水などに変幻自在に変えることはできるのに、自分自身のほんとうの姿

を現すことのできないギリシア神話の海神の名前だ。

プロテウス的人間とは、環境の変化に応じて自分自身を変身させ、そのつど自己の可能性を最大限発揮しようとするタイプを指す。

このように一見すると一貫性がなく、バックボーンが欠けた人物は、変動の少ない伝統的社会の価値観からすれば、主体性がなく、安定せず、信頼できないといって否定的に評価されたはずだ。

でも、現代ではどうだろうか。こちらがある仕事に身を捧(ささ)げようとしたところで、働き盛りの頃にはその仕事がなくなっているということだって、十分あり得るのだ。このような変動の激しい時代を生き抜くには、まさに 2 プロテウス的な生き方が求められているのではないか。

職業選択がなかなかできない若者が増えているのも当然のことだ。こんなに変動の激しい時代なのに、仕事を一生ものなどと大げさに考えるから決断ができなくなる。とりあえずは今の状況で最善と思える選択をすればよい。

判断を誤ることはよくあることだし、やってみなければ自分に合うか合わないかなんてわからない。どうしても合わなければ変えればよいだけのこと。状況が変われば、それに応じて仕事を変えることもあるだろう。それは、根気がないなどと非難されることではない。状況が変わったということは、判断の前提が変わったわけだから。

そんなふうに状況に応じて新たな価値観や仕事に柔軟に自分を適応させていく。しかも、いい加減とか中途半端というのではなく、それぞれの時点では自分が傾倒する役割に没頭し、全力で立ち向かう。ただし、そこに自己のアイデンティティを限定せずに、別の可能性にも自己を開いておく。気になることには目を向ける気持ちの余裕をもつ。このような生き方こそが、変動の激しい現代にふさわしい生き方と言えないだろうか。

ただし、プロテウス的生き方を押し通すには、自己を防衛したりせず、あらゆるものに心を開き、一面的にならないのはもちろんのこと、幅広く揺れ動き、あらゆる局面に身をおきながらも、けっして統合力を失わないような強さと柔軟性が求められる。

会社や組織のような所属集団や肩書(かたがき)に心の安定を求めることなく、その時々に自分がとくに価値を感じるものにすべてをぶつけていく生き方は、一貫性がなく意志が弱いとか気まぐれなどとする保守的人間の評価とは逆に、じつは強靭(きょうじん)な意志、繊細で鋭敏な感覚、宙ぶらりんの状態をもちこたえられる忍耐力がなければならないのである。

だれにもいろんな可能性がある。でも、3これまでは、ひとりの人間のもつ多様な可能性の中からひとつを選び取ると、他のすべてを捨てるというのが一般的だった。

アイデンティティを確立するというのは、それ以外の可能性を切り捨てること。それによって自己を特定の社会的役割に縛りつけること。そのようにみなされてきた。大人になるというのは、ある意味では諦めることだ。そんなふうにも言われてきた。

でも、僕たち人間は、そんな単純にはできていない。非常に多面的な存在だ。技術的なことに興味をもつこともあれば、芸術的なものに惹(ひ)かれることもある。科学的なことに関心をもつこともあれば、文学的な世界に引き込まれることもある。現実的な社会問題が気になることもあれば、メルヘン的な世界に浸りたくなることもある。そんな自分をたったひとつの生き方に封じ込めるなんて不可能だ。僕自身、いつもそんなふうに思って生きてきた。

自分をひとつの可能性に封じ込めるような生き方を貫くには、他の自分を抑圧し続けなければならない。そのために多大なエネルギーを消耗する。そもそも固定的なアイデンティティというものによって多様性をもつ自分の人生を単線化するのは、労働の分業によって社会を安定化させるためとみることができる。

ところが、社会そのものの変動が激しくなり、労働の形態も著しく変化する今日、無理して自分の人生を単線化したとしても、社会のほうが変わってしまい、適応できなくなるということも起こってくる。

それならば、なにも無理をして自分をひとつの道に封じ込めなくてもいいじゃないか。そう考える若者が増えてくるのも当然だろう。そこまで整理して考えているわけではなくても、どこかでひとつの社会的役割に徹しきれない自分をもてあまし気味になる。

大人になれない若者とか、モラトリアムから抜け出そうとしない若者の増加は、現代という時代状況が生みだした現象といえる。もともとモラトリアム的な生き方は、夏目漱石(なつめそうせき)の描く世界の高等遊民(注)のように、特権階級でないと享受できないぜいたくなものだった。

豊かな時代。価値観が多様化した自由な時代。変動の激しい時代。そんな時代状況のせいで、4自分を封じ込めない生き方が大衆化した。このように考えると、大人になれない若者の増加という現象にも、否定的側面だけでなく肯定的な側面もあるように思われる。

そんな視点からすれば、今の時代に求められるのは、個人をひとつの道に封じ込めるような硬いアイデンティティではなく、さまざまな可能性に開かれており、試行錯誤や方向転換を続けても壊れないような、いわば柔らかいアイデンティティをもつことなのではないだ

ろうか。

（榎本博明「〈自分らしさ〉って何だろう?」より。一部表記を改めたところがある。）

（注）

モラトリアム＝青年が社会人としての義務を猶予されている期間。

IT革命＝情報技術の発展や普及に伴う社会の急激な変化のこと。

エリクソン＝精神分析学者（一九〇二～一九九四）。

コミュニティ＝地域社会。共同体。

高等遊民＝高等教育を受けながら、職業に就かずに暮らしている人のこと。

(ア)　本文中の［A］・［B］に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　A　つまり　B　たとえば

2　A　さて　B　まさか

3　A　しかし　B　ところで

4　A　おそらく　B　または

［　　］

(イ)　――線１「モラトリアム心理が世の中に蔓延し、決断を先延ばしにしていつまでも自由に漂っている若者が増えてきた」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　消費者として一人前に意見を主張しすぎるあまり、アルバイトによる社会との関わりだけでは物足りなくなり、多くの若者が物質的な豊かさを求めて自己を確立しておきたいと考えているから。

2　義務はないが権利のある現代のモラトリアムが自由で気楽な時期になっているうえに、社会が変わり続けて先を見通せないので、多くの若者が将来の可能性を残しておきたいと考えているから。

3　居心地の悪かったモラトリアムが気ままで楽しい時期に変化したうえに、ＩＴ革命の出現によって世界中の人々と交流できるので、多くの若者が最新の情報に触れておきたいと考えているから。

4　文学的な世界や芸術的なものに浸りたくなるあまり、将来を考えて定職に就いたあとでも、多くの若者が文学館や展覧会などを巡る至福の時間をいつまでも確保しておきたいと考えているから。

□

(ウ)　本文中の［Ⅰ］・［Ⅱ］に入れる語句として最も適するものを、［Ⅰ］については**漢字二字**で、［Ⅱ］については**漢字五字**で本文の最初から▲までの中からそれぞれ抜き出し、そのまま書きなさい。

Ⅰ □□

Ⅱ □□□□□

(エ) ――線2「プロテウス的な生き方」とあるが、それはどのような生き方か。次の①、②の条件を満たし、**全体で五十五字以上六十五字以内の一文**で書きなさい。

① 文末は、[生き方。]で終わること。これも全体の字数に入れること。

② 「アイデンティティ」という語を用いること。

(オ) ――線3「これまでは、ひとりの人間のもつ多様な可能性の中からひとつを選び取ると、他のすべてを捨てるというのが一般的だった。」とあるが、「これまで」の状況を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 個人が他の可能性を捨てて特定の役割を担うことによって、社会を安定させてきたということ。

2 個人がすべての可能性を封じて無欲に生きることによって、他者の評価を得てきたということ。

3 個人が特定の可能性を全力で追求することによって、自分の幸福だけを考えてきたということ。

4 個人があらゆる可能性を模索することによって、社会をよい方向に発展させてきたということ。

(カ)　――線４「自分を封じ込めない生き方が大衆化した。」とあるが、その説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　生き方を模索していく過程で、自分を抑圧する生き方を受け入れる代わりに、試行錯誤や方向転換を求められてもつぶれないように柔軟に対応する若者が増えてきたということ。

2　伝統的社会の価値観に合わせているうちに、自分の考え方や行動様式が無意識のうちに形成されていき、一人前の大人の役割を果たすことのできる若者が増えてきたということ。

3　現実的な社会問題やメルヘン的な世界など、自分の興味を絞ることができない若者が、心の安定を求めて会社や組織のような所属集団や肩書を頼るようになってきたということ。

4　変動の激しい時代には労働の形態も著しく変わるため、若者が無理に自分の人生を単線化することなく、ひとつの生き方に縛られない選択ができるようになってきたということ。

(キ)　本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　大人になれない若者が急増している現象に対して危機感を抱きながら、価値観の多様化した時代において自己実現が難しいことをふまえ、確固たるアイデンティティの枠組みを提案している。

2　モラトリアムから抜け出さない若者について否定的に論じながら、高等遊民の生き方をすべての人たちが享受できる豊かな時代をふまえ、理想的なアイデンティティのあり方を提案している。

3　かつての若者と現代の若者のモラトリアムの違いを比較しつつ、変動の激しい時代にふさわしい生き方について学者の見解を引用しながら、新たなアイデンティティのあり方を提示している。

4　若者の多面的な存在を尊重してきた過去を振り返りつつ、職業選択が困難な時代にふさわしい生き方について若者の意見をふまえながら、普遍的なアイデンティティの枠組みを提示している。

□

【神奈川県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

　私たちは、他者とつながり、生きるために必要なものを、他者との関係の中で㋐交換している。それは、単に物質的なことがらの交換だけではなく、何かをしてあげるといったことや、情報、気持ちの交換も含まれる。私たちが得るものや失うものが、他者との関係の中で決まり、他者の言動に依存する。したがって、他者の言動を予測し適切に反応すること、また自分にとって望ましくなるよう統制を㋑試みることは、大げさに言えば、私たちの生存にかかわることなのだ。だから、私たちは他者の心を読もうとする。心が他者の言動を生み出す源泉であるという枠組みのもと、言動がなぜ生まれるのかを知ろうとする。他者を、意図を達成するためにふるまう合理的なエージェントとして、また、安定した態度や特性を表現する言動を行う一貫性のあるエージェントとして認知することで、理解や予測、統制が可能な存在とすることができるのである。

　また、それに加えて、他者に心を認めることは、共感的理解に基づく関係を築いたり、他者を正当に扱い、害や苦痛を与えることのないよう、道徳的なコミュニティの中におくために、必要とされることでもある。このことは、先に述べた予測や統制の必要に関する議論とは異なり、私個人がそのことですぐさま利益を得るという性質のものではない。しかし、①私たちは、多数の他者と共に、相互作用を長期にわたって繰り返しながら社会の中で生きている。したがって、社会全体の安全や㋒安寧を保つためには、互いが他者に対して支援を提供する一方、加害を避けることが重要になる。一人一人が、他者の喜びや苦痛を理解し、それを踏まえたふるまいをすることで、全体の安心、安全という利益が達成できる。さらに、他者の心にある意図や動機を読み、その善悪を評価したうえで、賞賛や非難を与え合うことにより、他者に対する善い意図や動機が促進される一方、悪い意図や動機が抑制されることになる。これは、社会全体が道徳的秩序のもとに存続する基盤となる。

　進化心理学的な議論は、自分に利益をもたらす人や、不利益をもたらす人を同定するためには、周囲にいる他者の動機や意図、特性など、心的な属性を理解することが必要であり、そのような能力を獲得した個体のほうが生存に有利であるということを主張する。敵や裏

切り者を認知できれば、その場から逃げたり、近づくにしても注意を払ったり、食糧など生存に必要なものをその他者から隠したりすることで、対応ができる。また同様に、他者の意図や動機を、善い・悪い、正当・不当などの次元から直感的にとらえて、その評価に基づきすばやく対応できる個体が多数いる集団は、そうでない集団よりも、秩序ある社会を維持することができ、存続しやすくなる。もちろん、私たちが進化の過程で心を読む志向性を獲得したかどうかについては、直接その歴史を検証できない。その意味では、②このような議論は壮大な「物語」に過ぎないのかもしれない。とはいえ、現代に生きる私たちが、他者の心を日常的に読むこともまた事実であり、社会的な動物としての人間が、生きるための必然として心を読む志向性を獲得したと考えること自体が、私と他者をつなぐ力を持ち得るのではないだろうか。

私たちの心は、自分だけしか知りえないという意味で、個に閉じたものだ。しかし、その心はまた、他者の心を読むための機能を持つものとして、私たちに備わっている。その機能ゆえに、私と他者はつながれ、閉じた個から他者へ、さらには社会へと広がっていく。他者を理解し意味づけること、共感的理解に基づく関係や秩序ある社会集団を維持することは、③他者の心を読むことの上に成り立っている。私の心が他者の心を読み、他者の心が私の心を読むことにより、私たちそれぞれは、個であることを超えて、社会という、人と人とのつながりの中に組み込まれていくのだ。

（唐沢かおり「心はいかに自己と他者をつなぐのか」より）

（注）　エージェント＝行為者。

Step 2

1　本文中の次の漢字の読み方を書きなさい。

㋐交換　㋑試みる　㋒安寧

㋐ ［　　　　］

㋑ ［　　　　］みる

㋒ ［　　　　］

Step 2

2 ① 私たちは、多数の他者と共に、相互作用を長期にわたって繰り返しながら社会の中で生きているとあるが、このように「他者とのかかわりの中で生きる人間」は、本文中では何と表現されているか。本文中から**六字**で抜き出しなさい。

Step 2

3 ② このような議論は壮大な「物語」に過ぎないのかもしれないとあるが、これはどのようなことを表しているか。その内容として最も適しているものを次から一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 他者の意図を善悪などの次元から直感的にとらえてすばやく対応することが秩序ある社会の維持につながるという主張は、その実現が困難であるという点で、はかない夢でしかないのかもしれないということ。

イ 他者の意図を理解できる個体の多い集団が歴史上存続しやすかったという主張は、他者とのつながりが生存に必要であるように錯覚させるという点で、都合のよい空想でしかないのかもしれないということ。

ウ 人間が生きるための必然として他者の心を読んでいるという主張は、その正当性を人々が広く認知しているという点で、もはや自由に想像する余地のない歴史的事実でしかないのかもしれないということ。

エ 私たちが長い歴史の中で他者の心を読む志向性を獲得してきたという主張は、その過程を実際に確かめることが不可能であるという点で、根拠のない作り話でしかないのかもしれないということ。

ア	イ	ウ	エ

Step 3

4　③他者の心を読むとあるが、本文中では、他者の心を読むことが可能となるのは、私たちが心を持つ他者を、どのように行動するものとしてとらえているからだと述べられているか。その内容についてまとめた次の文の［　］に入る内容を、本文中のことばを使って**四十五字程度**で書きなさい。

他者を［　］ものとしてとらえているから。

Step 3

5　本文中で筆者は、どのようにすることが秩序ある社会集団の維持につながると述べているか。その内容についてまとめた次の文の［a］、［b］に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中からそれぞれ**十字**で抜き出しなさい。

他者に心を認め、共感的理解に基づく関係を築いたり、他者を［a］の中において正当に扱ったりすることに加え、他者の心にある意図や動機を読んで［b］ことによって他者に対する意図や動機を促進したり抑制したりすることが、秩序ある社会集団の維持につながる。

a

b

Step 3

6　次は、他者の心を読むという行為に関連して、他者の心を読むときの二つの方法について述べたものである。方法Aまたは方法Bのどちらかについて利点と問題点とをあげながら、他者の心を読むということについてのあなたの考えを、あとの原稿用紙に**三百字以内**で書きなさい。

方法A　自分の心を手がかりにして他者の心を読むという方法。他者がおかれている状況に自分自身をあてはめたうえで、これまでの経験をふまえて自分自身の考えや感情、態度などを把握し、他者も自分と同じような心の状態であると考えて、他者の心を理解しようとする。

方法B　他者の心や他者のおかれた状況の特性についての知識を適用して他者の心を読むという方法。自分自身が経験したことのない事柄でも、ある状況が引き起こす心の状態や、心の状態と行動との関係などについて、一般的な知識を活用して他者の心を理解しようとする。

・原稿用紙の正しい使い方にしたがって書くこと。
・題名や氏名は書かないで、本文から書き始めること。

100

【大阪府】

300

200

〈Note〉

追加講　論理的文章の読解⑨

Step 1

一　次の文章を読み、問い(1)～(8)に答えよ。

生きていればなにかしらのすれ違いやトラブルもあるし、その際、心がチクリと痛むことがたまにある。傷つけるつもりはなくとも人を傷つけてしまったり、親切でしたこと、あるいは義務としてやったことなどが逆恨みされてしまうなど、まったく世の中は a ままならないものである。とりわけ、異なる価値観や立場の人が相手である場合、いかにこちらが言葉を届けようとしてもうまく届かないこともある。人とうまくやっていくというのは――他人を分かること、自分を分かってもらうことなどは――本当に難しい。できれば、b そうした痛みを受けることなく、平穏に、うまくやれる喜びだけを感じて生きてゆきたいものである。

ただ、そうした「痛み」が無駄なもの、*忌むべきものかといえば、必ずしもそういうわけではないように思われる。なぜなら、それは「分かりたかった」「分かってほしかった」という自分の心の在り方を示すものであり、たとえその心の在り方ゆえに、ちょっとしたことで他者との関係上苦痛を感じるとしても、それは自身にとってその関係が重要だからそうなのであって、だからこそやはりその痛みはそのことを知らせてくれるという点で価値があるのだ。ただし、気をつけるべきポイントがここにはある。たとえば、あなたにとってそうした痛みの意味が「ある」のではなく c 「あった」にすぎないものだとすれば、それはあなたとその人との関係性の限界がそこまでであることを示していることになる。もし、その限界を超えようと思うのであれば、まずはその痛みをきちんと痛みとして認めつつ、相手の重要性と自身の願いを自覚し、そのうえで、「自身がどうすべきか」を問い直す必要があるだろう。これをすることなく、「結局分かり合えないんだよね、人って d しょせんそんなものだから」と言ってしまえば、たしかに痛みから逃れて楽にはなれるのだが、それは実際に心が痛んだというその事実を過小評価するようなものである。別に学問に限らず、恋愛関係や友人関係などにおいても、一

度は自身のそうした心の痛みにきちんと向き合い、そこでなにをどうすべきか真剣に考えてみてもよいのではないだろうか。もちろんその結果、相手と距離をとることもあるだろうが、しかしそれでも「あいつは人として間違っている」とか「あいつがいなくなれば世の中がもっと良くなるはずだ」などといった憎悪（ぞうお）や偏見に<u>ｅ陥る</u>必要はない。

普段当たり前と信じていることを問い直し、自分自身が正しいかどうか、あるいは自身がなにをすべきかをその理由に<u>ｆ遡って</u>考えることは、こうしたことと似ている。うまく生きられないとき、あるいは、<u>ｇうまく生きて</u>いながらもどこか心が痛んだりモヤモヤするとき、あなたは「今のあなたの認識」の限界ライン近くにいるといってもよい。その痛みに耐えながらも、世界のさらなる価値を信じ、それまでの限界を乗り越えたとき、あなたにとっての世界は拡（ひろ）がってゆくだろう。それは、価値観が豊かになり、他人をより良く理解することにもつながるのだが、そのためにはまず自身と向き合う必要がある。＊本書で紹介した議論には、われわれの心にチクリと痛みを与えかねないような「理由の問いかけ」や「或（あ）る種の答え方（という応え方）」がたくさん含まれている。「ルールをただ守ればそれでいいと思っていないか？」「自分は善を知っている、となぜいえるのか？」「環境開発の恩恵と引き換えに、自然破壊に<u>ｈ加タン</u>しているのではないか？」「動物に対してひどいことをしていないか？」「強者である自分たちの利益のために、生命というそれ自体価値あるものを利用してはいないか？」と問われ、それに真剣に向き合うとすれば、おそらく多くの人が心にチクリとした痛みを感じるだろう。そして、そこから導かれたなんらかの答えは或る人にとっては安らぎを、そして別の人にとってはやはり痛みを与えるものとなるかもしれない。

そうした痛みから逃れる手っ取り早い方法は、それを問いかける側の理屈になんらかの欠点・難点があることを指摘したり、あるいは、問いかける理論を駆使する人に対して「人でなし」「頭でっかち」「世間知らず」「＊原理主義者」「差別主義者」などのレッテルを一方的に貼りつけてその言説を無効化しようとするものである。そして、「こちらが問われるべきことなどないんだ」と安心感に浸ることでその痛みを回避できるわけだ。ただし、<u>ｉそれ</u>は前述の、他人とうまくやりたいけどやれないとき、その痛みから逃れるために、自分自身を問い直すことなくそのうまくいかなさを自分以外のせいにすることにも似ている。そうやって世界に対する自分の関わり方の可能性をそこで閉じてしまうことが、一度しか与えられていない、そして、かけがえなく取り戻すことのできない有限な時間に生きる自分自身の人生として本当にふさわしいのだろうか。やはりそのことはきちんと考えてみたほうがよい。

（中村隆文（なかむらたかふみ）「『正しさ』の理由」による）

注
＊忌む…好ましくないものとして避ける。
＊本書で紹介した議論…本文より前の部分で、倫理的な問題について様々な説を踏まえて筆者の意見が述べられている。
＊原理主義者…特定の理念や原則に基づくことを厳格に守る人。

(1)　本文中の a ままならない の意味として最も適当なものを、次のⅠ群ア～エから一つ選べ。また、本文中の d しょせん の意味として最も適当なものを、後のⅡ群カ～ケから一つ選べ。

Ⅰ群
ア　責任がとれない　　イ　いつも変わらない
ウ　心が休まらない　　エ　思いどおりにいかない

Ⅱ群
カ　落ち着くところは　　キ　長期的に捉えると
ク　悲しいくらいに　　ケ　広い意味では

a [　]　d [　]

(2)　本文中の b そうした痛みは、何によって引き起こされるものか。最も適当なものを、次のア～エから一つ選べ。
ア　他者と自分の価値観に相違がないこと。
イ　他者や自分の気持ちを損なうような交流がないこと。
ウ　他者に対する考えが自分の中で変化すること。
エ　他者と自分が意思疎通をする中で食い違いが生じること。

[　]

(3) 次の文は、本文中の c「あった」にすぎないものだとすればに関して述べたものである。文中の[　　]に入る表現として最も適当なものを、後のア～エから一つ選べ。

> 痛みの意味が「あった」にすぎないものだとすることは、その人との関係がそれ以上にはならないことを示しており、痛みを認め、[　　]とすべきところを、しなかった状態を指している。

ア　自分が求めることと相手の重要性を確認し、相手の振る舞いを見直そう
イ　自分の行動や相手が重要であることを再確認し、相手の願望をかなえよう
ウ　相手の重要性を認識し、自分の思いを踏まえて適切な行動を検討しよう
エ　相手が重要でも、関係を希薄にすることによって自分の痛みを退けよう

[　　]

(4) 本文中の e陥ると f遡っての漢字の部分の読みをそれぞれ平仮名で書け。

e [　　]る　f [　　]って

(5) 本文中の gうまく生きては、二つの文節に区切ることができる。この文節どうしの関係として最も適当なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア　修飾・被修飾の関係　　イ　補助の関係
ウ　主語・述語の関係　　エ　並立の関係

[　　]

(6) 本文中の h加タンの片仮名の部分を漢字に直し、楷書で書け。

加[　　]

(7) 本文中のⅰそれの指す内容として最も適当なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア　問いに対する答えが多様であると指摘し、たとえ真剣に臨んだとしても自分一人で問いを解決することはできないと思うことで痛みを回避すること。

イ　問いの不完全さを示したり、問う者を非難したりして問いとしての意味を失わせて、自分が向き合うべきことはないと思うことで痛みを回避すること。

ウ　問う者に一方的な評価を加えるために、論理の矛盾点を指摘して問いを破綻させ、自分が問われるべき理由はないのだと思うことで痛みを回避すること。

エ　問いが難解だと指摘したり、問う者を追及して真意を解明したりして、問いが自分を非難するものとして不十分だと思うことで痛みを回避すること。

(8) 次の会話文は、仁さんと唯さんが本文を学習した後、本文について話し合ったものの一部である。これを読み、後の問い㈠・㈡に答えよ。

仁　本文では、「痛み」を感じることは悪くはないと述べられているよ。
唯　そうだね。他者との関係の重要性ゆえに私たちは痛みを感じるし、その痛みは、自分が他者に対して相互理解を求めていた［A］だから、私たちにとって有用だとも言えるんだね。
仁　うん。痛みから逃げず、自分を問い直すことは、「世界に対する自分の関わり方の可能性」が開かれることになると本文から読み取れるね。
唯　つまり、自分の世界は、今の自分が持つ［B］によって大きくなり、そのことがものの見方を多様化して［C］を深めることも可能にするんだね。そうして自分自身の人生をより良いものにしていくことが、私たちにとって適当なことなのではないかと筆者は述べているよ。

㈠ 会話文中の［A］に入る最も適当な表現を、本文中から十字で抜き出して書け。

□□□□□□□□□□

㈡ 会話文中の［B］・［C］に入る適当な表現を、本文の内容を踏まえて、［B］は十字以上、十三字以内で、［C］は四字以上、八字以内で書け。

B［　　　］によって大きくなり、そのことがものの見方を多様化して
C［　　　］。

B □□□□□□□□□□□□□

C □□□□□□□□

【京都府】

Step 2

二　次の【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

働きアリは自分たちの巣を守るためだけに、エサの採集、女王が生む子どもたちの育児、そして敵の襲来に対する防御などを行います。自分に与えられた使命を、生涯をかけて果たすように遺伝子によってプログラミングされているのです。

働きアリにとっては①そうした生き方こそが自分の遺伝子を共有する姉妹たちの生存率を上げることになり、ひいては働きアリの持つ遺伝子が次の世代に残る確率を最大化することにつながるようにできているのです。こうしたアリの徹底した社会システムを「真社会性」といいます。

ダーウィンの「自然選択説*」に基づけば、真社会性昆虫の巣では、全員が否(いや)が応でも働き者になるはずです。もし、少しでも「怠け者」が出てくれば、ほかの巣とエサや住処(すみか)をめぐる競争で負けてしまいます。だから「怠け者」の存在する余地なんて「理論上は」寸分もないことになります。

しかし、②事実は理論より奇なり。実際にアリの巣を観察していると、ほかの働きアリがせっせと働いているのを尻目に、１日中、なにもしないで巣穴でゴロゴロして過ごす「怠け者」が存在することがわかったのです。怠け者といえどエサは必要ですから、彼らもちゃんとエサだけは食べます。まさに無駄飯食いです。こんな働きアリが巣に居候(いそうろう)されたのでは、全個体が働き者という巣が別に存在したら、その巣に競争で負けてしまい、子孫を残すことが難しくなります。なので「怠け者」を作り出す遺伝子は自然界から淘汰*(とうた)されて消滅してしまうはずです。

ところが怠け者にもちゃんと存在意義があったのです。この怠け者がいる巣から、働き者のアリを除去してみると、今まで怠けていたアリたちが働き者に変化して、せっせと働き出すことがわかったのです。どうやらこの「怠け者」たちは、労働量が不足する事態が発生したときに巣全体の労働量を補填*するための予備軍らしいということがわかりました。もし、予備軍がなく、巣全体で１００％の

労働パフォーマンスを発揮し続けていたら、不測の事態が生じたときにパンクしてしまうことになるでしょう。アリの巣は最初からこの不測の事態を織り込み済みで、常に怠け者が生じるように遺伝的にプログラミングされているのです。

怠け者を「予備軍」と読み替えるだけで、みなさんの中でも、その存在に対する印象がガラリと変わると思います。結局「怠け者」というレッテル*は人間の③先入観がもたらしたものにすぎず、実際には彼らは働かずにじっと力を蓄えて待機する、という「仕事」をしているのです。

（五箇公一（ごかこういち）「これからの時代を生き抜くための生物学入門」による）

【文章Ⅱ】

アメリカの生態学者ティルマンは、草原に生える草の種類をコントロールする実験を行った。その結果、生物多様性が高くなると生産性が高まり、少々の環境変化があっても安定していることが分かったのである。単純に考えると、草原にもっとも成長スピードの速い草を一種類だけ植えることが、いちばん生産性の高い土地の利用法であると思ってしまうかもしれない。しかし現実はそうじゃなくて、種類がたくさんあったほうが、草原全体の生産性が高くなったのである。

草原の草は一見どれもおなじように見えるが、それぞれの性質は微妙に異なっている。そして、草原はどこもおなじように見えても、実は環境が微妙に異なっている。平坦（へいたん）な草原に見えても、きちんと調べれば土地にちょっとした起伏があることが分かるだろう。草原に雨が降って、その水が流れていく。長年のこのような過程が土を少しずつ削り、起伏が生まれるのである。すると、草原のなかに、少しだけ湿った場所や、少しだけ乾いた場所が生じるだろう。草は種類によって、湿った場所が得意なもの、逆に乾いていて日当たりの良い場所を好むものがある。草の多様性が高いと、草原内のいろんな環境にぴったりマッチした草が生えてくるので全体として生産性が高くなるのである。

④生物多様性が高いメリットはほかにもある。生態系にはいろんな突発的な出来事が起こる。たとえば、雨が少なくて干ばつが生じる年があるかもしれない。逆に、雨が多すぎて草原が水びたしになる年もあるかもしれない。そんなとき、干ばつに弱い草や、水びたしに弱い草は枯れてしまうかもしれない。生物多様性が高ければ、その場所に干ばつに強い草、水びたしに強い草が生えることが可能

だから、突発的な出来事が生じても、草原全体は安定するのだ。さらに、ある種の病気が流行したときに、草の種類が一種類だけなら草原の全体が枯れてしまう。草の種類が複数あることで、草原全体に及ぶ病気の影響が最小限にとどめられるのだ。ここで学んだように、⑤一見無駄なように思えてもいざというときに役立つという性質を冗長性という。冗長性を高めるため、僕らは生物多様性を守らなければならないのである。

（伊勢武史（いせたけし）「２０５０年の地球を予測する」による）

注

＊自然選択説…生存に有利な形質を持つものが生き残り、適応しないものは滅びるという、ダーウィン提唱の進化論。
＊淘汰…ここでは、外界に適応しないものとして滅びること。
＊補填…不足分を補って埋めること。
＊レッテル…ここでは、ある人物や物事に対する一方的な評価のこと。

問一　【文章Ⅰ】の本文中に「①そうした生き方」とありますが、このことを説明したものとして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　生涯をかけて、自分たちの巣を守るためだけに行動し続ける生き方。
イ　生涯をかけて自分の使命を理解し、徐々に任務を果たしていく生き方。
ウ　生涯にわたり、女王が生む子どもに、エサの採集方法を教える生き方。
エ　生涯にわたり、巣を守るよりも自分の遺伝子を残そうとする生き方。

□

問二　【文章Ⅰ】の本文中に「②事実は理論より奇なり。」とありますが、次の文は、このことを説明したものです。［　　］にあてはまる適切な表現を考えて、十五字以内で答えなさい。

ダーウィンの「自然選択説」の理論に基づけば、真社会性昆虫の巣では、エサや住処をめぐる競争に勝つために全員が働き者になるはずだが、不思議なことに、［　　］という事実が見つかったこと。

問三　【文章Ⅰ】の本文中に「③先入観」とありますが、次の対話は、このことについて【文章Ⅱ】と比べて話し合ったものです。［　　］にあてはまる言葉を、【文章Ⅱ】の本文中から八字でそのまま抜き出して答えなさい。

〈Xさん〉　【文章Ⅰ】でいう「先入観」は、人間があらかじめ持ってしまっている、働きアリに対する一方的な見方のことだよね。

〈Yさん〉　そうだね。そして【文章Ⅱ】の本文中にも、この「先入観」と類似する、人間のものの見方が例示されているよ。

〈Xさん〉　確かにそうだね。【文章Ⅱ】の、草原に生える草の種類をコントロールする実験の例では、「単純に考えると」という表現が用いられ、一番生産性の高い土地の利用法は、最も成長速度の速い草を［　　］ことだと思われやすいと書かれているよ。

〈Yさん〉　二つの文章中に現れた、人間のものの見方には、似通ったところがあるんだね。

問四 【文章Ⅱ】の本文中に「④生物多様性が高いメリット」とありますが、次の文は、このことについて、筆者が述べていることを説明したものです。あとの㈠、㈡の問いに答えなさい。

> 生物多様性が高いことで、草原内の［A］に適合した草が生えてくるため、草原全体としての生産性は高くなる。また、生物多様性が高いと、［B］ことにもなる。

㈠ ［A］にあてはまる言葉を、【文章Ⅱ】の本文中から六字でそのまま抜き出して答えなさい。

㈡ ［B］にあてはまる表現として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 病気の流行は起こりやすくなるが、一方で気象の変化には強い草が生き残る
イ 草原は不安定になるが、極端な環境の変化や病気の流行が起きたときには逆に安定する
ウ 極端な環境の変化が起きたあとには、より病気に強い種類の草が生まれる
エ 極端な環境の変化や病気の流行が起きたときに、草原全体が被る影響を最小限に抑える

問五 【文章Ⅱ】の本文中に「⑤一見無駄なように思えてもいざというときに役立つという性質を冗長性という。」とありますが、【文章Ⅰ】の本文中にも、この「冗長性」が現れている事例があります。その事例の内容を、五十字以内で説明しなさい。

【宮城県】

Step 3

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

　わたしたちが見たり聞いたりしたものを言葉で表そうとして、うまくいかないという経験は多くの方がもっておられるのではないでしょうか。たとえばわたしたちは自分の気持ちを「はればれとした」とか「うきうきした」といったことばで言い表したり、お茶の味を「まろやかな」とか、「うまみがある」といったことばで表現したりします。しかしそのような表現で、自分の実際の感情や、お茶の味を十分に言い表すことができるでしょうか。たとえば「まろやかな」という表現を、「味が穏やかで口あたりがよい、そして深い味わいが感じられる」といった言葉で説明することはできます。しかしその「深い味わい」がどのような味わいなのかをさらに説明しようとすると、言葉に窮することになります。
（第一段落）

　言葉は、たしかに、わたしたちが経験するものの一面を言い表し、他の人に伝えます。しかしそれはわたしたちが実際に経験していることの一部でしかありません。言葉による表現は、経験の具体的な内容をある断面で切り、その一断面で経験全体を代表させることに喩（たと）えられるかもしれません。その一断面からあらためて経験の全体を眺めたとき、両者のあいだに大きな隔たりがあります。そのあいだには無限な距離があると言ってもよいでしょう。
（第二段落）

　1「言葉」の語源は、「言の端（は）」であったと言われます。古くは「事」と「言」とは通じるものと考えられていました（言葉には、そのなかで言われているものを具体化する霊的な力が宿っているという、いわゆる言霊（ことだま）思想はそこから生まれたものでした）。しかしやがて「事」と「言」とは同じではないということに人々は気づくようになりました。言葉は「事＝言」として事柄全体を言い表したものではなく、そのほんの一端を言い表したものにすぎないということが意識されるようになったのです。そのために「言の端」という言い方がされるようになったのだと考えられています。
（第三段落）

言葉がそのまま経験であるとは言えないのは、それがわたしたちの具体的な経験を普遍的な概念によってひとくくりにしてしまうことと関わっています。たとえば桔梗（ききょう）[注1]の青、露草[注2]の青、都忘れ[注3]の青、それぞれの青は独特の色合いをもっていますが、言葉はその違いを無視して、それらすべてを同じ「青」ということばで表現してしまいます。そのことによって、個々のものがもっていた微妙な差異は一挙に背後に退いてしまいます。

（第四段落）

言葉は、それぞれ独自のニュアンス[注4]をもっていたものを、既成の2枠組み、言わば鋳型のなかに押し込んでいくという役割を果たしていると言ってもよいかもしれません。わたしたちがそのときどきに抱く感情も、決して一つのことばで表現できるような単純なものではなく、さまざまな相[注5]がそこには絡（から）まりあっています。また固定したものではなく、大きな振幅をもちながら、止（や）むことなく動いていきます。言葉はその動きの振幅を削りとって、それをたとえば「悲しい」とか「寂しい」といった一つのことばで表現するわけですが、そのことによって感情のもっともいきいきとした部分がことばの影に隠れてしまうのではないでしょうか。

（第五段落）

言葉によってわたしたちは多くのことを知り、多くのことを考えるわけですが、そこには制約もまたあるように思います。枠組みのなかに入らないものはとらえることができないわけですし、その枠組みに取り込まれたものは、その枠組みにあうように変形させられてしまいます。これは、言葉にどこまでもつきまとう根本的な制約であると言ってよいでしょう。それだけでなく、言葉は、この枠組みでとらえられたものが、もの自体であり、ものごとはそれによって正確にとらえられているという意識を、それを使う人のなかに生みだします。言葉はこの具体的な経験とのあいだにある隔たりを乗りこえることができないのでしょうか。

（第六段落）

言葉にはまず、ものをグループ分けする働き、つまりカテゴリー化する働きがあります。そこでは、いま目の前にしているリンゴ、たとえば紅玉[注6]の独特の赤い色とか、それ特有の甘酸（ず）っぱい味、あるいはそれが私の好みであるとかいったことは問題にされません。むしろリンゴに共通の性質ですべてのものをひとくくりにすることがその場合の唯一の関心事です。しかし、たとえば友人に「紅玉はおいしいよね」と語ったとき、この「紅玉」ということばは、その基礎的な意味を相手に伝えるだけでなく、相手がその味を知っている

場合には、その人のなかに、紅玉独特の強い酸味のきいた甘さをありありとイメージさせることができます。それを言葉の喚起機能と呼んでよいと思いますが、わたしたちは「紅玉」ということばを聞いたとき、その音声越しに基礎的な意味を聞くだけでなく、さらにその意味を越えて、このことばがもつ豊かな意味あいをも聞くことができるのです。ここに鍵がありそうです。（第七段落）

たしかに、わたしたちはいくらことばを重ねても、紅玉の微妙な味をことばで表現し尽くすことはできません。そこに言葉の限界があります。しかし他方、いま言った機能によって、その味を直接相手のなかに喚起することができます。そのような働きがあるからこそ、3わたしたちの会話は、平板な意味のやりとりに終始せず、いきいきとしたものになるのだと言えるのではないでしょうか。（第八段落）

（藤田正勝「はじめての哲学」より）

注1・2・3　いずれも植物の名称。　注4　微妙な意味あい。　注5　状態。　注6　リンゴの品種。

1　次のア～オは、本文で用いられている熟語である。熟語の構成が他と異なるものを、ア～オの中から一つ選びなさい。

ア　両者　イ　語源　ウ　思想　エ　一端　オ　他方

□

2　「1『言葉』の語源は、『言の端』であった」とあるが、「言の端」という表現は、言葉のどのような特徴を表しているか。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア　ある事柄を表現する言葉は、事柄の一部分のみを切り取って全体を表すことができるという特徴。
イ　ある言葉で表現された事柄は、全体像が切り取られて偽りの形でしか伝わらなくなるという特徴。
ウ　ある一つの言葉は、対応する一つの事柄とだけ通じて他の事柄を表すことができないという特徴。
エ　ある事柄を表している言葉は、事柄の全てではなく限られた一部分のみを表しているという特徴。
オ　ある言葉の語源となった事柄は、言葉が表している意味の一部分にだけ影響しているという特徴。

□

3　次の会話は、「2枠組み」について、授業で話し合ったときの内容の一部である。会話を読み、あとの⑴、⑵の問いに答えなさい。

Aさん　「既成の枠組みに押し込めるとは、つまりどういうことなのだろうね。」
Bさん　「たとえば、ア犬の毛がクリーム色でもチョコレート色でも、茶色の犬という枠組みで表すことがあるということではないかな。」
Cさん　「なるほど。様々な犬がいるけれど、イ特定の枠組みに入れられたことで、実際とは違う様子として表現されることもあるという考え方だね。本文から考えるとこういうウ枠組みの中での変化は、言葉で表現する以上は避けられないことのようだね。」
Bさん　「それで、エ枠組みに取り込むことが言葉と経験の間に隔たりを生む結果になると言えるのだと思うよ。」
Cさん　「それに、オ枠組みにまとめることで、意識的に物事を正確にとらえることができるのではないのかな。」
Aさん　「もう一度本文を読んで、筆者の意見を確かめてみようよ。」

⑴　会話文の中の――線をつけた部分が、本文から読み取れる内容と異なるものを、ア～オの中から一つ選びなさい。［　］

⑵　Aさんは、話し合いのあと、本文の内容について次のようにノートにまとめた。［　］にあてはまる最も適当な言葉を、第一段落～第四段落の中から十六字でそのまま書き抜きなさい。

○　枠組みに押し込めることの作用とは
(例)「悲しい」ということば
　実際には様々な相を持つ悲しさも、「悲しい」ということばで表されるとき、［　］は無視される。
⇩

独自のニュアンスをもっていたものが枠組みに押し込まれることで、感情のもっともいきいきとした部分がことばの影に隠れる。

4　本文における第六段落の働きとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア　言葉の制約について整理して問題提起の形で示し、第七段落以降で言葉の発展的な特徴を述べるための導入とする働き。
イ　言葉の不合理な特徴を複数の具体例の形で示し、第七段落以降で言葉の持つ働きを否定するための導入とする働き。
ウ　言葉の定義に関する意見を抽象化した表現で示し、第七段落以降で言葉の持つ欠点を述べるための導入とする働き。
エ　言葉の意味は使い方で変化することを示し、第七段落以降で言葉の正確な使い方を説明するための導入とする働き。
オ　言葉の働きに関する本文の内容を整理して示し、第七段落以降で言葉の持つ機能をまとめていくための導入とする働き。

5　「3わたしたちの会話は、平板な意味のやりとりに終始せず、いきいきとしたものになる」とあるが、会話を「平板な意味のやりとり」にする言葉の限界と、その限界を乗りこえ会話を「いきいきとしたもの」にする言葉の働きとはどのようなことか。七十字以内で書きなさい。

【福島県】

第十講　物語・小説の読解①

Step 1

一　次の文章を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

【ここまでのあらすじ】　小学生のミオは、近所に住む純一（じゅんいち）（五歳）、翔（しょう）（三歳）の兄弟と日頃よく遊んでいた。ある日、ふたりと遊ぶ約束をしていたことを忘れたミオは、家に来たふたりを追いかえしてしまう。夕方、約束を思い出したミオは、慌てて彼らの家を訪ねた。そこで、この数日間、ふたりが彼らのおばちゃんの家に預けられており、今夜はすでにその家で寝入っていることを知る。

ふたりはミオとの約束を守ったのだ。

おばちゃんの家からミオの家まで、幼い子の足だといったいどのくらいかかるのだろう。ミオの胸は、㋐しめった紙ねんどのように重たくかたまった。

ミオは通りをおばちゃんの家の方に向かって歩きはじめた。

もうふたりは家に帰っている。あとを追ってもしかたがないことはわかっている。でも、足はかってに歩き出していた。

道は川にそってまっすぐにつづいている。

街灯の光が粉々のかけらになり川面（かわも）にゆれる。

生け垣の中から犬がほえかかり、ミオはあわててとびのいた。車がスピードを上げて、すぐ脇を通りぬけた。

手をつないで歩くふたりに、犬はやっぱりほえかかったはずだし、車は小さい兄弟を脇に追いやったはずだった。

①ミオはだんだん早足になる。

まだ三歳の翔は遠い道をぐずったかもしれない。純一は約束を言って聞かせ、はげまして歩かせたのかもしれない。でも、はげます純一にしたってたったの五歳なのだ。

ミオはかけ出した。ａ冷えてこごえているせいか、からだが重たく感じられた。いつからこんなになったんだろうと、ミオはふしぎに思った。純一や翔と同じに、笑って息も切らさずかけまわれたからだを、いったいどこに置いてきたんだろう。

㋑びゅうと雪まじりの風が正面からふきつけた。

㋒風は千本もの小さな針になって、きりきりとミオのからだを刺しつらぬいた。

痛みなのか寒さなのかもうわからなかった。

顔をうつ雪はまつげにつもり、まばたきのたびに目にとびこんではほおをすべり落ちていく。視野がせばまり、見えるものがだんだんおぼろになっていく。

こごえた手でまぶたをぬぐうと、白く小さい影が遠くに浮かんでいるのがぼんやり見えた。

ミオは目をこすった。

かすんだ一本道の先に見えるふたつの影は、純一と翔だった。

ミオに背中を向けて、道路よりも少し高い場所を、何もない宙を、ふたりは手をとり合って翔(か)けていた。

純一はずり落ちたくつ下を気にするでもなく走り、翔は長いマフラーをなびかせて、大きいコートをふくらませてゆっくりと翔けていく。

ミオは小さく口をあけたまま立ちすくんだ。雪が口の中にとびこみ、かすかなほこりの味を残して消えていく。

これはふたりの②夢なのかもしれない。

身を寄せて眠る純一と翔の見ている夢。そこで遊ぶ小さい魂(たましい)は自由になれるのかもしれない。

ミオは思わずふたりの名を呼んだ。

純一がふり向いた。

翔がほほえんだ。

純一が笑顔で手まねきをする。翔がうれしそうに翔けまわる。㋓雪は羽毛のようにふたりのまわりをかろやかに舞っている。

ミオはまたかけ出した。

つんのめるようにしてあとを追った。

でも、ミオが追いかけたとたんにふたりの影は遠ざかった。

走れば走るほど、ふたりは遠く小さくなっていく。そしてだんだんとすがたはかすれ、ゆらめいては淡くなっていく。

何度もころびそうになりながらミオは走った。でもどうしても追いつけなかった。

ミオにはわかりはじめていた。今日のふたりにはもう追いつけないことが。

ふたりはまた会いにきてくれるだろうし、また同じようにミオをしたってくれるだろう。でも、今日のふたりには二度と会えない。あの、追いかえしてしまったふたりにはもう二度と会うことはできないのだ。

雪の勢いはb増し、灰色のカーテンがおろされたように視界をさえぎり、やがて何も見えなくなった。

③ミオはよろけるように足をとめて、肩で大きく息をした。

（安東みきえ「針せんぼん」より。一部改変）

問一　本文中のa冷えて　b増し　の――線を施した漢字の読みを、平仮名で書け。

a　[　　]えて

b　[　　]し

問二　本文中の②夢を楷書（かいしょ）で書いた場合の総画数と、次の1～4の行書の漢字を楷書で書いた場合の総画数が同じものを、一つ選び、その番号を書け。

1 設
2 雑
3 絹
4 程

問三　本文中に①ミオはだんだん早足になるとあるが、このときのミオについて説明したものとして最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　幼いふたりを裏切ったことにより、自分も何らかの罰を受けることになるかもしれないと、強い恐怖を感じている。
2　自分に会いに来た幼いふたりの様子を思い浮かべては、早くそのふたりに会わずにはいられないと気が焦（あせ）っている。
3　道すがら降りかかってくる危険に、ふたりの身を案じ、その危険を早く取り除いてやりたいと、落ち着かずにいる。
4　互いに支え合うふたりの姿に自分の幼さを感じつつ、一刻も早くふたりに会い感謝の言葉を述べたいと考えている。

問四　本文中に③ミオはよろけるように足をとめて、肩で大きく息をしたとあるが、ここでミオが「足をとめ」たのは、どういうことを実感したからか。解答欄の下の語句に続く形で、二十字以上、二十五字以内で考えて書け。ただし、約束という語句を必ず使うこと。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□ということ。

問五　本文の表現について説明した文として、最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　㋐しめった紙ねんどのように重たくかたまったは、おばちゃんの家にいる幼いふたりに会おうとして、ミオが強い決意を胸に抱いて歩き出す思いの深さや重みについて、象徴的に述べている。

2　㋑びゅうと雪まじりの風が正面からふきつけたは、速さを表現する比喩を使うことにより、ふたりと楽しく遊んだ日々について一瞬のうちに振り返るミオの姿を、読者に強く印象づけている。

3　㋒風は千本もの小さな針になって、きりきりとミオのからだを刺しつらぬいたは、吹きつける風雪による痛みを示すだけでなく、自分の行動が招いた結果に苦しむミオの心の痛みも表している。

4　㋓雪は羽毛のようにふたりのまわりをかろやかに舞っているは、擬態語を使って、ふたりの楽しそうな姿を表現する一方で、ふたりとミオとの仲が浅いものに過ぎなかったことを強調している。

□

【福岡県】

Step 2・3

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

> 北九州工業高校の女子生徒三郷心は、鉄を回転させながら、「バイト」と呼ばれる刃物状の工具で加工する「旋盤」に魅力を感じ、「ものづくり研究部」に入った。心は「高校生ものづくりコンテスト」を目指し、「旋盤の鬼」と言われている先輩の原口、同級生の吉田、亀井たちとともに練習を重ねている。

年が明け、三学期に入った。

吉田も亀井も練習に励み始めた。原口はそんなふたりのために、練習メニューをつくってやった。心にも専用のメニューが配られた。

①自分用のメニューを見た時、正直目を疑った。基礎練習。そこには新しい項目はなかった。メニューどおりの練習を始めたが、心は大いに不満だった。こんなにも意欲はあるのに、それを発揮する手立てがない。心はふと思い当たった。もしかしたら、自分がめきめき腕を上げているのが原口は悔しいのではないだろうか。そんなふうに思うと、原口の切れ長の目が、意地悪そうにゆがんで見えてくる。

気を取り直して工作物をはめ込み、練習にかかる。

キーン。バイトが工作物に触れ、高い音を響かせた。鉄が回転する。そこにバイトが触れる。触れた分だけ鉄は削り取られて形を変える。寸法どおり削れたところで、心はブレーキを踏んだ。

我ながら、ずいぶん上達したと思う。もう練習を始めた頃に感じた戸惑いや恐怖を感じることはない。ごく自然に、あたりまえの作業として、機械を動かすことができる。こんなにうまくなったのに。

その時、先に置いてあった円錐状の物体が目に入った。亀井のテーパ※。心は引き寄せられるようにそれを手に取った。

なめらかだった。手作業の工程で、こんなに美しい切削ができるなんて。

しばらく眺めたのち、心（しん）は※定盤（じょうばん）にそれを戻した。亀井を見る。いつものように淡々と作業を続けている。焦（じ）れるような熱がみぞおちに込み上げた。②自分でも持て余すような感情を払いのけるように、心（しん）はもう一本丸棒を握った。

先に進めないのなら、せめて倍の量やろう。

「それはメニューにないやろ。」

「でもやります。」

原口は、それ以上は何も言わなかった。

小さな事故が起こったのは、それから四十分後だった。右手の人差し指の先に冷たい感触が走った。※キリコのかけらが突き刺さっていた。

よかった、血は出ない。と思ったとたん、待っていたかのように血液があふれ出してきた。

「きゃっ。」

「どうしたんか。あっ救急箱！」

小さな悲鳴に感づいた原口が叫び、中原（なかはら）先生が救急箱を持ってかけてきた。

「病院に行こう。」

中原先生が上ずった声で言うのがきこえた。

傷口は三針ほど縫われた。向かった救急病院にちょうど腕のよい形成外科の先生がいて、細かく縫ってくれたのだ。おかげで傷あとも残らずにすむらしい。幸い神経までは達しておらず、抜糸をして傷あとが治れば、感覚も戻るだろうということだった。

「神経切らんでよかった。」

帰りの車のなかで、中原先生はしみじみと言った。

「すみません。」

心（しん）はバックミラーに映る中原先生の額に向かってあやまった。けがの原因は自分にあるのはよくわかっていた。原口のメニューに従わなかったからだ。あせっていた。あせりが無理を呼び、疲れてしまっていた。原口の考えてくれたメニューは、個人の経験や体力に合わ

せてあったのだと改めて思い知らされた。

次の日から定盤の一角が、心の指定席になった。製作図と照らし合わせながら、部員の作業を見るのは、思いのほか楽しいものだった。ままにならない指をくわえて、ほかの部員が上達していくのを見るのは、さぞつらいだろうと予想していたので、それは意外なことだった。あせったところでこの指ではかなわないし、まだ痛みもある。今はじたばたできないと開き直ったせいもあるけれど、よく考えてみると、心はもともと職人の仕事を見るのが好きだったのだ。機械音に耳を澄ませながら部員の作業を見ていると、③見学台に座って見渡していた祖父の工場のことが、鮮やかによみがえってきた。

止まることのない工作物の回転や、せわしなく動く職人の手、花火のようなオレンジ色の火花と、ダイヤモンドのようにはねる鉄のしぶき、キリコ。そして、工場内に響き渡る機械の音。当時は断片的に視覚や聴覚に訴えていたものが、今、確かな作業のつながりを伴って目の前にある。そして全体像をつかんだ今、幼い目には非日常の不思議さに満ちて見えていた祖父の工場が、きわめて地道な仕事の場であったことも理解した。

「また、※びびったー。」

吉田が声を上げている。なかなかうまくいかないようだ。バイトを変えてもう一度削り始めたとたん、こんどは妙に重たい音がし始める。

削りすぎ？　心は席を立って、吉田の旋盤に歩いていった。

「バイトをもうちょっと離したほうがいいよ。」

そうアドバイスすると、吉田はへらへらと笑った。

「それはわかっとるんよ。でも面倒なんよねー。」

ダイヤルの微調整をしながら何度も仕上げていくのは、確かに面倒だ。大胆にも一気に削ってしまおうと思ったのだろう。

「なんかいい方法ないかのう。」

「つまらんこと考える暇があったら、手動かせの。」

作業をやめて、腕組みをする吉田の坊主頭を、ちょうど回ってきた中原先生は、ぐりぐりとなでた。そうしながら、

「三郷、原口がネジ切りに入るぞ。」

教えてくれたので、さっそく見に行く。旋盤が回り始める。

キュルルーン。近くできいても、原口の切削音は澄んでいる。すぐにうっすらとネジの溝ができてきた。工作物の上をバイトが移動するたび、ネジの溝が深くなる。

「だんだん浮き上がってきた。」

つい言ってしまって、心(しん)ははっとした。自分の言葉に驚いた。ネジが浮き上がってくるわけもないのに。これじゃあ、まるで、亀井が運慶(うんけい)の彫刻を表現した時みたいだ。今、目の前で徐々に姿を現すネジを見ていると、浮き上がってくるという表現はとてもしっくりくるようにも思えてくる。あらかじめ隠れていたネジ型が、原口の作業によって発掘されたような感じだ。それほどに硬い鉄が自然に形を変えたように見えた。

とん、と、胸が大きく打った。ずっと見慣れていた四角形が、裏に回ったらじつは丸かったのがわかったようなちぐはぐな感覚だ。混乱しているくせに、なぜか視覚だけは妙にクリアだ。浮かび上がるネジから目を離すことができない。

正しい形をつくるために、心(しん)は鉄に立ち向かうような気持ちでいた。けれど、確かな技術というのは、硬い鉄さえも自然に変化させる力を持っているものかもしれない。

亀井を見た。亀井は自分の旋盤についていた。その手元が見える。どうやら原口と同じ作業をしているようだ。すでにネジ切りを習得しているらしい。

完全に離されてしまった。

前みたいに、焦げつくような痛みは感じなかった。ただ胸にやるせない風が吹き抜けたようになって、心(しん)は定位置に戻った。

試されていたのかもしれん。

一日も早くすべての切削ができるようになりたかった。自分の思いは本物だったはずだ。が、その先を冷静に考えてみて、④心(しん)は首を振った。

自分は、ただ高い技術を身につけたいとばかり、純粋に思っていたわけではなかった。見当ちがいに原口を邪推し、亀井には、刃(やいば)のよ

うな競争心を感じていた。意欲は本物だったけれど、それに固執するあまりにやはりどこかがゆがんでいたのだ。神様は、それをたちどころに見抜いたのだろう。

心（しん）はファイルに手を伸ばした。気を取り直してページをめくる。と、赤い折り紙がはらりと落ちた。それを手に取った。折りヅルでも折ってみることにする。

「あれ？」

うまく角が合わない。普通なら目をつぶっても折れるくらいなのに、一か所折るのに思わぬ時間を要した。指が一本使えないだけだと思っていたけれど、実際にやってみると、一本使えないことで、ほかの指も不自然な動きになってしまう。

なんとかひとつ折り上げた時には、三十分くらいが経過していた。

その日から、練習を見学する時には折り紙を折るようになった。よくしたもので、しだいに慣れてきた。指の動き方がわかってきたようだった。薬指や小指は自在に動かすのがとても難しかった。いちばん活躍していた右手の人差し指が封じられたことで、それがよくわかった。けれども封じられた機能は、ほかの指の使い方によっては、ちゃんとフォローできるし、動きが鈍かった指も鍛えれば細かく動く。

五十枚入りの折り紙が半分ほどになった頃、それがわかった。そして、いつも折っていたような折り目正しいツルが、手から生まれるようになった頃、心（しん）は傷口を抜糸した。

（まはら三桃（みと）「鉄のしぶきがはねる」より。一部省略がある。）

（注）※テーパ……円錐状（えんすいじょう）の工作物。
※定盤（じょうばん）……測定作業の際に「平面」の基準となる水平な台のこと。
※キリコ……切削の時に出る鉄くず。
※びびった（びびる）……作業時に大きな振動音が出て、製品の出来上がりが悪くなること。

Step 2

問1 ①自分用のメニューを見た時、正直目を疑った。とありますが、心が「目を疑った」理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 練習メニューは、心の体力では到底ついていけないものであり、メニューを考えた原口の意地悪と思われるものであったから。
イ 練習メニューは、原口が安全を第一に考えて作ったものであり、心に対する配慮や思いやりが感じられるものであったから。
ウ 練習メニューは、心自身が上手に作業できるようになったと思う内容ばかりで、心にとっては自尊心を傷つけられるものであったから。
エ 練習メニューは、心の技術のレベルを超える難解なものばかりで、メニューを考えた原口の意図をはかりかねるものであったから。

□

Step 2

問2 ②自分でも持て余すような感情とありますが、次は、このときの心の感情を説明したものです。空欄にあてはまる内容を、アは二十字以上、三十字以内で書き、イは本文中から探し三字で書き抜きなさい。

亀井が、ア［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］のを見て、イ［　　　］を感じたということ。

Step 3

問3　③見学台に座って見渡していた祖父の工場のことが、鮮やかによみがえってきた。とありますが、次は、祖父の工場について、心の見方が幼いころと今とを比べてどう変わったのかをまとめたものです。空欄にあてはまる内容を、五十五字以上、六十五字以内で書きなさい。

幼い目で見た祖父の工場は、□□□ということを理解できるようになった。

Step 3

問4　④心は首を振った。とありますが、このときの心の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　早く切削の技術を習得したいという向上心を持っていたが、実際は自分の技量が低いことを悩んでいた。
イ　仲間と張り合う気持ちがあるようにふるまっていたが、心の中では仲間のだれとも競いたくなかった。
ウ　練習を積み重ねることで自分の技術に自信を持つことができたが、さらに多くを学ぼうとする意欲を失っていた。
エ　自分では目的に向かってひたすら努力していると思っていたが、周囲の人々を誤解し、自分勝手なこだわりを持っていた。

□

Step 3

問5　本文の表現について述べたものとして**適切でないもの**を、次のア～オの中から**二つ**選び、その記号を書きなさい。

ア　心、原口、亀井などの複数の登場人物の視点から、それぞれの人物の心情が表現されており、読者が登場人物の心情を客観的に理解できるようになっている。

イ　「キュルルーン」「妙に重たい音」などの擬音語や比喩などを使って、登場人物の作業の様子や工場内の様子が効果的に表現されている。

ウ　「試されていたのかもしれん」のように、地の文に登場人物の心の中の言葉が入ることで、登場人物の感情や考えが直接的に表現されている。

エ　折りヅルを折る描写により、心の指の傷が回復し、気持ちが整理されていく時間の経過が象徴的に表現されている。

オ　現実と回想の場面が交互に繰り返して表れることによって、登場人物の成長していく様子が、多面的に表現されている。

□と□

【埼玉県】

〈*Note*〉

第十一講　物語・小説の読解②

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの1～5の問いに答えなさい。

> 高校二年生の加納碧李(かのうあおい)は陸上部の選手として、監督の箕月(みつき)、マネージャーの杏子(きょうこ)と信哉(のぶや)が見守る中、五月の記録会に出場する。

去年の秋、味わった敗北は、碧李の内に深く刻まれ、時折、疼(うず)く。県営競技場での試合、最下位でゴールした。いや、成績や順位ではない。それはそれで無残な数字ではあったけれど、数字に負けたわけではないのだ。あの試合以後、走ることそのものに怯(おび)え、背を向けた。自分にも周りにも言い訳をし、誤魔化(ごまか)し、遠ざかろうとした。それこそが敗北だ。碧李は敗北の正体に気がついてしまった。①気がつけば、見据(みす)えるしかない。

スタートラインに十六人の選手が並ぶ。一人一人の名前と校名が放送され、その度に拍手が起こる。最後の選手の紹介が終わり、一瞬、静寂が訪れる。スタート。選手たちは一つの塊になり、走り出す。

「どうだ?」「どう?」

箕月と杏子の声が重なった。碧李のラップ・タイムを尋ねているのだ。信哉は黙って、ストップウオッチを差し出した。

「69・01……。この数字は、明らかに飛ばしすぎでしょ」

「……ですね」

首肯(注)する。

この数ヶ月、碧李のラップ・タイムが七十秒を切ったことは一度もなかった。何度か箕月に指示を仰いだが、「好きに走らせろ」ほとんどその一言で片づけてしまう。いいのかな、このままで……。ふっと思い、焦る。焦ろうとしない監督が歯痒くもあった。箕月の言葉は決して的外れではないけれど、曖昧で抽象的で指導の域には入らない。今、加納に必要なのはもっと具体的なコーチじゃないんですか。はっきり言葉にしてみようか。箕月なら、真剣な言葉にきちんと耳を傾けてくれるはずだ。どうしようか。②思いあぐねもしたけれど、信哉は結局、何も口に出さなかった。遠慮したわけではない。箕月が指導者としての資質に溢れていることは、選手としてもマネージャーとしても十分、感じ取っている。その監督が好きに走らせろと言うのなら、好きに走ったその先に、信哉には見えない光が灯っているのかもしれないと、考えたのだ。

このまま、潰れちまうわけがない。練習の後、暮れなずむグラウンドで、口元を引き締め俯いていた横顔を幾度も目にした。頰に汗の跡を残した顔は、「もう、だめだ」「苦しい」「おれは、ここまでかもしれない」そんな、弱音や苦悶(注)の滲んだ一言より何倍も雄弁に、ランナーの焦燥を語っていた。荷を下ろせたから走るのではなく、背負ったままでも走る。碧李の決意を信哉は見事だと思う。ランナーとはそういうものなのだと、思い知らされる。

二周目、ラップ・タイム、68・03。

「このままだと、ゴールまでもたないんじゃないですか」

碧李はペースを完全に見失い、引きずられている。昨年と同じだ。同じことがまた、繰り返される。何も言わない箕月に、杏子が苛立つ。

「③おまえら、何を見てるんだ」

「え?何をって……加納くんに決まってるじゃないですか」

「いつの加納だ?」

杏子が息を詰める。箕月の一言が理解できない。

「おまえらの見ているのは、今の加納じゃない。去年、途中でへたれた加納碧李だ。去年の結果を引きずっているのは、加納じゃなくておまえたちじゃないか。引きずったままだから、今が見えないんだ。しっかり目を開けて、今の加納を見てみろ」

その一言に押され、視線を向ける。④<u>あぁと声をあげそうになった。</u>

「どうだ?」

箕月が問うてくる。口元がほんの少しだが綻（ほころ）んでいた。

久々に、碧李の走りを見た。最初に目にしたのは、陸上部に入部した日、初めて部活動に参加したときだった。一年生はまだ、競技パートに分かれての練習はなく、ひたすらグラウンドを走っていた。そのとき、十人ほどいた集団の中で、碧李の走りは群を抜いて美しかったのだ。それは抑制の美しさだった。優れた舞踏家のように身体の隅々まで抑制が利（き）いている。抑制により蓄えられた余力が持久力となり、何周走ってもフォームは乱れなかった。

あの走りだ。春たけなわのグラウンドで、初めて目にしたときのあの走りだ。いや、ちがう。強くなっている。背は高いが、その背に見合っただけの筋肉も骨格もまだ十分でなかった一年生のときより、ずっと強く、たくましくなっている。

（あさのあつこ「スパイクス　ランナー」より）

(注)　首肯＝うなずくこと。
　　　苦悶＝苦しみもだえること。

1　――線部①の碧李の決意が信哉の視点からとらえ直されている一文を抜き出し、その最初の五字を書け。

2　次の文は、――線部②で信哉が何も口に出さなかった理由を説明したものである。［Ⅰ］・［Ⅱ］に入る最も適当な七字の言葉を、それぞれ本文中から抜き出して書け。

碧李に対して［Ⅰ］が必要だと思っていたが、［Ⅱ］という箕月の言葉の先にある可能性を信じてみようと考えたから。

Ⅰ □□□□□□□
Ⅱ □□□□□□□

3　――線部③「おまえら、何を見てるんだ」という言葉で箕月が二人に伝えようとしたことは何か、三十字以内で書け。

4　――線部④「あぁと声をあげそうになった」とあるが、その後、二人が見たのは碧李のどのような走りだったのか、三十五字以内で書け。

5　本文の表現の特徴として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア　時間の順序に従った描写や感情を抑制した表現をすることによって、登場人物の心情や行動を客観的に描き出している。

イ　過去と現在の場面を巧みに重ねることによって、これまでの経緯を浮き彫りにし、物語の展開に奥行きをもたせている。

ウ　比喩（ひゆ）を用いて人物の性格や行動を誇張することによって、深刻で重くなりがちな場面にユーモラスな雰囲気が加えられている。

エ　擬態語や擬音語を数多く用いることによって、登場人物の心情が感覚的に表現され、場面全体に躍動感が生まれている。

□

【鹿児島県】

Step 2・3

二 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

「その投げ方じゃ、だめだな。」

いきなり背後から聞こえた声に、純也（じゅんや）はびっくりして、ボールを投げようと振り上げていた手を思わず止めた。

振り返ると、伊予灘（いよなだ）の方角に沈もうとしていた夕陽（ゆうひ）が目に飛び込んで、相手が黒い影にしか見えなかった。草叢（くさむら）に立つ自分より背の高い影が、また声を上げた。

「その投げ方じゃ、カーブは曲がらないぞ。」

純也は夕陽にグローブをかざし、相手の顔を見た。てっきり年長の男児だ、と思っていた影が、スカートを穿（は）いているのに気付き、よけいにびっくりした。

両手を威張ったように腰に当て、仁王立ちしている恰好（かっこう）は、スカートを穿いていなければ、年長の男児にしか見えない。このあたりでは見かけない顔だった。

(1)「何だ？　おまえは……。」

純也は驚かされたことに腹が立って、ぶっきら棒に言った。

「だから、その投げ方じゃ、カーブは投げられないって言ってるんだ。」

相手も怒ったように言い返した。

純也はたじろいだ。しかしすぐに相手が自分とそう年が変わらない少女だということに気付いて、

「放っとけ。」

と怒鳴り返した。

純也はボールを投げていた廃工場の壁にむき直って、左足を上げ右腕を背後に引いた。投げようとした瞬間、

「だめだって、それじゃ。」

と相手が大声を出し、純也の指先を離れたボールはとんでもない方向に転がってしまった。

ハッハハハ、相手が笑った。純也は頭にきて少女を睨(にら)み付けた。

「おまえ、うるさいんだよ。あっちへ行け。」

それでも少女は白い歯を覗(のぞ)かせて、笑っている。純也は舌打ちをして、ボールが消えていった草叢の方に走り出した。ボールを拾い、マウンド代(が)わりにしていた場所に戻ろうとすると、少女はまだそこに立っていた。純也は相手を無視することに決めた。

純也は壁にむかってボールを投げた。力んで投げてみるのだが、上級生の投手が投げるようにカーブが上手(うま)く投げられなかった。同じ歳(とし)の少年の中では、純也は一番速い球を投げることができると自負していたし、ストライクを何球も続けて放ることができた。来春、三年生になれば、町内の年少組の野球部に入れる。そこで純也はピッチャーをやりたかった。しかし少女が言ったように、カーブが上手く曲がらない。

——うん？

純也は投げるのを止(や)めて、首をかしげた。

——なぜ、あいつ、俺がカーブを投げる練習をしとるのがわかったんだ？

純也は少女の方を振りむいた。少女は同じ姿勢で立っていた。

「あのさ、その握り方じゃ、ボールは曲がらないんだよ。」

——握り？　何を言ってるんだ、こいつ……。

(2)純也は眉を上下して、少女を見直した。

聞き慣れない言葉遣いもそうだが、相手の言い方にはどこか自分を馬鹿にしているような感じがあった。

「じゃ、おまえがカーブを投げられるんなら、投げてみろや。」

純也が言うと、少女は、いいよ、と平然とした顔で歩み寄り、純也の手からボールを取り、壁にむかって背筋を伸ばして立ち、ボールを握った左腕を二度ぐるぐると回転させた。

――サウスポーか……。

純也が胸の中でつぶやいた時、少女は右足をゆっくりと上げ、右手を前に突き出し、左手を大きく上げて一気に振りおろした。ボールは壁の手前でブレーキがかかったようにカーブし、純也が壁にチョークで描いていたストライクゾーンの真ん中に当たり、ポンという乾いた音を立てた。

(3)純也は口を半開きにして、壁と少女を交互に見た。ボールもよく曲がったが、それ以上に少女の投げたボールには迫力があった。

――な、なんだ、こいつは……。

少女は少し不満そうな顔をして、首をかしげていたが、純也を見てにこりと笑った。そうして草叢に入り、ボールを拾って戻ってくると、ボールを握った手を純也に見せた。

「ほら、人さし指と中指をこうやって少し外にずらすんだ。やってみな。」

純也は少女が握って見せたやり方で、ボールを握ってみた。

「違うよ。もう少し外にずらすんだ。」

純也が指をずらすと、ボールが手からこぼれ落ちた。少女はボールを拾って純也に渡し、ぎこちなくボールを握っている純也の指の上から彼女の指を覆い被(かぶ)せるようにした。温かい手だった。

「ほら、こうだよ。親指もしっかり握ってないとだめだ。ちいさい手だな……。でも毎日練習すれば握れるようになるよ。」

そう言われて少女の手を見ると、純也よりひと回り大きかった。

「こうしてごらん。」

少女は言って、左手の人さし指と親指の腹を合わせて、パチンと音を立てた。純也は右手の指で同じようにしたが、音など出なかった。

「ボールを放す時、この感じで放すんだ。すぐにできなくても、きっとできるよ。」

そう言って少女は左手を振りおろしながら指で音を立てた。

「はあ……。」

(4)いつの間にか少女にうなずいている自分に気付いて、純也は唇を噛(か)んだ。

「おまえ、どこの誰や？」

純也が言って顔を上げると、少女はもう草叢のむこうまで走り出していて、頑張れよ、と男のような言葉を残して立ち去った。

「チェッ、何が頑張れじゃ。」

純也は舌打ちし、右手の人さし指と親指を鳴らそうとしたが、何も音はしなかった。

(5)周囲を見ると、すでに陽は落ちて晩秋の薄闇が原っぱにひろがろうとしていた。

「あっ、いけねぇや。」

純也は言って、あわてて走り出した。

（伊集院　静「どんまい」〈「ぼくのボールが君に届けば」所収〉より）

Step 2

〔問1〕(1)「何だ？　おまえは……。」とあるが、このときの純也の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　自信があるカーブの投げ方を否定されたことに不快を感じ、親しげに話しかける少女の態度に反感を覚えている。

イ　少女から怒りをあらわにして声をかけられたことで恐れを感じ、どう答えてよいか分からずにとまどいを覚えている。

ウ　見ず知らずの少女から不意に声をかけられたことで動転するとともに、自分が驚かされたことに怒りを覚えている。

エ　自分の投げ方をからかわれたことにいきどおるとともに、いつまでもしつこく冷やかしてくる少女に困惑を覚えている。

□

Step 2

〔問2〕 (2) 純也は眉を上下して、少女を見直した。とあるが、純也が「眉を上下して、少女を見直した」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　カーブを投げられないわけを丁寧に指摘しながらも、馬鹿にするかのような態度を取る少女の気持ちをはかりかね、不安に思ったから。

イ　カーブの練習をしていることを見抜くとともに、自分の理解できないことを言う少女が、どのような人物かを確かめたいと思ったから。

ウ　学年で一番速いボールを投げられることに誇りをもっている自分を少女がけなしてくるので、絶対に見返してやろうと思ったから。

エ　少女がカーブの投げ方を教えてくれたことに驚き、初対面の自分に対して親切に接してくれているのはなぜかと不審に思ったから。

Step 3

〔問3〕 (3) 純也は口を半開きにして、壁と少女を交互に見た。とあるが、この表現から読み取れる純也の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　目の前にいる少女が自分を圧倒するほどのボールを投げたということが信じられず、何が起きたのかを確かめようとしている様子。

イ　見事なカーブを投げた少女が実力をひけらかすような表情を見せたことに驚いて、どうしたらよいか分からずにあきれている様子。

ウ　ボールがあまりにも大きく曲がったことをおかしいと思い、少女が何か巧妙な手段を使って投げたのではないかと疑っている様子。

エ　少女の投げたボールが自分の投げるボールとは比べものにならないほど速かったことに慌ててしまい、ひどく取り乱している様子。

Step 3

〔問4〕 (4)いつの間にか少女にうなずいている自分に気付いて、純也は唇を嚙んだ。とあるが、このときの純也の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　カーブの投げ方を少女から細かく教えてもらっているにもかかわらず、上手に投げられないことに情けなさを覚え、悲しく思っている。

イ　少女の言うとおりにいくら練習しても、カーブを投げられるようにならないのではないかというあせりを覚え、心もとなく思っている。

ウ　初めて出会ったのに熱心に教えてくれる少女への感謝を、うまく言葉で伝えられない自分にもどかしさを覚え、腹立たしく思っている。

エ　知らず知らずのうちに少女の実力を認めさせられ、反発しつつも結局は素直に従っている自分にふがいなさを覚え、悔しく思っている。

Step 3

〔問5〕 (5)周囲を見ると、すでに陽は落ちて晩秋の薄闇が原っぱにひろがろうとしていた。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 純也が少女からカーブの投げ方を教わった瞬間の情景を、晩秋の夕暮れの鮮やかな色彩に着目して絵画的に表現している。

イ カーブを投げる練習に没頭していた純也が我に返る瞬間を、晩秋の日没の情景に重ね合わせて印象的に表現している。

ウ 指を鳴らそうと思ってもできなかった純也が失望した瞬間を、闇が広がっていく晩秋の情景によって象徴的に表現している。

エ 少女の実力に驚かされた純也の動揺と晩秋の夕陽が沈んでいく瞬間とを、巧みに描き分けて対照的に表現している。

□

【東京都】

第十二講 物語・小説の読解③

Step 1

一 次の文章を読み、あとの(1)～(6)の問いに答えなさい。

五人一組で参加する俳句甲子園。加藤東子(はるこ)たちの俳句同好会は、二年生三人と一年生三人の六人。敗者復活戦で「草笛」という題を与えられた彼女たちは、一時間以内にチームとしての一句を提出しなければならない。

「友呼ぶ草笛は耳にやはらかし」
会長の須崎茜(あかね)が自分の披講(注1)を終わらせ、井野瑞穂(みずほ)を見る。打てば響くように瑞穂が続けた。
「草笛は空耳課題はかどらず」
一年生三人の披講は、誰が決めたわけでもないのに順番が一定になっている。桐生夏樹(きりゅうなつき)、北条真名、三田村理香。
今もその順に、テンポよく披講が行われた。
「海遠し青き匂(にほ)ひの草の笛」
「草笛を鳴らせぬ子らの赤き頰」
「草笛や十二音階定まらず」
みんな、自分らしい句を詠(よ)んでいる。夏樹は最近「の」の音を重ねるのに凝っていたし、真名は子どもを詠むのが好き、理香はきっと草笛でピアノみたいに演奏ができないことがもどかしかったのだろう。

そんなことを思いながらも、実は、東子は最初の句を読んだ時の、きっぱりとした茜の声が耳から離れない。

——友、か。

顔を上げると五人の目とぶつかる。そうだ、東子は六番目の会員だ。

東子は口を開いた。俳句甲子園への練習が本格的になってきてから、全く作句に参加してこなかった。自分に才能がないのはすぐに思い知らされたし、東子が作句したら選手、特に瑞穂が気にしそうだったから。でも、披講するならこの順番だろう。スタメン(注2)ではないけど会員であるマネージャー、いや副会長の東子。

「草笛や言葉にまとめられぬもの」

それまでノートに一心不乱に書きつけていた瑞穂がはっとしたように顔を上げた。その横の茜は、一瞬ぽかんとしてから、徐々に表情をほころばせる。

A 魔法のようだ。

友呼ぶ草笛は耳にやはらかし。

草笛や言葉にまとめられぬもの。

茜と句をやり取りしただけで、ほかに何も話していないのに、気持ちが通じ合ったと思えた。

「言葉にまとめられぬもの、ですか」

夏樹がつぶやいたことで、茜も我に返ったようだ。ふっと息をついて会員を順に見ながら口を開いた。

「どう？　どの句が一番気になった？」

発言を促され、真名が言った。

「私、トーコ(注3)先輩の句です。『言葉にまとめられぬもの』。草笛と言葉、その対比を思わせる感じが好きです」

東子はどきどきしてきた。きっと顔が赤くなっている。

東子の句を、いいと言ってくれた。創作で評価された。

だが、すぐに理香がこう発言したので、話は次に移った。

「私ね、誰の句っていうより、草笛に対して結構みんなネガティブだなあって、それが印象的だった。井野先輩の草笛は［　B　］、私の草笛も音階が不確かで不完全燃焼な気持ちについての句だし、真名にいたってははっきり『鳴らせぬ』だよ」

夏樹が抗議する。

「仕方ないんじゃない？　だって、みんなでためしに草笛に挑戦してみたけど、誰一人吹けなかったんだから」

この一年生トリオは強い。さっきの負けも引きずらない。東子はやっと肩の力が抜けるのを感じた。C小さく笑ってみる。と、瑞穂と目が合った。穏やかな表情で返してくれる。

「いいじゃない、それも草笛だよ。うまくいかない、あぶなっかしいもの。私たちの草笛の解釈はそういうことなんだよ。あ、あと会長が珍しく破調（注4）で詠んでるのも面白かった。『草笛は耳にやわらかし』と『友』の取り合わせっていいと思う」

それまで黙っていた茜が口を開いた。

「うん。『友』にはいろんな友があるよね。いろんなことを話してきた、たくさん話してもらってきた、それが『友』との言葉ならばきっとどんな言葉でも結局は耳にやわらかいんじゃないかって、そういうのも草笛に託したかった」

茜の言葉を聞いているうちに、また胸がどきどきしてきた。茜はずっとみんなの顔を見回していて東子の方を一度も見ていないが、Dこの言葉も東子に向けられているのではないか。

その東子の動悸（どうき）は、続けて瑞穂が言ったことでさらにたかまった。

「そうだよね、私たち覚えていられないほどたくさんしゃべってきてるんだものね」

――この人たち。

その時茜の目が東子をまっすぐに見た。

東子は何も言えずに、ただうなずいた。

そう。たくさん話してきた。これからも。時には『言葉にまとめられぬもの』があっても。

（森谷明子「春や春」より）

（注１）披講＝詩歌を読み上げること。
（注２）スタメン＝スターティングメンバーの略。
（注３）トーコ先輩＝東子のこと。
（注４）破調＝定型詩で音数に多少が生じること。

(1)　「草笛」はどの季節の季語か。**漢字一字**で書きなさい。

(2)　文章中にA魔法のようだとあるが、このとき東子の目に映った様子を、「句」、「一変」という言葉を使って、**十五字以上、二十字以内**で書きなさい。

(3)　文章中の［B］に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　夢の中でしか聞くことができないし
イ　勉強の邪魔になるほどにうるさいし
ウ　友に語りかけるようにやわらかいし
エ　本当に聞こえているものじゃないし

(4) 文章中にC小さく笑ってみるとあるが、このときの東子の心の内について述べた次の文の［Ⅰ］、［Ⅱ］に入る言葉を書きなさい。ただし、［Ⅰ］は**一語**で書き、［Ⅱ］は「意見」という言葉を使って、**十字以上、十三字以内**で書くこと。

自分の［Ⅰ］が和らぐのを感じるとともに、［Ⅱ］をほほえましく感じている。

Ⅰ［　］

Ⅱ［　　　　　　　　　　　　　］

(5) 文章中にDこの言葉も東子に向けられているのではないかとあるが、東子がこのように感じた理由を述べたものとして最も適当なものを、次のア〜エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　自分の句が、会長である茜の心に『言葉にまとめられぬ』ほど『やはらか』く響いているように感じたから。
イ　自分の句は、『友』を『言葉にまとめられぬ』ほど大切にする茜にとって物足りない点があると感じたから。
ウ　茜の句は、以前二人で一緒に聞いた『草笛』の心地良い響きや『やはらか』さを基にしていると感じたから。
エ　『言葉にまとめられぬ』思いを、茜が『草笛』に託した思いと重ねて説明してくれているように感じたから。

［　］

(6) 文章中に描かれている東子の心情の変化を説明したものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 他の会員に引け目を感じていたが、満足する句が詠めたことで、副会長としての自信と選手としての充実感を取り戻している。

イ 不安定だった仲間同士の関係が、作句と批評を通じて互いの本音を伝え合う中で安定しはじめたので、肩の荷をおろしている。

ウ 初めは遠慮があったが、自分の句が皆の心に響いているのを実感し、仲間が温かく受け止めてくれることを心強く感じている。

エ マネージャーの仕事に徹してきたが、言葉の取り合わせが評価されたため、作句においてこそ存在感を示せると確信している。

【千葉県】

Step 2・3

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ニンジンも食べなきゃダメよ、秀子（ひでこ）。」
ママが妹に言うのを聞くと、達夫（たつお）は大急ぎでニンジンの㋐煮物を口にほおばった。
「ほら、お兄ちゃんを見てごらんなさい。」
□ママは言い足した。食事のときは、きまってそうなのだ。
小学一年生の達夫は、死ぬ思いで口のなかの嫌な味を飲み込んだ。お皿には、まだ二つ残っている。ついでに、つぎつぎとほおばって、必死で喉へ押し込む。すぐに水を飲めば、なんとか我慢できる。
「ほらほら、お兄ちゃんなんか、みんな食べちゃったわよ。さあ、秀子も食べなさい。」
四歳の妹は、ニンジンの半欠けを口にねじ入れられて、泣きべそをかきながら食べはじめた。
「秀子、……えらいなあ。」
達夫が大人っぽく励ますと、妹は涙をあふれさせながらも、微笑（ほほえ）んでみせた。
いつでも、こうである。
たとえば、ママと三人でお買い物に行ったとき、秀子がダダをこねはじめる。
「ねえ、ママ、ジュース。」
秀子でなくても冷たいジュースかコーラを飲みたいと思うような㋑あつい日でも、
「おうちに帰ってからにしましょうね。」
と、ママが言おうものなら、なぜか達夫はじっと我慢してしまう。
「秀子。……水、飲もうな。」

妹の手を引いて、水飲み場へ連れていく。そんなようすを、ママは横目で見て、感心感心とばかりに微笑んでいる。

達夫が我慢づよくなったのは、秀子が幼稚園に入ったあたりからだ。

そのころ達夫は同じ幼稚園の年長組だったから、毎日、1通園バスで出かけて帰宅するまで、妹の世話をすることになった。秀子のほうも兄にべったりへばりついて、頼りにしていたのは言うまでもない。

「お兄ちゃん、たのむわね。……秀子のお手本になってちょうだいよ。」

ママが口ぐせのように言った。

初めは、お手本という言葉の意味など分からなかった。しかし、なんとなく妹の面倒を見ているうちに理解するようになった。

いつも秀子が見ていて真似(まね)するから、ぼくは立派にしなくちゃいけないんだな。

すると、急に自分が大人になったような気がした。とてもいい気持ちだった。それからというもの妹の前では、つねにお手本となるように努めてきた。

だけど、お手本って、とってもたいへんなことだな。なんでもかんでも我慢しなくちゃなんないんだから。このごろ達夫は、そう思っている。

六月の末になって、ぐずついた天気がつづいたためか、達夫と秀子は風邪をひいた。

「二人とも寝冷えしたのかしら?」

ママが薬を買ってきて飲ませたが、なかなか治らないばかりか、高いねつが出はじめた。食欲もなく、お腹(なか)も下している。

「たいへんだわ、お医者さんに行かなきゃ。」

あわてて二人を病院へ連れていくと、

「ダメですねえ、こんなになるまで放っておいては。……脱水㋒症状を起こしてますよ。」

お医者さんが言った。

「すぐに点滴(注①)をしましょう。」

看護婦(注②)さんが二人を処置室へ連れていき、別々のベッドに寝かせた。すでに秀子は、べそをかきはじめていた。

消毒薬の匂い、注射器の列、真っ白いベッドとカーテン、看護婦さんの真剣な表情。そのうえ、おろおろしているママの姿。2べそをかくのは当然だ。達夫だって膝がふるえ、胸も波うって、㋓あやうく泣きだすところを、じっと我慢しているのだ。

やがて点滴のビニール管が、ベッドのそばに吊(つ)り下げられた。看護婦さんが近づいてきて、まず達夫の左腕をとった。ゆっくりと、するどい針を刺した。

「……ママ。」

達夫は思わず泣き声を上げかけたが、

「痛くないよう。ちっとも痛くないよう。」

すんでのところで、そう言った。

ママは達夫に顔を寄せて、ささやいた。

「えらいわね。……でも、お病気のときは我慢しないで、泣いてもいいのよ。」

しかし、達夫は隣のベッドに目を向けて、怖そうに見つめている妹へ笑ってみせた。

「3ちっとも痛くないよ、秀子。……ちょっとチクッとするだけさ。」

秀子は目に涙をためて、しゃくり上げながらも、素直にうなずいた。

看護婦さんが注射針を持って、隣のベッドへまわっていった。どうしたわけか、針を刺しても、秀子は泣かなかった。

「なっ、お兄ちゃんの言うとおりだろ？」

達夫が優しく言うと、きつく目を閉じた妹が、またうなずいた。

（内海(うつみ)隆一郎「お手本」より）

（注）① 薬や栄養などを少しずつ静脈内に注入すること。
② 女性看護師の古い呼び名。

Step 2

問一　二重傍線（‖）部あ、うの漢字に読みがなをつけ、い、えのひらがなを漢字に直しなさい。

あ［　］　い［　］い　う［　］　え［　］うく

Step 2

問二　次のア～エの中から、傍線部1と同じ構成の熟語を一つ選び、記号で答えなさい。

ア　粗雑　イ　県営　ウ　盛衰　エ　遭難

［　］

Step 2

問三　次のア～エの中から、本文中の［　］の中に補う言葉として最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　口をあわせて　イ　口をそろえて　ウ　思ったとおり　エ　思いがけず

［　］

Step 3

問四　傍線部2のように秀子の様子を表現しているのは、いくつかの状況をふまえてのものである。その状況として適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　達夫でさえ泣きだしそうになるのを我慢している。
イ　看護婦が達夫の左腕をとり、するどい針を刺している。
ウ　秀子と達夫が病院の処置室で、別々のベッドに寝ている。
エ　看護婦が真剣な表情をしており、ママもおろおろしている。

［　］

Step 3

問五　本文中の二つの波線（〰〰）部の秀子の動作には、達夫に対する秀子の気持ちが表れている。秀子が達夫に対して、日ごろから、どのような気持ちで接しているのかが最もよく示されている七字の表現を、本文中から抜き出しなさい。

Step 3

問六　傍線部3のように達夫が話した言葉には、秀子へのどのような思いが込められていると考えられるか。ここでの達夫の秀子への思いを、それまで達夫が考えていたお手本の意味を含めて、六十字程度で書きなさい。

【静岡県】

〈Note〉

第十三講　物語・小説の読解④

Step 1

一　次の文章は、「康平」が、友人である「日吉京介」がマスター（店主）をしている店「ルーシェ」で食事をし、家に帰ろうとしている場面から始まっている。日吉は、かつて、富山県の海岸を歩きながら、これから生まれてくる子どものために、親として頑張ろうと決意した。康平と日吉は、近いうちに、その日吉の思い出の地へ行くことにしている。これを読んで、1～4の問いに答えなさい。

「いや、もうそろそろ帰るよ。」
と言いながら、康平は、日吉京介の人相が以前とはまったく異なっていることに気づいた。
何がどう変わったのか具体的に言葉にはできなかったが、顔の芯を成すものが、晴れた日の（注1）凪いだ海のような穏やかさに包まれているように感じた。
この日吉の人相と同じ種類の何物かを持つ人間と接したことがあったが、それが誰だったのか康平には思い出せなかった。
「お前の顔、何かが変わったな。富山県の岩瀬から魚津までの二十キロを歩いてから少しずつ変わったのかな。」
と康平は言った。
日吉は調理場からしばらく康平を見つめてから、
「変わったと思うか？」
と聞いた。
「うん、一緒にいる人間を安心させてくれる顔だよ。」
「へえ、そんなこと言われたのは初めてだよ。」

日吉は皿を洗いかけていた手を止めて、康平の前に戻って来ると、そう言った。その瞬間、康平は、日吉のそれと同種類の、晴れた日の凪いだ海のようなものを持つ人間が誰であったのかを思い出した。脇田千春（わきたちはる）だった。

人相の中に共通する何かがあるというのではなく、脇田千春の場合は、その存在そのものが周りを穏やかにさせたのだ。

そうか、脇田千春が辞めたあと、営業一部に長く漂っている喪失感の根はそれだったかと康平は思った。

「息子が生まれたとき、どんなことがあっても、この子の前ではいつも笑顔でいようって女房（にょうぼう）と約束したんだ。でも、楽しくもなくおかしくもないのに笑顔を作るってのは、ほんとに難しいよ。俺、鏡の前に立って、何度も笑顔の練習をしたよ。最初のうちは、そんなことをしてる自分がばかみたいに思えたけど、一年二年とたつうちに、自然に笑顔が浮かべられるようになったんだ。そしたら、息子の前だけじゃなく、店でお客さんと接してるときでも笑顔になっちゃうんだ。意味もなく笑顔を浮かべるってのは、客に対して失礼かもしれないって気になってきて、店ではやめようと思うんだけど、顔がもうそういうふうになっちゃったんだなあ。」

と日吉は言った。

照れ隠しで冗談ぽく言っているが、ここに至る四年間には、①他の人間には分からない自己訓練があったのだなと康平は思った。

［A］ビストロ・バー（注2）「ルーシェ」の料理はおいしい。ビル（注3）のオーナー夫人のおかげだ。［B］、「ルーシェ」を繁盛（はんじょう）させている理由の半分は、マスターが醸（かも）し出す穏やかさと安心感なのだ。

小野建設機械リースのa営業部にこの半年あまり沈殿しているかすかな寂寥（せきりょう）感が、脇田千春という無口で地味な女子社員の退社によるものだと気づいている者はいないだろう。

脇田千春には、とりたてて目に見える特徴があったわけではない。仕事ぶりも、他の事務系女子社員の中で秀（ひい）でていたわけでもない。にもかかわらず、あの子の存在そのものは、殺気だった営業の最前線で働いている者たちの心をなごませ鎮（しず）めさせていたのだ。

康平は、そんな思いに浸ったあと、脇田千春のことを日吉に話して聞かせた。

「おととい、若い連中と飲みに行ったとき、どうも営業部全体が寂しくなったって誰かが言ったんだ。うちの社はいよいよ②悪［C］苦闘の嵐の中に入って、みんな必死だし、営業本部長の病気は重いし、営業部が殺伐とするのは無理もないが、この寂寥感、喪失感の根本の原因は何だろうって。みんな、気合いを入れ直せって、そいつが酔った勢いでわめいたから、俺は俺が責められてる気がして、みんなに

謝ったんだ。そしたら全員が、次長のせいじゃないって。営業部、とりわけこの営業一部から何かがなくなったんだけど、その何かが何なのか分からないって。そうかあ。脇田千春だ。あの子は営業一部の片隅で、存在そのものだけで、みんなを安心させてたんだ。癒やしてたんだ。だけど、誰もそのことに気づいてなかったんだ。」

康平の言葉に、

「うん、俺は、③<u>そんな人間の力を信じられるよ。</u>」

と日吉は言った。

「俺が得意先からへとへとになって社に戻ったとき、あの子が熱い茶をいれて持って来てくれて、『部長[注4]、お茶です。』って言ったんだ。俺は何て言い返したと思う？『お茶だってことは見たら分かるよ。』って……。俺は、あのときのことを謝るために富山[注5]県下新川（しもにいかわ）郡入善（にゅうぜん）町に行かなきゃな。」

康平が言うと、日吉京介は、パソコンで入善町のサイトにアクセスし、駅の近くにあるホテルの宿泊料金などを調べた。

旅の初日は、岩瀬から魚津へと歩き、魚津から電車で入善駅へ行き、駅前のホテルに泊まることだけを決めて、康平は「ルーシェ」を出て家路についた。

（宮本　輝「田園発　港行き自転車」より）

（注１）凪いだ＝風や波が静まっていること。

（注２）ビストロ・バー＝軽い食事などを提供する小さな料理店。

（注３）ビルのオーナー夫人＝「ルーシェ」があるビルのオーナー夫人。「ルーシェ」で出す料理について、日吉に助言した。

（注４）部長＝このとき、康平は、営業一部の部長であった。

（注５）富山県下新川郡入善町＝脇田千春の故郷。脇田は、現在、富山県で働いている。

1　本文中の［A］、［B］にそれぞれ当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア〜エの中から一つ選び、その記号を書け。

ア　A　きっと　　B　すなわち
イ　A　確かに　　B　しかし
ウ　A　やはり　　B　なぜなら
エ　A　例えば　　B　だから

2　――線②「悪［C］苦闘」が、「困難な状況の中で苦しみながら努力すること」という意味の四字熟語になるように、［C］に当てはまる最も適当な**漢字一字**を書け。

3　――線①「他の人間には分からない自己訓練」とあるが、日吉京介は、自分がどのような自己訓練をし、その結果、自分自身がどのように変化したと述べているか。文中の言葉を使って、**四十字**以上**四十五**字以内で書け。

4　――線③「そんな人間の力を信じられるよ。」について、次の(1)、(2)の問いに答えよ。

(1)　本文では、日吉京介の言う「そんな人間の力」を持った脇田千春がいなくなったあとの、その場の雰囲気が、----線a「営業部にこの半年あまり沈殿しているかすかな寂寥感」という言葉で表現されている。文中には、これと同じように、「そんな人間の力」を持った脇田千春がいなくなったあとの、その場の雰囲気が表現されている言葉がある。その言葉として最も適当な言葉を、----線aより前の文中から**十五字**でそのまま抜き出して書け。

(2)　本文では、「そんな人間の力」を持った人物として、日吉京介と脇田千春のことが、康平の視点を通して描かれている。次の表は、二人それぞれの、「康平に、晴れた日の凪いだ海を思い浮かべさせるもの」と「周りに及ぼす影響」についてまとめたものである。表の[a]、[b]、[c]、[d]に当てはまる最も適当な言葉を、[a]は**八字**で、[b]は**十三字**で、[c]は**六字**で、[d]は**十一字**で、それぞれ文中からそのまま抜き出して書け。

康平に、晴れた日の凪いだ海を思い浮かべさせるもの	周りに及ぼす影響
日吉京介の[a]	日吉京介の[a]が穏やかさに包まれており、そのことが、[b]いる。
脇田千春の[c]	半年前までは、脇田千春の[c]が、営業部の人たちの[d]いた。

【愛媛県】

a

b

c

d

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。

父の期待に応えて都会の大学に入学した兄の翼が、孤独な生活に耐え切れず自宅に戻り、しばらくたったある日、兄と母とわたしが話をしている途中、昔のプレゼントのことを思い出した場面である。

「①『お休み券』をくれたのって、いつだったっけ？」

一瞬きょとんとしたけど、すぐに、ああ、とA思いだした。

いつも家事にオわれているお母さんに、たまには休んでほしいと思ってプレゼントしたのだ。バスの回数券みたいに十枚綴りにして、券を一枚出せば十分間だったか、わたしとお兄ちゃんがお母さんのかわりをする、というB取り決めだった。

お母さんはそのプレゼントを大喜びしてC受け取った。でも、結局一枚も使わなかったな、と思いだした。『お休み券』をつくろうとD言いだしたのはお兄ちゃんだったということも、いま思いだした。やっぱり根っこは優しいひとなのだ。お母さん似かもしれない。

「あの券、お母さんが誰かにプレゼントしてもいいのよね？」

わたしと顔を見合わせてうなずくお兄ちゃんに、お母さんは「はい」と右手を差し出した。指がなにかを挟む形になっていた。

「実物はどっかにいっちゃったけど、はい、これ、あんた使っていいわよ。たまには休んでいいのよ」

お兄ちゃんは黙って②お母さんから目をそらした。すねたわけじゃない。逃げているのとも違う。それがわかるから、わたしはなにも言わない。

お母さんはマボロシの『お休み券』をテーブルに置いて、「お父さんにも一枚あげようかな」と笑った。「③いま、ほんとに大変だし、これからもずうっと大変なんだから……」と言ったそばから、玄関のチャイムが鳴った。お父さんが帰ってきた。

わたしはお兄ちゃんに「ほら、『お休み券』持っていかなきゃ、なくなっちゃうよ」と言って、テーブルを指差した。結構うまいことを言ったつもりだったけど、④お兄ちゃんはこわばった顔で、わたしが指差したのとは違うテーブルの一点をじっと見つめていた。

お父さんが「ただいま」とダイニングに入ってきた。見るからに疲れている。お兄ちゃんは立ち上がった。

「あのさ……俺、大学やめて、帰ってきて、こっちの大学受け直す」

お父さんが黙って振り向くと、間が空くのを怖がるように、お兄ちゃんは□つづけた。

「なんでかっていうと、まあ、俺のほうの気持ちってのもあるんだけど、おばあちゃんの具合が悪いわけでしょ、これから大変でしょ、お父さんもお母さんも、一人でも戦力っていうか、使える手があったほうがいいわけじゃない、俺、それやるよ、畑の手伝いとか、病院に連れていったりとかすればいいんだと思わない？」

お父さんは黙ったままだった。お母さんは、やめなさい、翼、もういいから、と二人の間に入って止めた。

でも、お兄ちゃんはかまわずつづけた。

「こっちの大学だったら、それほど必死に勉強しなくてもなんとかなるし、ちょっとでもウチのことやりたいっていうか、役に立ちたいっていうか、親コウコウしたいわけだよ」

違うよ、と言いたかった。お兄ちゃん、それ違う。絶対に違う。

「いいでしょ？　お父さん、俺、こっちに帰るから、こっちで勉強もするし、みんなのためにがんばって――」

お母さんがお兄ちゃんにビンタを張った。お兄ちゃんは左の頬に手をあてたまま凍りついてしまった。

「生意気なこと言わないで！」

⑤お母さんは涙声を張り上げた。「ひとのことを言い訳につかうのはやめなさい！」――声にもっと涙が交じって、あとはもう、その場にしゃがみ込んで顔を覆ってしまった。

お兄ちゃんはまだ左の頬に手をあてたまま、なにも言えない。

帰郷したお兄ちゃんを一度も叱らず、お父さんからかばいつづけていたお母さんが、初めて、感情を爆発させた。

そして、いままで怒りどおしだったお父さんは、初めて、おだやかな笑顔でお兄ちゃんを見つめた。

「自分のことだけ、考えろ」

静かに言って、お母さんの丸まった背中にそっと手を置いた。「先に風呂(ふろ)に入ってくる」と声をかけると、お母さんは嗚咽(おえつ)交じりに「お湯、抜いといて」と言った。そのやり取りを聞いた瞬間、なんだか、うまく言えないけど、どうも、その、子どもは親には一生かなわないんだなあ、とわたしは思ったのだ。

（重松　清「季節風　春」より）

Step 2

問1　本文中の〰〰線部の漢字については読みがなを、片仮名については漢字をそれぞれ書きなさい。

オわれて　［　　］われて
コウコウ　［　　］
覆って　［　　］って
帰郷　［　　］

Step 2

問2　①『お休み券』を……いつだったっけ?と言ったのはだれか、書きなさい。

［　　］

Step 2

問3　══線部A〜Dについて、時間の経過順に並べるとどうなるか、符号を書きなさい。

［　］→［　］→［　］→［　］

Step 2
問4　②お母さんから目をそらしたとありますが、このときの兄の気持ちとして最も適切なものを、次のア〜エから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　いらだたしい気持ち　イ　よろこばしい気持ち　ウ　うしろめたい気持ち　エ　うっとうしい気持ち

Step 2
問5　③いま、ほんとに大変だしとありますが、父の大変な様子が描写されている一文を、本文中から抜き出して書きなさい。

Step 3
問6　④お兄ちゃんは……見つめていたとありますが、兄は、なぜこのような様子だったのか、書きなさい。

Step 3
問7　本文中の□に入る語として最も適切なものを、次のア〜エから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　悲しげに　イ　しみじみと　ウ　堂々と　エ　一息に

Step 3

問8 ⑤お母さんは涙声を張り上げたとありますが、母がこのように感情を高ぶらせたのはなぜか、その理由を五十字以内で書きなさい。

Step 3

問9 この本文のあと、「わたし」が、兄に対して言葉をかけるとしたら、どのような言葉をかけると考えられるか。その言葉とそう考えた理由を、本文の内容をふまえて書きなさい。

言葉

理由

【石川県】

〈Note〉

第十四講　物語・小説の読解⑤

Step 1

一　次の文章を読んで、1〜6の問いに答えなさい。

天保五（一八三四）年五月五日。朝から空は青く晴れ上がり、五ツ（午前八時）を過ぎると二三（ふみ）が遊ぶ庭にも陽光が①トドいていた。

「くろ、そっちに行ったら駄目だって」

庭を駆け回る犬を、二三が呼び止めた。走っていた犬が立ち止まり、二三に振り返った。

くろは二三の誕生に先駆けて、父親の亮助（りょうすけ）が浜の漁師からもらった犬だ。

「犬は安産のお守りだからよう」

二三誕生の数日前にもらってきた子犬は、二三の誕生までは名なしだった。が、鼻が真っ黒で黒目の大きい子犬を見た亮太（りょうた）とみさきは、勝手にくろと呼んでいた。

丈夫な二三が誕生したあと、子犬はくろと命名された。

二三と同い年の四歳だが、くろはもはや成犬である。それでも犬なりに、二三とは②カクベツの間柄であることをわきまえているらしい。まだこどもの二三には、ことのほか従順だった。

「柏（かしわ）の葉っぱを踏んだら、おかあちゃんに叱られるでしょ」

大きな犬が、子犬のようにクウンと鼻声で鳴いた。

「ほんとうに分かったのかなあ」

二三は首をかしげながら、くろのあたまを撫（な）でた。

今日は端午の節句である。亮太はもう十二歳で、しっかりと菜種作りの家業を手伝っていた。

「亮太はほんまによう働くのう。亮助さんが、うらやましいがね」

村の農家の女房は、亮太の働きぶりをうらやましがった。周りからは一人前だとみなされている亮太だが、端午の節句の柏餅(もち)を、だれよりも楽しみにしていた。

柏は、新しい葉が出ると、古い葉を落とす。そのさまは、あたかも跡継ぎができたのを見定めて、③家督を譲るかのようである。

端午の節句に柏餅を食べるのは、この柏の葉のありさまに、代々の一家繁栄祈願を重ね合わせて祝うのが、興(おこ)りのひとつとされた。

とはいえ、亮太が柏餅をだれよりも喜ぶのは、甘い物好きだからである。が、たとえそうであっても跡取りがすこやかに育っているのは、亮助とよしにはこのうえない喜びだった。

それゆえよしは、毎年一家五人では食べきれないほどの柏餅を拵(こしら)えた。庭に干してあるのは、これから餅をくるむ柏の葉である。

この朝早く、よしは庭にむしろを敷き、百枚の葉を並べた。家族と一緒に、くろも甘い餅にありつくことができた。干された葉が、柏餅に使われることも知っているのだろう。

二三に何度叱(しか)られても、くろは葉が気になって仕方がないようだ。

母親のよしは、台所であずきの餡(あん)を拵えている。七歳のみさきが、台所の隅で糝粉(しんこ)を練っていた。粳米(うるちまい)を水に浸(つ)けて柔らかくしたあと、風で乾かしてから粉にしたものが糝粉である。これをよく練ったものを、柏餅の④生地に使うのだ。

亮太の好物を拵えるのは、よしとみさきの仕事だった。あずきの餡が、出来上がりつつある。甘い香りが、庭にまで漂っていた。

二三とくろが、一緒に鼻をひくひくさせた。

「お昼過ぎには、柏餅ができるんだって。お前も楽しみでしょう?」

ワン、ワンと続けて吠(ほ)えて、くろが尻尾(しっぽ)を振った。二三は、わざと顔をしかめた。

「おかあちゃんが蒸(ふ)かしてくれるのは、おにいちゃんとおとうちゃんが、畑から帰ってきてからだよ。ちょっと畑を見に行ってみようか」

立ち上がった二三が、先に駆け出した。くろがあとを追い始めた。

小さな坂道を登った先には、一面の菜の花畑が広がっている。五月五日のいまは、花はすっかり落ちていた。花を落としたあとには、

菜種が実を結んでいる。

（山本一力「菜種晴れ」より）

1　①トドいて　②カクベツを漢字に直して書きなさい。また、③家督　④生地の読み仮名を書きなさい。

（漢字）①　　いて　②

（読み）③　④

2　「柏餅」にまつわる話のように、日本人が幸せを願い、動植物の特性にあやかって暮らしの中に取り入れてきたならわしが、本文中にもう一つ書かれている。解答欄にしたがって当てはまる語句を、本文中から抜き書きしなさい。

　を　　とすること

3　走っていた～振り返ったと時間的に連続している文を本文中から見つけ、**始めの五字**を抜き書きしなさい。

4　よしは～拵(こしら)えたとある「よし」の心情を次のようにまとめるとき、〔A〕〔B〕に当てはまる内容を、それぞれ**十五字以内**で書きなさい。

好物を〔　A　〕という愛情と、長男を〔　B　〕という願い

A

B

5　次に示すのは、ある生徒が、二三(ふみ)の家族のこの日の様子を、ノートに整理したものである。内容が正しくなるように、〔a〕〔b〕にはそれぞれ適する語句を書き、〔c〕には推測される内容を**十字以内**で書きなさい。

〈端午の節句〉

朝から昼にかけて	午後
二三本人・犬のくろ…庭で遊んだ後、畑へ 父親の亮助・兄の亮太…〔　a　〕に励む 〔　b　〕…台所で柏餅を作る	家族そろって、 〔　c　〕

a

b

c

6　菜種が実を結んでいるという描写が連想させる家族の姿を、解答欄にしたがって**十五字以内**で書きなさい。

家族の姿

【秋田県】

Step 2・3

二

次の文章を読んで、1から6までの問いに答えなさい。

> ある日、私（「先生」と呼ばれている）は、釣りをしていた「長」や「かんぷり」というあだ名の少年たちに出会い、鮒を売ってもらう。それから三日して、少年たちが、私の家を訪ねてきた。

「鮒とってきただよ。」と長が言った、「買ってくれせえな、先生。」

私はかれらの期待に満ちた注目をあびて、自分に拒絶する勇気のないことを悟り、かれらを勝手口へ廻らせた。そこでも(1)かれらは一列に並び、ひとりひとりが私に向かって自分の鮒に値を付けさせた。そのときになって初めて、寝起きのぼんやりした私の頭が、かれらの（注1）奸悪な計略を理解した。つまり、まとめて売れば安くなるが、一尾ずつなら安い値踏みはできない、という狙いなのだ。

「ほれ、みせえま。」とかれらはそれぞれの鮒を私に誇示した、「こんなにえっけえだ、五寸くれえあるだえ、先生。」

そして「（注2）しょっから」へゆけばこれ一尾で一（注3）かんは取られる、と言って互いに頷き、肯定しあうのであった。私はそこでもまた自分が罠に落ち、縛りあげられたことを知った。私はかれらの誘導にしたがって、値段を付け、それらを買い取った。

「(2)いいさ。」と私はかれらの去ったあとで自分に言い聞かせた、「味噌煮にしておけば保つからな、当分おかずに困らないで済むわけだ。」

私はまえの味噌煮を丼へ移して、それらの鮒を新しく味噌煮にしかけた。

人は信用しないかもしれない。私自身もこれを書きながら、たぶん人は事実だとは信じないのだろうと思うのであるが、少年たちはその儲け仕事があまりにたやすく、かつ確実であることに昂奮と情熱を感じたらしい。(3)二三日するとまたやって来て、さもうれしそうにはしゃぎながら、窓の戸を叩いた。

「並べってばな。」と長の言うのが聞こえた、「おんだらが先だぞ、押すな。」

拒絶されようなどとは寸毫（注4）（すんごう）も疑わず、確信そのもののような少年たちの顔を見て、それだけで私は自分の敗北を認めた。――ここまで読まれた方は、もはや小悪魔どもが私を放さないだろう、と想像されるにちがいない。私にしても、仮にふところがもっとあたたかであったら、容易にかれらの手から逃れがたかったろうと思う。人は黄白（注5）（こうはく）の前には、しばしば恥を忍んで屈しなければならないものだ。少年たちが四度めに襲撃をかけて来たとき、ふところの窮乏という現実に助けられて、私はきっぱりと鮒の買い取りを拒絶した。するとそこに、(4)まったく予想しない事が起こって、私をおどろかせた。

私に拒絶されて、少年たちは明らかに失望し、途方にくれた。かれらは顔を見交わし、先生が駆引（かけひき）しているのではないかと疑い、そうでないことを認めるともっと失望し、どうしたものかというふうに、それぞれの手にした器物の中の鮒を見まもった。

「みんな。」と長が急に言った、「それじゃあこれ先生にくんか。」

くんかとは、贈呈しようか、というほどの意味である。途方にくれ、落胆していた少年たちの顔に突然、生気がよみがえった。それは囚（とら）われの縄を解かれたような、妄執がおちたような、その他もろもろの羈絆（注6）（きはん）を脱したような、すがすがしく濁りのない顔に返った。

「うん、くんべ。」と少年の一人が言った、「なせ、これ先生にくんべや。」「くんべ、くんべ。」「先生、これ先生にくんよ。」とかんぷりが言った、「みんな、勝手へいってあけんべや。」

私は自分の大きな過誤を恥じた。

少年たちに狡猾（注7）（こうかつ）と貪欲（どんよく）な気持ちを起こさせたのは私の責任である。初めに私は「その鮒をくれ。」と言えばよかったのだ。売ってくれと言ったために、かれらは狡猾と貪欲にとりつかれた。私のさみしいふところを搾取（さくしゅ）しながら、かれらも幸福ではなかった。その期間、かれらは貪婪（注8）（どんらん）な漁夫でありわる賢い商人だったからだ。私は深く自分を恥じた。

「先生にくんよ、か。」と私は口まねをしてみた、「これ先生にくんよ。」

そう言ったときの、すがすがしく、よみがえったような顔つきや動作を思いうかべながら、(5)私は深く自分を恥じた。

（山本周五郎「青べか物語」より）

（注1）奸悪な計略＝悪だくみ。
（注2）しょっから＝つくだ煮屋の店の名前。
（注3）かん＝銭貨を数える単位。
（注4）寸毫＝ほんの少し。
（注5）黄白＝金銭。黄金と白銀による。
（注6）羈絆＝行動を束縛するもの。
（注7）狡猾＝悪がしこくて、ずるいこと。
（注8）貪婪な＝欲の深い。

Step 2

1　(1) かれらは一列に並び、……鮒に値を付けさせたとあるが、その理由を「私」はどのように考えているか。

ア　私がぼんやりとしているうちに、鮒を高値で買わせるため。
イ　鮒をまとめ買いされて、値が安くなることを避けるため。
ウ　礼儀正しくすることで、鮒を気分よく買ってもらうため。
エ　一尾ずつ交渉することで、鮒をすべて買い取らせるため。

□

Step 2

2 (2) いいさと言ったときの「私」の心情を説明したものとして最も適切なものはどれか。

ア　仕方がないとあきらめ、自分を納得させようとしている。

イ　落ち着きを取り戻し、思わぬ成果を手にして喜んでいる。

ウ　悔しくてたまらず、怒りのやり場を失ってしまっている。

エ　本音を出すことができずに、ふてくされてしまっている。

Step 2

3 (3) 二三日すると……窓の戸を叩いたにあるような態度の「少年たち」をたとえた表現を本文中から五字で抜き出しなさい。

Step 3

4 (4) まったく予想しない事とは、どのようなことか。二十字以内で書きなさい。

Step 3

5　(5)　私は深く自分を恥じたとあるが、なぜか。五十字以内で書きなさい。

Step 3

6　本文の特徴を説明したものとして、最も適切なものはどれか。

ア　本文中に方言を多用することで、地元の人々との触れ合いの中で成長する少年たちの姿を読者が想像しやすくなっている。

イ　慣用句や難解な熟語が繰り返し用いられることで、厳格で近寄りがたい主人公の人柄を読者が理解しやすくなっている。

ウ　本文中に読者の反応を想定した表現が入ることで、読者が物語を現実にあった出来事としてより感じやすくなっている。

エ　郷愁を誘う風景描写に、登場人物の心情を重ね合わせることで、読者が少年たちの心情の変化に気付きやすくなっている。

【栃木県】

第十五講　物語・小説の読解⑥

Step 1

一　次の文章を読んで、1～5の問いに答えなさい。

> 旧家の長男である斎藤元司(もとじ)は、江戸で学問を修めることを父に願い出て、ようやく許された。

「ありがとうございます」
と元司は言った。
「母には、私の口からは言えませんので、うまく言ってください」
「納得させるまで、ひと苦労だの」
「そのかわりに、勉強させて頂くことは決してむだにはしません。必ずひとかど*の者になって戻ります」
父親の書斎から自分の部屋に帰るとき、元司は足が躍るような気がした。部屋に入って*行燈(あんどん)に灯を入れると、元司は障子(しょうじ)を開いて外を見た。
火鉢の炭火であたたまっていた部屋の中に、冷たい空気が流れこんできたが、元司の頬(ほお)のほてりはおさまらなかった。部屋のあかりが照らし出す外の闇を横切って、雪が流れるように降りしきっている。元司は膝(ひざ)を抱いて夜の雪を眺めた。
――家を離れることを、父は許している。
それを確かめた喜びが、元司の胸をふくらませていた。最初の江戸遊学*のとき、父との間に暗黙の*諒解(りょうかい)がついた気がした時期があった

が、それは弟熊次郎の死でご*破算になった。だがここまできて、父はようやく再びおれを手ばなす気になったのだ、と思った。

雪が降りしきる暗黒のむこうに、ひろびろとひろがる野をみる気がした。そこに解きはなされる自分を感じた。

だが、その喜びの中に、微(かす)かに痛みを胸に伝えるものが含まれていることも事実だった。父と母を悲しませ、それでもこうして外に自分を駆りたてるものは何なのか、という思いだった。

――精いっぱい生きたいということか。

芽は単純に学問に対する好奇心のようなものだったと思う。だが、だんだんに家の中で書物を読むだけの境遇にあきたらず、家業を*いとい、心はしきりに外にむかうようになったのだ。家にいると落ちつかず、気分がいら立った。そして諸国の風物に触れたり、一歩ずつ学問を深めながら、師や友人とまじわっているとき、元司は心がのびやかに働き、身体もいきいきと動くようだったのだ。

――結局はそういうことだ。一人の人間として、自由に生きたいためにあがいてきた。

旧家の血は重く、それを継ぐ者は、一人の人間であるよりは家系の守護者としての役割を強いられるのだ。父が言ったように、家業を繁昌(はんじょう)させ、次の時代の者に血を伝え、そして朽ちる。あたえられる自由は少ない。

祖父も父も、当然の義務としてその役割を果し、自分をおさえ、わずかな自由に甘んじてきたのだ。そう思うと、熊次郎が死んで元司が帰郷したとき、待っていたように諸国見物に出て行った父の気持も、また家を継ぐことから逃げている元司に対する、父のいら立ちもよくわかるようであった。

父は俳諧に凝っているが、元司は日ごろ、さほどうまいとは思っていない。だがそのつたなさを笑ってはいけないのだ、と元司は思った。父は父で、すでに決められた枠の中で、精いっぱい自由でありたいと思ってしていることなのだ。そしてそれが、古い家系の守護者としての、あるべき姿勢なのだろう。

――おれは家系に対する反逆者か。

元司はそう思った。祖父や父は、古い血の重圧に堪(た)えて、つつましい生き方を選んだ。だがその重さに畏敬(いけい)を感じるよりも、反発を感じる者も出るのだ。それがおれだ、と元司は思った。

おそらくそれが古い血自身の宿命なのだ。そういう反逆者は前にもいたかも知れないし、かりに自分がおとなしく家業を継いだとして

も、その後にもそういう人間は出るかも知れない。古い血自身が、その古さのために自分にむかって反逆をくわだてるのだ。多分それがおれだ。

そう思ってみると、自分が外に出ると心も身体もいきいきとしてくるのは、古い血が新しい生き方をもとめているようにも思えてくるのだった。

（藤沢周平「回天の門」より）

【注】

＊ひとかど……ひときわすぐれていること

＊行燈……昔の照明具

＊遊学……故郷を離れ、よその土地に行って勉強すること

＊諒解……事情をわかって承知すること

＊ご破算……今までやってきたことを、最初の状態に戻すこと

＊いとい……いやがって

1　元司の頬のほてりはおさまらなかったの文節の数を書きなさい。

2　足が躍るような気がしたとあるが、このときの元司の心情を説明したものとして最も適切なものを、次のア〜エから一つ選んで記号を書きなさい。

ア　自分のことよりも子の幸福を願う父の姿を見て感動している。
イ　弟の分までしっかり親孝行をしようと心に固く誓っている。
ウ　自分の願いがかない、将来への期待で気持ちが高ぶっている。
エ　母に事情を説明する必要がなくなり、内心ほっとしている。

3　微かに〜含まれているとあるが、その理由を、解答欄にしたがって**二十五字以内**で書きなさい。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　）にもかかわらず父と母を悲しませることになるから

4　元司から見た祖父や父の生き方を次のようにまとめた。〔A〕〔B〕に当てはまる語句を、〔A〕には**八字**で、〔B〕には**六字**で、本文中からそれぞれ抜き書きしなさい。

〔A〕としての宿命を受け入れ、〔B〕でもよいとする生き方

A
B

5 新しい生き方とあるが、どのように生きることか。解答欄にしたがって二十五字以内で書きなさい。

古い血の重圧があるからこそ［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］生きること

【秋田県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一夜の①木枯らしにざくろの葉は散りつくした。

その葉は、ざくろの木の下の土を円く残して、そのまわりに落ちていた。

雨戸をあけたきみ子は、ざくろの木が裸になったのにも驚いたが、葉がきれいな円を描いて落ちているのも不思議だった。風に散り乱れそうなものだった。

梢にみごとな果実があった。

「おかあさん、ざくろの実。」と、きみ子は母を呼んだ。「ほんとうに……。忘れていた。」と、母はちょっと見ただけで、また台所へもどって行った。

忘れていたという言葉から、きみ子は自分達のさびしさを思い出した。1縁先になっているざくろの実も忘れて暮らしているのだった。

ざくろの実

半月ばかり前のこと――いとこの子供が遊びに来ると、早速ざくろに目をつけた。七歳の男の子が我武者に木を登るのに、きみ子は生き生きしたものを感じて、「まだ上に大きいのがあるわよう。」と、縁から言った。「うん、だって、取ったら、僕おりられないよう。」なるほど、両手にざくろを持っては、木からおりられない。きみ子は笑い出した。子供が非常に可愛かった。

子供が来るまで、この家ではざくろの実を忘れていた。それからまた今朝まで、ざくろの実を忘れていた。

子供の来た時は、まだ葉のあいだにかくれていたが、今朝はざくろの実が空にあらわれていた。このざくろの実も、落葉に円くかこまれた庭土も、凛と強くて、きみ子は庭に出ると、竹竿でざくろの実を取った。熟し切っていた。盛り上がる実の力で張り裂けるように割れていた。縁に置くと、粒々が日に光り、日の光は粒々を透き通った。

きみ子はざくろにすまなかったように思った。

二階に上って、さっさと縫物をしていると、十時頃、啓吉の声が聞こえた。木戸があいていたか、2いきなり庭の方へ廻(まわ)ったらしく、気負い立った早口だった。「きみ子、きみ子、啓ちゃんが来たよ。」と、母が大声に呼んだ。あわてて糸の抜けた針をきみ子は針山に刺した。「きみ子もね、啓ちゃんが出征する前に、一度会いたいって言い言いしてたんだけど、こちらからはちょっと行きにくいし、啓ちゃんもなかなか来てくれないしね。まあまあ今日は……。」と、母が言っている。昼飯でもと引きとめるが、啓吉は急ぐらしい。「困ったわねえ。……これうちのざくろ、おあがり。」そうしてまたきみ子を呼んだ。

きみ子がおりて行くと、啓吉は眼(め)で迎えるように、その眼は待ち切れぬように、きみ子を見ているので、きみ子は足がすくんだ。

啓吉の眼にふとあたたかいものが浮かびかかった時、「あっ。」と、啓吉はざくろを落とした。

二人は顔を見合わせて微笑した。

微笑し合ったことに気がつくと、きみ子は頬が熱くなった。啓吉も急に縁側から腰をあげて、「きみちゃんも、体に気をつけてね。」「啓吉さんこそ……。」と、きみ子が言った時は、もう啓吉はきみ子に横を向けて、母にあいさつをしていた。

啓吉が出て行ってからも、きみ子がちょっと庭の木戸の方を見送っていると、「啓ちゃんもあわてものだねえ。勿体(もったい)ない、こんなおいしいざくろを……。」と、母は言った。縁側に胸をあてて手を伸ばすと、ざくろを拾った。

さっき啓吉は、眼の色があたたかくなりかかった時、自分で気づかずに手を動かして、ざくろを二つに割ろうとしたはずみに、取り落としたのだったろう。割れ切らないで、実の方をうつ伏せに落ちていた。

母はそのざくろを台所で洗って来て、「きみ子。」と差し出した。「いやよ、きたない。」顔をしかめて、身をひいたが、ぱっと頬が熱くなると、きみ子はまごついて、②素直に受け取った。

上の方の粒々を少し啓吉が齧(かじ)ったらしかった。母がそこにいるので、きみ子は食べないと尚(なお)変だった。なにげない風に歯をあてた。ざくろの酸味が歯にしみた。それが腹の底にしみるような3悲しいよろこびを、きみ子は感じた。

そんなきみ子に母は、一向③無頓着で、もう立ち上がっていた。鏡台の前を通って、「おやおや、大変な頭。こんな頭で、啓ちゃんを見送って、悪かったわね。」と、そこに坐(すわ)った。

Ａ　きみ子はじっと櫛(くし)の音を聞いていた。「お父さんが、なくなった当座はねえ。」と、母はゆっくり言った。「髪を梳(す)くのが、こわくっ

て……。髪を梳いてると、つい、ぼんやりしちゃうのね。ふっと、やっぱりお父さんが、梳き終わるのを待ってらっしゃるような、そんな気がしてね、はっとしたりすることがあってね。」

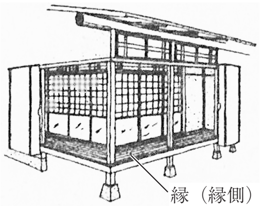
母がよく父の残しものを食べていたのを、きみ子は思い出した。きみ子はせつない気持ちがこみあげて来た。泣きそうな幸福であった。母はただ勿体ないと思っただけで、今もただそれだけのことで、ざくろをきみ子にくれたのだろう。母はそういう暮らしをして来たので、つい習わしが出たのだろう。きみ子は、秘密のよろこびに触れた自分が、母に恥ずかしかった。

しかし、啓吉に知られないで、心いっぱいの別れ方をしたように思い、また、いつまでも啓吉を待っていられそうに思うのだった。

そっと母の方を見ると、鏡台を隔てる障子にも、日がさしていた。膝に持ったざくろに歯をあてることなど、もうきみ子には恐ろしいようだった。

（川端康成「ざくろ」より）

（注）
ざくろ＝植物の名。果実は熟すと裂け、粒状の中身が露出する。
縁＝和風建築で部屋の外側に付けた板張りの床の部分。縁側ともいう。
我武者＝勢い任せに激しい行動をすること。
凜＝きりっと引き締まっているさま。
出征＝軍隊の一員として戦地に行くこと。



Step 2

1 ①～③の漢字の読みを書きなさい。

①　　らし

②

③

Step 2

2 1 縁先になっているざくろの実も忘れて暮らしているのだったとあるが、これはきみ子たちのどのような暮らしを表現していますか。次のア～エの中から最も適切なものを選び、その記号を書きなさい。

ア　満ち足りた暮らし　イ　華やかな暮らし　ウ　活気のない暮らし　エ　気ままな暮らし

Step 3

3 2 いきなり庭の方へ廻ったらしく、気負い立った早口だったとあるが、啓吉がこのようにしてきみ子の家を訪れたのはなぜですか。その理由について述べた次の文の空欄Ⅰにあてはまる適切な表現を、十五字以内で書きなさい。

出征する前に、（　Ⅰ　）と思っていたから。

Step 3

4 3 悲しいよろこびとあるが、この描写について、国語の時間に生徒が次のような話合いをしました。空欄Ⅱ・Ⅳにあてはまる適切な表現を、空欄Ⅱは十字以内、空欄Ⅳは二十字以内で書きなさい。また、空欄Ⅲにあてはまる最も適切な表現を、あとのア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

山田：私は「悲しいよろこび」という描写がよく分からなかったんだけど、これはきみ子のどんな気持ちを表しているのかな。
青木：よろこびでありつつも、同時に悲しいものでもあるというような複雑な気持ちなんだろうね。どんなことに対して、悲しいと感じたり、よろこびを感じたりしているんだろう。
西川：啓吉の残したざくろに歯をあてたことから感じている気持ちだから、啓吉に関係があることじゃないかな。
青木：きみ子は啓吉に好意を寄せているんだよね。だから……。
山田：ちょっと待って。きみ子が啓吉に好意を寄せているというのはどこから分かるの？
西川：それは、啓吉と微笑し合ったときや、母親から啓吉の残したざくろを差し出されたときに（Ⅱ）ことから分かるよ。
山田：なるほど。好意を寄せている啓吉に関わるよろこびや悲しみと考えたらいいんだね。そうすると「悲しいよろこび」というのは、（Ⅲ）に対するよろこびでありつつも、同時に（Ⅳ）に対する悲しい気持ちでもあるんだね。

ア　啓吉の残したざくろがおいしかったこと
イ　啓吉と言葉を交わすことができたこと
ウ　啓吉に自分の気持ちを伝えられたこと
エ　啓吉に触れることができた気がしたこと

Ⅱ

Ⅲ

Ⅳ

Step 3

5　次の文は、段落Ａ以降の展開について述べたものです。空欄Ⅴ・Ⅵにあてはまる語句の組み合わせとして最も適切なものを、あとのア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

母の発言を聞いたきみ子は、母がよく父の残しものを食べていたということを思い出し、そこから（Ⅴ）に（Ⅵ）を重ね、様々な思いを抱くに至っている。

ア　Ⅴ　自分と母　　Ⅵ　ざくろと櫛
イ　Ⅴ　母とざくろ　　Ⅵ　自分と櫛
ウ　Ⅴ　母と父　　Ⅵ　自分と啓吉
エ　Ⅴ　自分と父　　Ⅵ　啓吉と母

【広島県】

〈Note〉

第十六講　韻文の鑑賞①

Step 1

一　次の俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

A　葉桜の中の無数の空さわぐ　篠原梵
B　大空に伸び傾ける冬木かな　高浜虚子
C　夕暮は雲に埋まり春祭　廣瀬直人
D　さえざえと雪後の天の怒濤かな　加藤楸邨
E　天の川大風の底明らかに　佐野青陽人
F　空をゆく一とかたまりの花吹雪　高野素十

注1　澄み切ってはっきりしている様子。
注2　大きな波。

1　体言止めを用いながら、春の空の下で動きのある様子を描き、空間の広がりと美しさを詠んでいる俳句はどれか。A〜Fの中から一つ選びなさい。

2 冬の空を背景に、目の前で繰り返される激しい動きとともに高まった感動を、切れ字を用いて表現している俳句はどれか。A～Fの中から一つ選びなさい。

□

3 次の文章は、A～Fの中のある俳句の鑑賞文である。この鑑賞文を読んで、あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

作者はこの句で、風の吹く中で見上げた空がまたたきながら揺れ動いているように感じたことを、「［Ⅰ］」と表現している。実際には、空は動かないのだが、「［Ⅰ］」という表現がこの句を強く印象づけている。そして、空を見上げた時、目の前にある対象物のみずみずしさと、その奥にある空の［Ⅱ］とをとらえただけではなく、［Ⅲ］様子も感じられて、空の美しさが鮮明にとらえられた句となっている。

(1) ［Ⅰ］にあてはまる最も適当な言葉を、その俳句の中から**四字**でそのまま書き抜きなさい。

□□□□

(2) ［Ⅱ］、［Ⅲ］にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア Ⅱ 明るさ　Ⅲ 葉の間から見える空が重なり合う
イ Ⅱ 静けさ　Ⅲ 花びらが舞い散る空が広々としている
ウ Ⅱ 果てしなさ　Ⅲ 遠くまで見渡せる空が澄んでいる
エ Ⅱ さわやかさ　Ⅲ 絶えず雲が流れる空が波乱を暗示する
オ Ⅱ 心細さ　Ⅲ 夕焼け色に染まる空が次第に暮れる

□

【福島県】

Step 2・3

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私の詩友・川崎洋（ひろし）さんの作品を取り上げます。川崎さんの「夜」という作品の中に、こういう二行があります。

　　橙（だいだい）色の月めがけて
　　すぽんと海を脱ぐ魚

これは月夜に魚が海中から海面へ㋐躍り出た様子ですが、私は①〈すぽんと海を脱ぐ魚〉という表現がたまらなく好きです。〈海を脱ぐ〉と表現されているので、海中の魚がふだんは素肌で巨大な海を着込んでいることがわかり、魚が全身を撓（たわ）めて海を脱ぐときの、しなやかなひねりと力強さまで感じられます。

これが仮に〈海面に魚が躍り出た〉という表現だったら、どうでしょう？〈海を脱ぐ〉という表現から感じられるような、魚と海との親しい関係や魚の生動感が全く伝わってきません。［②］のです。

海の魚がふだんは海を着ているという羨（うらや）ましいようなことを〈すぽんと海を脱ぐ魚〉は一瞬、鮮やかに気付かせてくれるのではないでしょうか。

川崎さんの作品をもう一つ挙げます。「どうかして」という作品の中に、こういう㋑箇所があります。

　　鳥
　　お前が雲に消え入るように
　　僕がお前に
　　＿＿＿＿＿＿

すっと入ってしまうやり方は
ないかしら
そして
僕自身も気付かずに
身体（からだ）の重みを風に乗せるコツを
僕の筋肉と筋肉の間に置けないかしら

A

ご注目いただきたいのは終わりの二行です。〈身体の重みを風に乗せるコツ〉を、僕の筋肉と筋肉の間に置けないものだろうか。もしそれが出来（でき）れば、鳥のように空を飛ぶことが出来るわけだなあ、飛んでみたいなあ、というわけです。

私は以前、十年間ほど高校生の投稿詩を読んだことがありますが、その作品の中で〈鳥のように自由に空を飛びたい〉という言葉に㋒頻繁に出会いました。人間の気持ちの中に飛翔（ひしょう）願望があり、特に若い人の間にその欲求の強いことはわかりますが、〈鳥のように空を飛びたい〉だけでは、あまりにも有りふれていて切実感が伝わってきません。

そこで、詩の引用箇所をもう一度ご注目いただきましょう。ここに〈空を飛びたい〉という言葉はありませんが、実質は飛翔願望そのものであること。しかし、空を飛びたいと言う前に、③飛ぶことに必要な手続きをあれこれと考えているところに、なんとも言えないユーモアと謙虚さを感じます。

〈空を飛びたい〉という願望を仮に他人から聞かされた場合、私達は〈ああそうですか、どうぞお好きなように〉とでも言うほかはありませんが、この詩の場合のように〈身体の重みを風に乗せるコツを／僕の筋肉と筋肉の間に置けないかしら〉と持ちかけられた場合は、それが幻想とはわかっていても、私達は川崎さんと一緒になって、飛ぶことを考えてみたくなるような、そんな気分になってしまいます。ここが④この詩の魅力なのです。

詩を通じて私達は、ああしたい、こうしたいという思いや望みを訴えるだけに終始しがちで、自分本位になりやすいものですが、訴えを聞く人が一緒になって考えてくれるような、丁寧な話の持ちかけかたが大事なのだということを、このすばらしい作品から感じ取ってい

ただきたいものです。

（吉野　弘「酔生夢詩」より）

Step 2

1　本文中の次の漢字の読み方を書きなさい。

㋐ 躍り出た　［　　　］り出た

㋑ 箇所　［　　　］

㋒ 頻繁　［　　　］

Step 2

2　① 〈すぽんと海を脱ぐ魚〉という表現とあるが、この表現から感じられることについて本文中で筆者が述べている内容を、次のようにまとめた。［a］、［b］に入ることばをそれぞれ本文中から抜き出しなさい。

・海中の魚がふだんは素肌で巨大な海を着込んでいるという羨ましいようなことに気付き、［a］が感じられる。
・魚が全身を撓めて海を脱ぐときの、しなやかなひねりと力強さといった［b］まで感じられる。

a ［　　　］

b ［　　　］

Step 2

3 ② には、詩の表現についての筆者の考えが入る。次のうち、入れるのに最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を書きなさい。

ア この仮定が詩の表現を変化させるために必要な仮定だと思う
イ この硬さが詩の表現を知的なものにすることもあると思う
ウ この違いが詩の表現と普通の文章表現との違いだと思う
エ この比較が詩の表現の偶然性をあきらかにすると思う

Step 3

4 ③飛ぶことに必要な手続きをあれこれと考えているとあるが、「飛ぶことに必要な手続き」とはどのようなことか。A中のことばを使って**四十字程度**で書きなさい。

Step 3

5　④この詩の魅力とあるが、次のうち、この詩の魅力について本文で述べられていることがらと内容が合うものはどれか。一つ選び、記号を書きなさい。

ア　この詩は、強い飛翔願望をもっている若い人への共感を表そうとしているが、空を飛びたいという欲求を表現するのに有りふれたことばを使っていないので、想像力をかきたてる作品であること。

イ　この詩は、ユーモアを感じさせる表現が多く使われていて空を飛ぶことができるような気分になるが、実質は飛翔願望ではなく、その願望の奥にある自由へのあこがれを表している作品であること。

ウ　この詩は、鳥のように自由に空を飛びたいという飛翔願望を他人に聞かせるのではなく、空を飛んでいる鳥に話を持ちかけるように表現されているところに、謙虚さが感じられる作品であること。

エ　この詩は、人間の気持ちの中にある飛翔願望を自分本位に訴えるのではなく、丁寧な話の持ちかけかたをしているので、飛ぶことを一緒になって考えてみようという気を起こさせる作品であること。

Step 3

6　本文では、筆者は二つの詩の魅力を紹介している。次は、「鉄棒」という詩と、その詩の魅力を紹介する文章である。[Ⅰ]に入ることばを「鉄棒」という詩の中から抜き出しなさい。また、[Ⅱ]に入れるのに最も適していることばをア～エから一つ選び、記号を書きなさい。

僕は地平線に飛びつく
僅（わずか）に指さきが引つかかつた
僕は世界にぶら下（さが）つた
筋肉だけが僕の頼みだ
僕は赤くなる　僕は収縮する
足が上（あが）つてゆく
おお　僕は何処（どこ）へ行く
大きく世界が一回転して
僕が上になる
高くからの俯瞰（ふかん）
ああ　両肩に柔軟な雲

（村野四郎「体操詩集」より）

（注）　俯瞰＝高い所から全体を見ること。

【紹介する文章】

この詩に描かれているのは鉄棒の逆上がり運動の様子です。ここではまず、鉄棒を［Ⅰ］と表現しています。さらに、顔を真っ赤にして体を引き上げ、鉄棒の上に静止するまでの様子を〈大きく世界が一回転して〉ということばを使って表現しています。そして、この詩全体からは、空間的な広がりと［Ⅱ］とがよく伝わってきます。

ア　逆上がり運動の難しさ　　イ　「僕」の動きの力強さ
ウ　大空の雲のやわらかさ　　エ　「世界」全体の複雑さ

Ⅰ［　　　　］

Ⅱ［　　］

【大阪府】

〈Note〉

第十七講　韻文の鑑賞②

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの(1)~(3)の問いに答えなさい。(本文中のAとBは、出題の都合上付けたものです。)

物の色や形を言葉で言い表すのは難しい。美しい夕焼けの雲を描写したい。「真赤な夕日に染まった雲がとぎれとぎれにどこまでも続いている」と書くと二十八音(注1)。十七音の俳句には、もっと短く、もっと迫力のある表現が欲しい。そういうとき比喩が力を発揮します。

A　火を投げし如(ごと)くに雲や朴(ほお)の花　　野見山朱鳥(のみやまあすか)

――夕焼けに染まり、火を空に投げたかのような雲。高々と咲く朴の花。

もしもこのような景を画家が絵にしたら、イメージは絵の通りに固定します。誰が見ても絵は同じです。一方「火を投げし如くに雲や」という言葉から思い浮かべる景は、読者によって違います。読者は「火を投げし如くに雲や朴の花」という言葉が許す範囲で、自由に景を思い浮かべることが出来る。ひとくちに描写と言っても、絵と言葉では違う。言葉が少ない俳句の場合、描写は断片的な、ヒントのようなものでしかない。しかし、いいヒントを得たとき、人の想像力はフル稼働します。

野見山朱鳥は比喩の名手でした。もう一つ作例を拾います。

火の独楽(こま)を廻(まわ)して椿(つばき)瀬を流れ　　野見山朱鳥

「火を投げし如く」は直喩。「火の独楽」は暗喩(注2)です。回りながら瀬を流れる落椿(おちつばき)の色を「火」に喩(たと)え、回る様子を「独楽」に喩えました。動きのある美しい句ですが、さきほどの「火を投げし如くに雲や」のようなインパクトはない。「火を投げし」は、［　　］と形を統合した比喩です。「火の独楽」は、イメージが［　　］と動きに分かれています。そのため、パンチ力が弱い。

比喩は、より抽象度の高い事象を表すときにも用いられます。たとえば、

B　双頭の蛇の如くに生き悩み　　野見山朱鳥

は、岐路に迷う心を「双頭の蛇」に喩えました。理知的な句です。抽象的・不可視的なもの（人生の岐路）を、具象的・可視的なもの（双頭の蛇）に喩えて成功するには相当の力量が必要です。

（岸本尚毅(きしもとなおき)「十七音の可能性～俳句にかける」より）

（注1）「二十八音」の表記は原文のまま。
（注2）暗喩…隠喩のこと。

(1) 次のア～エのうち、Aの俳句と同じ比喩表現が使われている俳句はどれですか。一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　来(こ)しかたや馬酔木(あしび)咲く野の日のひかり　　水原秋櫻子(みずはらしゅうおうし)
イ　大いなる春日の翼垂れてあり　　鈴木花蓑(すずきはなみの)
ウ　鴨(かも)渡る明らかにまた明らかに　　高野素十(たかのすじゅう)
エ　退(すさ)るとき紙のような盆踊り　　大畑等(おおはたひとし)

［　　］

(2)　本文中の二つの［　］には、同じ言葉が入ります。あてはまる言葉を**漢字一字**で本文中から抜き出して書きなさい。

［　　］

(3)　Bの俳句の説明をふまえると、次の俳句の表現の特徴はどのように説明できますか。あとのア～エのうちから、最も適当なものを一つ選び、その記号を書きなさい。

去年今年(こぞことし)貫く棒の如きもの　高浜虚子(たかはまきょし)

ア　「去年今年」という具象的なものを詠(よ)むことで、「歳月の移(うつ)ろい」というイメージを喚起し、「日常の普遍性」という抽象的なものを表現している。

イ　「去年今年」という抽象的なものを詠むことで、「歳月の移ろい」というイメージを喚起し、「日常の普遍性」という具象的なものを表現している。

ウ　「棒」という可視的なものを詠むことで、「まっすぐな線」というイメージを喚起し、「歳月の移ろい」という不可視的なものを表現している。

エ　「棒」という不可視的なものを詠むことで、「まっすぐな線」というイメージを喚起し、「歳月の移ろい」という可視的なものを表現している。

［　　］

【岩手県】

Step 2・3

二

次の短歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

A　ひぐらしの一つが啼（な）けば二つ啼き山みな声となりて明けゆく　四賀光子（しがみつこ）

B　八月のまひる音なき刻（とき）ありて瀑布（ばくふ）[注1]のごとくかがやく階段　真鍋美恵子（まなべみえこ）

C　旅人の耳は澄みけり山行きて秋の光のおと聴くほどに　安田章生（やすだあやお）

D　水甕（がめ）[注2]の空ひびきあふ夏つばめものにつかざる[注3]こゑごゑやさし　山中智恵子（やまなかちえこ）

E　湧き上がりあるいは沈みオーロラ[注4]の赤光緑光（しゃくこうりょくこう）闇に音なし　秋葉四郎（あきばしろう）

F　地（つち）ひくく咲きて明（あき）らけき菊の花音あるごとく冬の日はさす　佐藤佐太郎（さとうさたろう）

注1　滝。
注2　水をためる容器。
注3　なにものからも自由な。
注4　北極や南極に近い地方の空に見られる、帯や幕のような光。

Step 2

1　直喩を用い、動くはずのない物体を、音と動きがあるかのように表現し、迫るような存在感のある短歌はどれか。A～Fの中から一つ選びなさい。

□

Step 3

2　目の前に大きく広がる情景を表現することで、動と静の両面を持つ壮大な自然への感動を詠(よ)んだ短歌はどれか。A～Fの中から一つ選びなさい。

Step 3

3　次の文章は、A～Fの中の二つの短歌の鑑賞文である。この鑑賞文を読んで、あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

この短歌は、調子や意味の切れ目が、二句目と三句目の間にあり、はじめに聴覚に関連させて表現したうえで、「　Ⅰ　」という視覚で捉える言葉に転じ、さらにもう一度聴覚で捉えたように表現することで、音なきものに音が感じられるかのような情景を想像させている。

また別の短歌では、時間の経過とともに、次第に力強くなってゆく生き物の声によって、それらを取り囲む自然が、まるで量を増して大きくなっていくように感じられる様子が「　Ⅱ　」という言葉にいきいきと表現されている。

(1)　Ⅰ　にあてはまる最も適当な言葉を、その短歌の中から**三字**でそのまま書き抜きなさい。

(2)　Ⅱ　にあてはまる最も適当な言葉を、その短歌の中から**八字**でそのまま書き抜きなさい。

【福島県】

〈Note〉

第十八講　古文の読解①

Step 1

一　次の文章を読み、あとの(1)~(4)の問いに答えなさい。

> 平安中期に上東門院（じょうとうもんいん）（藤原彰子（ふじわらのしょうし）のこと。一条天皇の后（きさき）。）の身のまわりで起こった出来事についての文章である。

まことや、この御時、一つの不思議ありける。上東門院の御方の(注1)御帳（みちやう）の内に、犬の子を生みたりける、思ひかけぬありがたきこと（めったにないこと）なりければ、A おほきに驚かせ給（たま）ひて（驚きなさって）、(注2)江匡衡（がうきやうかう）といふ博士（はかせ）に問はれければ（おたずねになったところ）、「B これ、C めでたき御吉事なり。犬の字は、大の字のそばに点をつけり。その点を上につけば、天なり。下につけば、太なり。その下に、子の字を書きつづくれば、天子とも（天皇）、太子とも（皇太子）読まるべし。かかれば（このようであるから）、太子生れさせ給ひて、天子にいたらせ給ふべし」とぞ申しける。

そののち、はたして皇子御誕生ありて、ほどなく位につき給ふ。後一条天皇（ごいちでうてんわう）、これなり。匡衡、風月（ふげつ）の才に富めるのみならず、D かかる心ばせども深かりけり。

（「十訓抄」より）

（注1）御帳の内＝位の高い人の生活の場として、垂れ幕をかけて区切った場所。
（注2）江匡衡＝大江匡衡（おおえのまさひら）のこと。学者。「がうきやうかう」は中国風に読んだもの。

(1) 文章中のAおほきにを現代仮名づかいに改め、**すべてひらがなで**書きなさい。

(2) 文章中のBこれが指し示す部分を文章中から**二十字以上、二十五字以内で抜き出して、はじめと終わりの五字**をそれぞれ書きなさい。

はじめ　□□□□□　～　終わり　□□□□□

(3) 文章中にCめでたき御吉事なりとあるが、なぜそう言えるのか。それを説明した次の文の［①］、［②］に入る言葉を書きなさい。
ただし、［①］は**五字以内**で、［②］は**十字以内**で書くこと。

「犬」の字は、［①］を変え、下に「子」を加えると、［②］を予感させる言葉に変わるから。

①　□□□□□
②　□□□□□□□□□□

(4) 文章中にDかかる心ばせども深かりけりとあるが、どのようなことに対しこう言っているのか。最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 匡衡が、自然現象に関する広い知識により、奇妙な出来事の背景をあざやかに解き明かしたこと。
イ 匡衡が、漢文の幅広い知識により、不可解な出来事を中国の故事を引用して整然と説明したこと。
ウ 匡衡が、とても優れた予知能力により、意外な出来事から上東門院の将来の姿を言い当てたこと。
エ 匡衡が、豊富な知識と優れた機転により、予想外の出来事をたいへん縁起が良いと解釈したこと。

□

【千葉県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

＊小式部内侍（こしきぶのないし）、この世ならず（はなはだしく）1わづらひけり。かぎりになりて（もう終わりかというまでになり）、人顔なども見知らぬほどになりて（人の顔なども見分けがつかないほどになってしまって）、臥（ふ）したりければ、和泉式部（いづみしきぶ）、かたはらにそひて、額をおさへて2泣きけるに、目をわづかに見あけて、母が顔をつくづくと3見て、息の下に（苦しい息の下で）、

いかにせむ（どうしたらいいのでしょうか）　4いくべき方をおもほえず　親に先だつ道を知らねば（親に先だって死んでいく道も知りませんので）

と、わななきたる声にて候（さうら）ひければ（ふるえる声でよみましたところ）、5天井の上に、あくびさしてやあらむ（あくびをかみ殺したかと思われるような声で）、とおぼゆる声ありて、「あな、あはれ」といひてけり。さて、身のあたたかさもさめて、よろしくなりにけり。

（「十訓抄」より）

（＊注）　小式部内侍…後に出てくる和泉式部の娘。

Step 2

問一　「1わづらひ」を現代かなづかいに直し、すべてひらがなで書きなさい。

5

Step 2

問二　「2泣きけるに」「3見て」について、主語の組み合わせとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

	2の主語		3の主語
ア	小式部内侍	―	和泉式部
イ	小式部内侍	―	小式部内侍
ウ	和泉式部	―	小式部内侍
エ	和泉式部	―	和泉式部

Step 3

問三　次の文章は、「4いくべき方をおもほえず」について説明したものです。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

この表現には、同音を利用して二つの意味を持たせる表現技法すなわち（①）が用いられています。その表現技法によって、「生きる方法がわからず」と「（②）方向がわからず」という二つの意味を持たせています。

(1)　空欄①にあてはまるものとして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　枕詞　　イ　対句　　ウ　体言止め　　エ　掛詞

(2)　空欄②にあてはまる言葉を、漢字とひらがなを用いて、一語で書きなさい。

Step 3

問四　次の会話は、「5天井の上に、あくびさしてやあらむ、とおぼゆる声ありて、『あな、あはれ』といひてけり」に関する生徒と先生のやりとりです。この会話を読み、あとの問いに答えなさい。

先生　その質問に答える前に、私から質問しましょう。
生徒　天井の上であくびをかみ殺したような声を出した人がいるようですが、それは誰ですか。
先生　その質問に答える前に、私から質問しましょう。

先生　最後の一文に、「身のあたたかさもさめて、よろしくなりにけり」とありますね。あなたが質問している天井の上の声の主によって、何かに変化が起きたことが述べられているのですが、その内容はわかりますか。
生徒　前からの流れで考えれば、（　①　）ことですか。
先生　よくわかりましたね。では、あなたが質問している天井の上の声の主についてですが、実は、以前授業で読んだ『古今和歌集』の冒頭部分がヒントになるのですが、どうでしょうか。
生徒　えーっと……もしかして（　②　）ですか。
先生　そのとおりです。
生徒　そうすると、（　①　）のは、（　②　）が（　③　）に心動かされたからなんですね。

(1)　空欄①にあてはまる内容として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　病床にいた娘が、病気の重い状態から回復した
イ　娘が、長年思いを寄せていた男性と結婚した
ウ　長い間わずらっていた母親の病気が完治した
エ　母親の怒りが冷めて、娘が母から許してもらえた

(2) 空欄②にあてはまるものとして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

（『古今和歌集』冒頭部分）

「力をも入れずして、ア天地（あめつち）を動かし、イ目に見えぬ鬼神（おにがみ）をもあはれと思はせ、ウ男女（をとこをむな）の仲をも和らげ、エたけき武士（もののふ）の心をも慰むるは、歌なり」

□

(3) 空欄③にあてはまる内容として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　母親が娘の無念さを詠（よ）んだ歌
イ　母親が自身の辛さを詠んだ歌
ウ　娘が自身の悲しみを詠んだ歌
エ　娘が母親への感謝を詠んだ歌

□

【鳥取県】

〈*Note*〉

第十九講　古文の読解②

Step 1

一　次の文章を読んで、後の問一～問四に答えなさい。

前の大和(やまと)の守(注)時賢(ときかた)が墓所は、長谷(はせ)といふ所にあり。そこの留守する(墓守をする)男、くくり(わな)をかけて鹿を取りけるほどに、或(あ)る日、大鹿かかりたりける。この男が①思ふやう、「くくりにかけてとりたらん、念なし(捕まえるのはたやすいことだ)。射殺したりといひて、②弓の上手のよし人に聞かせん」と思ひて、くくりにかけたる鹿に向ひて(注)大雁股(おおかりまた)をはげて(つがえて)射たりけるほどに、その矢、鹿にはあたらずして、くくりにかけたりけるかづら(つな)にあたりたりければ、かづら射切られて、③鹿はことゆゑなく(なんなく)走りにげてゆきにけり。この男、かしらがきをすれども(頭をかいて悔しがったが)、さらにえきなし(どうにもならなかった)。

(「古今著聞集(ここんちょもんじゅう)」より)

(注)　時賢…　源(みなもとのときかた)　時賢(人名)
　　　大雁股…矢の種類の一つ。

問一　傍線部①の「思ふやう」を**現代仮名遣い**に改めなさい。

思

問二　傍線部②「弓の上手のよし人に聞かせん」はここではどういう意味か。最も適当なものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　弓が上手であることを人に言いふらそう。
イ　弓が上手であることは内緒にしておこう。
ウ　弓の上手な人に言って助けてもらおう。
エ　弓の上手な人にはこの腕前を秘密にしよう。

問三　傍線部③「鹿はことゆゑなく走りにげてゆきにけり。」について、次の1、2に答えなさい。

1　なぜ鹿は逃げることができたのか。**二十字以上、三十字以内**で答えなさい。

2　これは、男のどのような気持ちがもたらした結果といえるか。最も適当なものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　道徳心　　イ　向上心　　ウ　嫉妬心　　エ　虚栄心

問四　次のア～エの故事成語（中国の古典から生まれた言葉）の中で、この話が伝えていることと最も近いものはどれか。一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　推敲　　イ　矛盾　　ウ　蛇足　　エ　五十歩百歩

□

【島根県】

Step 2・3

二 次の文章は、「古今著聞集（ここんちょもんじゅう）」の一節である。注を参考にしてこれを読み、問い(1)～(5)に答えよ。

①少将（せうしやう）の内侍（ないし）、②台盤所（だいばんどころ）の③御（おほん）つぼのかへでの木を見出（いだ）して、「このかへでに、aはつもみぢのしたりしこそ失（う）せにけれ」とbいひたりけるを、④頭（とう）の中将（ちゆうじやう）聞きて、「いづれの方にか候（さぶら）ひけむ」とて、梢（こずゑ）を見あげければ、人々もみなめをつけて見けるに、⑤蔵人永継（くらうどながつぐ）とりもあへず、「西の枝（え）にこそc候ひけめ」と申したりけるを、⑥右中将実忠朝臣（うちゆうじやうさねただあそん）、⑦御剣（ぎよけん）の役のために参りて、おなじくその所に候ひけるが、この言を感じて、「この比（ごろ）は、これほどの事も⑧心とくうちいづる人は⑨かたきにてあるに、優に候ふものかな」とて、うちうめきたるに、人々みな⑩入興（じゆきよう）して⑪満座感歎（かんたん）しけり。まことに、とりあへずいひいづるも、またd聞きとがむるも、いと優にぞ侍（はべ）りける。⑫「古今（こきん）」の歌に、

おなじ枝をわきて木（こ）のはの色づくは西こそ秋の初めなりけれ

と侍るを⑬おもはへていへりけるなるべし。

（「新潮日本古典集成」より）

注
- ① 少将の内侍…中務大輔（なかつかさたいふ）藤原信実（ふじわらののぶざね）の娘
- ② 台盤所…女房（にょうぼう）が食事の準備をする場所
- ③ 御つぼ…お庭
- ④ 頭の中将…藤原宣経（ふじわらののぶつね）
- ⑤ 蔵人永継…藤原永継（ふじわらのながつぐ）
- ⑥ 右中将実忠朝臣…藤原実忠（ふじわらのさねただ）
- ⑦ 御剣の役…天皇が外出する時に剣を両手で持って従う役
- ⑧ 心とくうちいづる…察しがよく言葉にして言い出せる

⑨ かたきにてあるに…めったにいないのに
⑩ 入興して…たいしたものだと喜び楽しんで
⑪ 満座…その場にいる人全員
⑫ 「古今」の歌…「古今和歌集」に収められている和歌
⑬ おもはへて…考えついて

Step 2

(1) 本文中のaはつもみぢのしたりしこそ失せにけれの解釈として最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア) 初めて紅葉を見た人がいなくなってしまったなあ
(イ) 初めて紅葉を見た場所がなくなってしまったなあ
(ウ) 初めて紅葉していた木が見当たらなくなってしまったなあ
(エ) 初めて紅葉していた葉が散ってしまったなあ

Step 3

(2) 本文中のbいひたりけるは歴史的仮名遣いで書かれている。これをすべて現代仮名遣いに直して、平仮名で書け。

Step 3

(3) 本文中の c 侯ひけめのように、「係り結び」によって結びの部分が変化しているものは、本文中の二重傍線部（‖）のうちどれか、最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア) 申したりける　(イ) 侯ひける　(ウ) 侍りける　(エ) いへりける

□

Step 3

(4) 本文中の d 聞きとがむるとは、「直ちに気づいて感心したということ」という意味であるが、だれが感心したのか、最も適当なものを、次の(ア)～(オ)から一つ選べ。

(ア) 少将の内侍　(イ) 頭の中将　(ウ) 人々　(エ) 蔵人永継　(オ) 右中将実忠朝臣

□

Step 3

(5) 次の会話文は、本文について、花子さんと太郎さんが話し合ったものの一部である。これを読み、後の問い㊀・㊁に答えよ。

花子さん　昔は五行説といって、方角と季節が対応しているという考えがあったそうだよ。たとえば、南は夏と対応しているんだって。
太郎さん　「西の枝にこそ候ひけめ」という言葉は、五行説から考えると理解できるね。「『古今』の歌」にあるように、同じ木の枝でも、紅葉は［　　］と思いついたから、とっさに言えたんだろうね。
花子さん　筆者の感想が書かれている本文の後半からは、筆者が感心している様子がわかるね。
太郎さん　感心したからこそ、こうして書き遺そうと思ったんだろうね。

㊀ ［　　］に入る適当な表現を、本文の内容をふまえて、**五字以上、十字以内**で書け。

㊁ 後半について、本文は、具体的なエピソードが書かれている前半と、筆者の感想が書かれている後半の二つに分けることができる。後半が始まる一文を本文中から抜き出し、**初めの四字**を書け。

【京都府】

〈Note〉

第二十講　古文の読解③

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

餅を好む入道（注）①ありけり。医師②なりければ（医者だったので）、呼びて、③好む由を聞きて（入道が大の餅好きだと聞いた主人が）、主、餅を④させけるが（餅をつかせたところ）、舂く声を聞きて（この音を聞いた入道が）、この入道、「おうおう」と声を揚げ、おめきつつ（叫びながら）、果ては畳の縁に摑み付きて（はてには畳の縁をつかんで）、もだえこがれて、「あら堪へがたや（ああ耐えがたい）。入道が聞かざる所にて舂かせたまへ（聞こえないところでおつきくだされ）。彼の声を聞くは堪へがたく候（餅をつく音を聞くのは耐えがたくてなりません）」と云ひければ、これ程の事は希なれども（これ程極端なことは希であるが）、人毎に好む事あり（人は皆好むものがある）。いかに物を好まぬ者も（どんなにものを好まない人でも）、或は徒らなるを好み（ある者はつまらないことを好み）、或は昼寝を好む者あり（ある者は昼寝を好んだりする）。ある僧は、朝の粥を忘れて食はずして（食べずに）、日闌くるまで起きず（日が高く昇るまで寝ていた）。「いかに粥をば召さぬぞ（どうして朝の粥を召し上がらないのか）」と人云へば、「粥よりも、寝たるは遥かに味の吉きなり（寝ているほうが、遥かに美味なものですから）」と云ひけり。

（「沙石集」より）

（注）入道——仏道に入って修行すること。また、その人。

㈠　二重傍線部分①～④の中には、主語が他と異なるものが一つある。その番号を書きなさい。

㈡　波線部分「食はずして」を現代仮名遣いに改め、ひらがなで書きなさい。ただし、漢字の部分はそのまま使用すること。

㈢　本文の内容に合うものとして、次の中から最も適当なものを一つ選び、その記号を書きなさい。

ア、畳の縁（へり）を強くつかんで、もだえていた主人は、餅をついている音を聞いたとき、「おうおう」と大きな声を揚げて叫んだ。
イ、入道（にゅうどう）が、餅をつく音の聞こえないところで餅をつかれるのはとても耐えがたい、と主人に言ったようなことは希（まれ）である。
ウ、誰もがつまらないものを好むので、ある者は朝の粥（かゆ）を食べることを好んだり、ある者は昼寝をすることを好んだりする。
エ、朝の粥を食べずに日が高く昇るまで寝ていた僧は、粥より寝ているほうが遥（はる）かに美味なものですから、と理由を答えた。

【三重県】

Step 2・3

二　次の文章は、「沙石集(しゃせきしゅう)」の一節である。注を参考にしてこれを読み、問い(1)～(6)に答えよ。

奈良の都に八重桜と聞こゆるは、当時も①東円堂(とうゑんだう)の前にあり。その②かみ、時の后(きさき)、③上東門院、興福寺(こうふくじ)の④別当(べつたう)に仰(おほ)せて、かの桜を召されければ、掘りて車に載せて参らせける。⑤ある大衆(だいしゅ)の中に見合ひて、事の子細を問へば、「しかじか」と答へけるを、「名を得たる□を、⑥左右(さう)なく参らせらるる別当、返す返す不当なり。ａひが事なり。且(か)つは⑦色もなし。后の仰せなればとて、これ程の名木をいかでか進(まゐら)すべし。とどめよ」とて、やがて貝を吹き、大衆を催(もよほ)して打ち留(とど)め、「別当をもｂ払ふべし」などまでののしりて、「この事によりて、ｃいかなる重科にも行はれば、我が身⑧張本に出づべし」とぞ云(い)ひける。

この事、女院聞こしめし給ひて、「奈良法師はｄ心なき者と思ひたれば、⑨わりなき大衆の心かな。実に色深し」とて、「さらば、我が桜と名付けん」とて、⑩伊賀国与野(いがのくによの)と云ふ⑪庄を寄せて、花の盛り七日、⑫宿直(とのゐ)を置きてこれを守らせる。今にかの庄、寺領たり。昔もｅかかるやさしき事ありけるにこそ。

（「新編日本古典文学全集」より）

注
① 東円堂＝奈良市の興福寺にあったとされる建物
② かみ＝昔
③ 上東門院＝天皇の后である彰子(しょうし)
④ 別当＝寺務を統括する責任者
⑤ ある大衆の中に＝興福寺の僧侶集団の中のある僧が

⑥　左右なく＝簡単に
⑦　色もなし＝風情（ふぜい）もない
⑧　張本に出づべし＝張本人だと名乗り出よう
⑨　わりなき＝すばらしい
⑩　伊賀国＝現在の三重県西部
⑪　庄を寄せて＝荘園を寄進して
⑫　宿直＝警備を行う人

Step 2
(1)　□に入る語として最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア)　都　(イ)　后　(ウ)　桜　(エ)　車

□

Step 2
(2)　本文中のａひが事は「間違い」の意味であるが、「間違い」の具体的な内容を表しているものとして最も適当なものを、次の(ア)～(エ)から一つ選べ。

(ア)　東円堂の桜が八重桜と呼ばれていること。
(イ)　東円堂の前へと桜を植え替えてしまうこと。
(ウ)　東円堂の桜を次々に切り倒してしまうこと。
(エ)　東円堂の前の桜を上東門院にお譲りすること。

□

Step 2

(3) 本文中のb払ふべしは歴史的仮名遣いで書かれている。この平仮名の部分をすべて**現代仮名遣い**に直して、**平仮名**で書け。

払

Step 3

(4) 本文中のcいかなる重科にも行はるればの解釈として最も適当なものを、次の(ア)~(エ)から一つ選べ。

(ア) やむを得ず重い扉を私が開けることになろうとも
(イ) どのような重い罰が私に与えられることになっても
(ウ) とても重い荷物を私はたくさん運ばされてきたが
(エ) これまでは重い責任を私だけが果たしてきたが

Step 3

(5) 本文中のd心なき者の「心」は、本文の内容からどのような「心」であると考えられるか、最も適当なものを、次の(ア)~(エ)から一つ選べ。

(ア) 風流を解する心　(イ) 目上の人を敬う心　(ウ) 神仏を信じる心　(エ) 自己を律する心

Step 3

(6) 次の文は、本文中のｅかかるやさしき事について説明したものである。これを読み、後の問い㈠・㈡に答えよ。

「かかるやさしき事」は「このような優美なできごと」という意味であり、本文中で、大衆が、上東門院からの命令に背くことになろうとも、自分たちの寺の桜を［Ⅰ］ことと、それに対して、上東門院が［Ⅱ］という対応を見せたことへの賛辞である。

㈠ ［Ⅰ］に入る適当な表現を、本文の内容を参考にして**十字以内**で考えて書け。

㈡ ［Ⅱ］に入る最も適当なものを、次の(ア)〜(エ)から一つ選べ。

(ア) 桜に自らの名前を大きく刻み付けることで、その桜が自らの所有物であることを、広く世間に知らせる

(イ) 奈良法師と呼ばれ周囲から恐れられていた僧に、桜の美しさを教えることで、別当との仲を取り持つ

(ウ) 別当の自らの私腹を肥やすための身勝手な行為を鮮やかに見抜いて、見事にこらしめる

(エ) その桜に対して他の人が手を出してこないように、荘園を寄進するなどの配慮をする

【京都府】

第二十一講　古文の読解④

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

東の京、雲居寺(うんごじ)といふところに、瞻西上人(せんさいしやうにん)といふ人いまそかりけり（いらっしゃった）。智行(ちぎやう)（知識と徳行）ともに備はりて、ひとへにこの世をなん思ひ捨てて（ひたすら現世を関心がないと見放して）、わくかたなく後世(ごしやう)の営みのみにて侍(はべ)りけり（ほかの思いもなく極楽往生のためのお勤めのみを果たしていました）。あるとき、冬なりけるなむめり（冬だったのだろう）、けしかる女（怪しげな女）出(い)で来たりはべりて、「あまりに寒くはべり。いかばかりのものなりとも得たまはせよ。」と聞こえはべれば（申し上げましたので）、さこそ寒かるらめと、あはれに覚(おぼ)して（お思いになって）、1着たまへりける小袖をなむ給はりてける。

さて、あくる日、又ありし女（またこの前の女が）来たりて言ふやう、「昨日の小袖は、はからざるに（思いがけなく）、失うてはべり。又給はらん。」と言ふ。やがて又給ひてけり。さてあるべきか（そのようなことがあるだろうか）と覚すところに、又つぎの日、莚(むしろ)ばかり身にまとひて「着物ひとつ給(た)べ。」と言ふやう、この(注)上人心得ず覚して、のたまふやうは、「二度は慈悲をもつて汝(なんぢ)に与へぬ。さのみは身の力なし。2かなふまじ。」とのたまふとき、この女、気あしくなりて、「汝は極まりて心小(ちひ)さかりけり。心小さき人の施(せ)をば、我受けず。」と言ひて、3ふたつの小袖を投げ返して、かき消すがごとく失(う)せはべり。上人、(注)化人(けにん)の来たりて、我が心をはかりたまへりけるにこそとて、心のほどを自ら恥ぢしめて、悔い悲しみたまへりけるぞ、あはれに

かたじけなく覚えてはべる。

聖（ひじり）の心のつゆばかりもけがれざりければこそ、澄める月の空曇りする誤りもはべりけめと、かへすがへすゆかしく覚えてはべるぞや。

（「撰集抄（せんじゅうしょう）」より）

（注）

この上人＝「瞻西上人」のこと。「上人」「聖」も同じ人物。

化人＝仏・菩薩（ぼさつ）が仮に人間の姿となって現れたもの。

(ア)　――線1「着たまへりける小袖をなむ給はりてける。」とあるが、「瞻西上人」が身につけていた衣服を「女」に与えた理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　衣服を渡したくはないが、「女」に親切にすることで世間での評判が高まると期待したから。

2　あまりに寒いのでどんな物でもくださいという「女」の訴えを聞き、気の毒に思ったから。

3　初めは怪しいと疑ったが、何も持たず一心に修行に励んでいる「女」の姿に感動したから。

4　しつこく衣服を求めてくる怪しげな「女」の訴えを聞き、もう関わりたくないと考えたから。

(イ) ――線2「かなふまじ。」とあるが、その内容を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「女」が着物を何度も欲しがることに納得できないので、重ねて与えるつもりはないということ。
2 「女」は現世の利益を求めているが、極楽往生を願わなければ助けるつもりはないということ。
3 「女」に目先の施しをすることが、本人にとって真実の救いになるのかわからないということ。
4 「女」の求めに応じたいのに、肝心の与えるべき小袖がなくなってしまい申し訳ないということ。

(ウ) ――線3「ふたつの小袖を投げ返して、かき消すがごとく失せはべり。」とあるが、そのときの「女」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「瞻西上人」をだまして小袖をもらったことが、仏の道に反していると心から悔やんでいる。
2 「瞻西上人」が仏の化身であることを知って恐れおののき、自分自身の強欲さを恥じている。
3 「瞻西上人」に小袖を隠していたことを見破られて、ふてぶてしい態度に出ようと考えている。
4 「瞻西上人」の心の狭さを知って失望し、そんな人からの施しは受けないと気分を害している。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「女」は、立派な僧と名高い「瞻西上人」の本性を知るために非難したが、澄んだ月のような「上人」の人柄に感動して仏の教えを信じるようになった。

2 「女」は、困ったときには仏にすがるようにという親の教えを守って「瞻西上人」を頼ったが、最初のうちは親切だった「上人」が冷たくなったことに失望した。

3 「瞻西上人」は、着物を何度も求められた一連のできごとが、自分の心を試そうとした「化人」によるものであると悟り、自らの行いを後悔して悲しんだ。

4 「瞻西上人」は、世間との関わりを断って修行に専念していたが、「化人」の行為をきっかけにして自分の心を乱されてしまい、世間の人々を疑うようになった。

□

【神奈川県】

Step 2・3

二　次の文章を読み、後の㈠～㈣の問いに答えなさい。

ある山寺に、徳たかく聞こゆる聖(ひじり)ありけり。年(とし)ごろ、堂を建て、仏作(つく)り、さまざま功徳(くどく)をいとなみ、尊(たふと)く行ひけるが、終(をは)りめでたくてありければ、弟子もあたりの人も、疑ひなき往生人と信じて過ぎけるほどに、ある人にかの聖の霊(りやう)つきて、心得ぬさまのことどもいふ。聞けば、はや天狗(てんぐ)になりたりけり。弟子ども、1思ひのほかなる心地(ここち)して、2いみじく口惜しく思へども、力無く、おぼつかなきことなど問ひければ、不思議のことどもいふ中に、「我、在世の間、深く名聞(みやうもん)に住して、なき徳を称じて人をたぶろかして作りし仏なれば、かかる身となりて後は、この寺を人の拝み尊ぶ日に、我が苦患(くげん)まさるなり」とこそいひけれ。

いみじき功徳をつくるとも、心ととのはずは、かひなかるべし。「今のことなれば、名はたしかなれど、ことさらあらはさず」とぞ、ある人語り侍(はべ)りし。

（鴨(かもの)　長明(ちょうめい)「発心集」より）

（注）　聖…僧のこと。
年ごろ…長年の間。
功徳をいとなみ…善行を積み。
尊く行ひけるが、終りめでたくてありければ…立派に修行したが、臨終も見事だったので。
心得ぬさまのことどもいふ…納得のいかないことを言った。
力無く、おぼつかなきこと…どうすることもできず、気がかりなこと。
在世の間、深く名聞に住して…生きている時、周囲の評判をとても気にして。
たぶろかして…だまして。

苦患…苦しみとわずらい。
ことさら…わざと。

Step 2

(一) 文章中の――線部1の「思ひのほかなる」を現代仮名遣いに直して、――部全部を**ひらがな**で書け。

Step 3

(二) 文章中の――線部2に「いみじく口惜しく思へども」とあるが、弟子たちが「口惜しく」思ったのは、聖の死後をどのように想像していたためか。それがわかる部分を文章中から**七字**でそのまま抜き出して書け。

Step 3

(三) 筆者が考えを述べている一文を文章中から探し、その初めの**五字**をそのまま抜き出して書け。

Step 3

(四) この文章で述べられている内容の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア 徳が高いと評判だったある山寺の聖は、実は天狗だったので、いくら善行を積んでもその甲斐(かい)はなく、かえって人間だったときの記憶に苦しめられることになった。

イ 徳が高いと評判だったある山寺の聖は、生前、善行を積んだが、名声を得ることが目的であったために天狗になってしまい、人に取りついて自分の苦しみを訴えた。

ウ 徳が高いと評判だったある山寺の聖は、生前、人々に尽くし修行をして一生懸命に善行を積んでいたのに天狗になってしまったので、弟子たちはさらに修行に励んだ。

エ 徳が高いと評判だったある山寺の聖は、その名声を妬む人から善行を積んでいたにもかかわらず死後に天狗になったという噂(うわさ)を流され、名誉をひどく傷つけられた。

□

【高知県】

〈*Note*〉

第二十二講　古文の読解⑤

Step 1

一　次の古文を読み、あとの(一)〜(四)に答えなさい。

摂政（せつしやう）殿参らせ給（たま）ひて（参上なさって）、廿一日（にじふいちにち）の夜の月、いと心許（こころもと）なく待たせ給ふ程（たいそうじれったい様子で待っておられたが）、人々に「出（い）でたりや（もう出たかね）」と問はせ給へば（お聞きになるので）、さまざまに様（やう）を変へて申すに、「山の此方（こなた）へは出でながら（山のこちら側へはもう出ておりますが）光のいまだあらはれぬ（光がまだ届きませんで）」と申す人侍（はべ）りしを（いましたのを）、「この申し様、念ありてさもあり（よく考えられていてなるほどと納得する）」など、人々も仰（おほ）せられしかば、弁、

A　山の端（は）にせめても月の遅き夜は此方と思ふもなほぞ待たるる

（「弁内侍日記（べんのないしにつき）」より）

（注）摂政殿＝近衛兼経（このゑかねつね）。
弁＝弁内侍（作者）。

(一)「あらはれぬ」を、現代仮名遣いで書き直しなさい。

㈡「問はせ給へ」の主語を、次の1～4から一つ選び、記号で答えなさい。

1　摂政殿　2　人々　3　申す人　4　弁

□

㈢「様を変へて」の解釈として最も適切なものを、次の1～4から選び、記号で答えなさい。

1　質問をわかりやすく改めて　2　服装を新しいものに替えて
3　場所をあちこちに移動して　4　返事をおもしろく工夫して

□

㈣　Aの和歌のうち、上の句は「山から出る月の大変遅くじれったく感じられる夜は」と解釈できるが、下の句にこめられた「弁」の気持ちとして最も適切なものを、次の1～4から選び、記号で答えなさい。

1　申す人の「月は今夜はもう出ない」という意味の発言を受けて、もう待つのをやめた方がよいと思う気持ち。
2　申す人の「月はもう沈んでしまった」という意味の発言を受けて、本当かどうか信じられないと思う気持ち。
3　申す人の「月はもう近くまで来ている」という意味の発言を受けて、そうはいっても待ち遠しく思う気持ち。
4　申す人の「月はいつか出るだろう」という意味の発言を受けて、いつまで待てばよいのか不安に思う気持ち。

□

【山口県】

Step 2・3

二　次のAの文章は、『今物語』の一部で、藤原定家と藤原家隆についての説話の前半の現代語訳であり、Bの文章は、Aに続く部分の古文である。また、Cの文章は、Bの文章中にある二つの和歌の解釈である。この三つの文章を読んで、(一)～(七)の問いに答えなさい。

A　近年和歌の道は特にもてはやされているので、内裏（だいり）・院の御所・摂政（せっしょう）家など、いずれの場でもそれぞれに、詠歌の奥底まで極めていらっしゃった。臣下が大勢いらっしゃる中に、治部卿（じぶきょう）定家、宮内卿（くないきょう）家隆という人がいて、彼らは和歌の伝統が続く家で、和歌の道に名声を得ている人々であるから、この二人にはだれも及ばなかった。

（注）内裏・院の御所・摂政家＝ここでは、それぞれ、天皇、上皇、摂政家を中心とする歌壇のこと。
治部卿＝治部省の長官。
宮内卿＝宮内省の長官。

B　ある時、摂政殿、宮内卿を召して、「当時正しき歌よみ（現在正統的ナ歌人ガ）多く聞こゆる中に（知ラレテイル中デ）、いづれかすぐれ侍る（ダレガスグレテイルノカ）。心に(1)思はんやう、ありのままに」と御尋ねありければ、「いづれともわきがたく候（ドナタトモ判別シガタク存ジマス）」とばかり申して、思ふやうありげなるを（アリソウナ様子ナノデ）、「(2)いかにいかに」とあながちに（強イテ）問はせ給ひければ、ふところより畳紙（たたうがみ）を落として、やがて（ソノママ）出でにけり。御覧ぜられければ（御覧ニナッタトコロ）、

〈Ⅰ〉　明けば又秋のなかばも過ぎぬべし
(3)かたぶく月の惜しきのみかは

と書きたり。この歌は治部卿の歌なり。(4)かかる御尋ねあるべし（アルダロウ）とはいかでか知る（ドウシテ知ロウカ）べき。ただ、もとよりおもしろくおぼえて、(5)書き付けて、持たれけるなめり（持ッテイタモノデアロウ）。その後、又治部卿を召して、さきのやうに尋ねらるるに、これも申しやりたるかたなくて（申シ上ゲヨウガナクテ）、

〈Ⅱ〉かささぎのわたすやいづこ夕霜（ゆふしも）の

雲井に白きみねのかけはし

と、たかやかにながめて出でぬ（高ラカニ声ニ出シテウタッテ）。これは宮内卿の歌なりけり。(6)まめやかの上手（マコトノ名手）の心は、されば（コノヨウニ）一つなりけるにや。

（注）摂政殿＝政務を行う上での中心となる官職。

畳紙＝折り畳んで懐（ふところ）に入れ、和歌を書くことなどに用いる紙。

かささぎ＝カラス科の鳥。古来、文学上では、七夕説話の星の仲立ちをする鳥として知られる。

雲井＝大空。

C

〈Ⅰ〉の和歌の解釈

八月十五夜の今宵（こよい）が明けたら、秋の半ばも過ぎたことになるだろう。今傾く名月だけが惜しいのではない。

〈Ⅱ〉の和歌の解釈

あのかささぎが渡すという橋はどこにあるのか。この黄昏（たそがれ）に、山の峰に一面に降った霜が、天空に白くかかる橋のように輝くよ。

Step 2

(一) ――線部分(1)「思はん」の読みを、すべてひらがなで書きなさい。ただし、現代かなづかいでない部分は、現代かなづかいに改めること。

Step 2

(二) ――線部分(2)「いかにいかに」という言葉には、どのような気持ちが表れているか。具体的に書きなさい。

Step 3

(三) ――線部分(3)について、「かたぶく月」の他に何を惜しんでいるのか。Cの文章を踏まえて、十字以内で書きなさい。

Step 3

(四) ――線部分(4)「かかる御尋ね」とは何か。具体的に表している部分を、Bの文章中から三十字以内で抜き出し、そのはじめと終わりの五字をそれぞれ書きなさい。

はじめ

終わり

Step 3

㈤ ――線部分(5)について、このようにしていた理由を、二十五字以内で書きなさい。

Step 3

㈥ 〈Ⅱ〉の和歌を説明した文として、最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 七夕説話で、かささぎが架けるといわれている天空の橋を想像し、峰に降った霜と重ねあわせて詠んでいる。
イ 七夕の今日、七夕説話に登場するかささぎが、遠くの峰を目指して飛んでゆく様子を想像して詠んでいる。
ウ 冬の雪の中で、かささぎが天空に橋を架けるように連なって飛ぶという七夕説話のことを歌に詠んでいる。
エ 七夕説話の中で、天空に橋を架けるといわれるかささぎが、今、目の前を飛び去っていく様子を詠んでいる。

Step 3

(七) ――線部分(6)は、具体的にどういうことか。AとBの文章全体を踏まえて、八十字以内で書きなさい。

【新潟県】

〈Note〉

第二十三講　古文の読解⑥

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（----の左側は口語訳です。）

> 高倉天皇（たかくらてんのう）は十歳のころから紅葉を好み、宮中に「もみじの山」と名付けた小さな山をつくらせ、それを楽しんでいた。ある夜、風が激しく吹いてその山の紅葉をすべて散らしてしまったので、掃除を担当する下役人が紅葉を全部掃き捨て、自分たちの飲む酒をあたためるためにそれらを燃やした。

奉行の［当番の］※蔵人（くらんど）、行幸［天皇のお出まし］より先にといそぎゆいてみるに［行ってみると］跡かたなし。「いかに。」［どうした］と問へばしかじかといふ。蔵人大きにおどろき、「あなあさまし［ああ、大変だ］。君のさしも執（しつ）しおぼしめされつる［天皇があれほど執着しておられた］紅葉を、かやうにしけるあさましさよ［あきれたことだ］。知らず、なんぢ等、只今（ただいま）禁獄流罪（るざい）にも及び［今すぐ獄に入れられたり流されたりすることになり］、わが身もいかなる逆鱗（げきりん）にかあづからんずらん［どんなお叱りをこうむることだろう］。」となげくところに、主上いとどしくよるのおとどを［天皇はふだんより早くご寝所を］出（い）でさせ給（たま）ひもあへず［お出になるとすぐに］、かしこへ行幸なつて紅葉を叡覧（えいらん）なるに、なかりければ、「①いかに。」と御たづねあるに、蔵人奏すべき方はなし［天皇に申し上げようがない］。ありのままに奏聞（そうもん）す［申し上げた］。天気［天皇のご機嫌］ことに御心よげに

うちゑませ給ひて、「②林間煖酒焼紅葉といふ詩の心をば、それらにはたが（だれが）③をしへけるぞや。やさしうも（風流に）仕（つかまつ）りけるものかな。」とて、④かへつて御感（ぎょかん）に預（あづか）つしうへは、あへて勅勘（ちょくかん）なかりけり。（特に天皇のおとがめはなかった）

（「平家物語」より）

（注）※蔵人（くらんど）……天皇のそばに仕える役人。

問1　①いかにとありますが、高倉天皇がこのように尋ねた理由を簡潔に書きなさい。

問2　②林間煖酒焼紅葉とありますが、これは「林間に酒を煖（あたた）めて紅葉を焼（た）く」とよみます。この部分に返り点を補ったものとして適切なものを、次のア〜エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　林間煖レ酒焼二紅葉一
イ　林間煖二酒一焼二紅葉一
ウ　林間煖レ酒焼レ紅葉
エ　林間一煖二酒焼レ紅葉

問3　③をしへけるとありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直し、ひらがなで書きなさい。

問4　④かへつて御感に預つしうへは「かえっておほめにあずかったうえに」という意味ですが、天皇がほめた理由として最も適切なものを、次のア〜エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　紅葉を焼いて酒をあたためた下役人たちの行為が、漢詩を思い起こさせるものであったから。
イ　天皇の問いかけに、ありのままの事実を伝えた蔵人の行為が、まじめだと判断したから。
ウ　自分たちの失敗を天皇に伝えた下役人の行為が、職務に忠実だと考えたから。
エ　下役人たちの失態をかばった蔵人の行為が、機転のきいたふるまいに思われたから。

【埼玉県】

Step 2・3

二 次の文章は、『平家物語』「敦盛最期」の一場面である。これを読んで、後の各問いに答えなさい。

〈この場面までのあらすじ〉
各地で挙兵し攻め上る源氏の軍勢に追われて都を捨てた平家は、須磨の一の谷に集結するが、源義経率いる軍勢の奇襲で総崩れとなる。源氏の武将、熊谷次郎直実は、海上の舟に逃れようとする平家の武将（平敦盛）を見つけ、引き返すよう呼びかける。

汀に〔（敦盛が）波打ちぎわに〕うちあがらんとするところに、おしならべてむずとくんでどうどおち、とつて①おさへて〔討ち取ろうと〕頸をかかんと甲を②おしあふのけて見ければ、年十六七ばかりなるが、薄化粧して、かね黒なり〔歯を黒く染めている〕。我子の小次郎が③よはひ〔年齢〕程にて、容顔まことに美麗なりければ、④いづくに刀を立つべしともおぼえず。「そもそもいかなる人にてましまし候ふぞ〔いらっしゃいますか〕。名のらせ給へ。たすけ参らせん」と申せば、「なんぢはたそ」と問ひ給ふ。「物その者で候はねども〔たいした者ではございませんが〕、武蔵国住人、熊谷次郎直実」と名のり申す。「さては、なんぢにあうては名のるまじいぞ〔そういうことなら、お前に対しては名のる必要もない〕。なんぢがためにはよい敵ぞ。名のらずとも頸をとつて人に問へ。見知らうずるぞ〔（自分を）見知っていることだろうよ〕」とぞ宣ひける。熊谷、「⑤あつぱれ、大将軍や。此人一人うち奉つたりとも〔討ち申し上げたとしても〕、まくべきいくさに勝つべきやうもなし。又うち奉らずとも、勝つべきいくさにまくる事もよもあらじ〔まさかあるまい〕。小次郎がうす手負うたるをだに〔軽傷を負っているのさえ〕、直実は心苦しうこそ思ふに〔つらく思っているのに〕、此殿の父、うたれぬ〔討ち取られたと〕と聞いて、いか計かなげき給はんずらん〔嘆かれることだろう〕。⑥あはれたすけ奉らばや〔ああ、お助け申し上げたい〕」と思ひて、うしろをきつと見ければ、土肥、梶原〔（源氏の武将の）土肥実平、梶原景時〕五十騎ばかりでつづいたり。

（『新編　日本古典文学全集』より）

Step 2

(1) 「平家物語」の作品の種類として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号を書きなさい。

ア 和歌　イ 古典落語　ウ 日記　エ 軍記物語

Step 2

(2) ――線部①「おさへて」、③「よはひ」、④「いづく」を、現代仮名遣いに直して、ひらがなで書きなさい。

①

③

④

Step 2

(3) 本文中に擬態語が三つ使われている。そのうち二つを本文中から抜き出して書きなさい。

Step 3

(4) ――線部②「おしあふのけて」の主語にあたるものを、次のア～エから一つ選び、記号を書きなさい。

ア 敦盛　イ 直実　ウ 此殿の父　エ 小次郎

Step 3

(5) 直実が初めて間近に見た敦盛の様子が書かれている部分を本文中から二十字以上二十五字以内でさがし、最初の三字を書きなさい。

Step 3

(6) 本文中には直実と敦盛の言った言葉として「　」でくくるべきところがそれぞれ一カ所ずつある。その言葉を本文中からさがし、最初と最後の三字を書きなさい。

直実　〜
敦盛　〜

Step 3

(7) 直実が――線部⑤「あつぱれ、大将軍や」と思った理由として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号を書きなさい。

ア　今にも討ち取られそうなのに、平家の武将が正々堂々とした態度で受け答えをしたから。
イ　この平家の武将が敦盛だということが分かり、大きな手柄をあげられると喜んだから。
ウ　平家の武将が名乗らなかったので、自分が大将軍であると言って失礼をとがめようと思ったから。
エ　今にも討ち取られそうなのに、そのことが分かっていない平家の武将の未熟さを感じたから。

Step 3

(8) ――線部⑥「あはれたすけ奉らばや」のときの直実の考えとして適切なものを次のア～エから二つ選び、記号を書きなさい。

ア 土肥実平と梶原景時の軍勢が迫り、このままではこの方が討ち取られてしまう。
イ 小次郎と同じほど若いうえに、化粧までしているこの方を討ち取るのは自分にとって恥だ。
ウ 自分は小次郎が軽傷を負っただけでもつらいのに、この方の父親がひどく嘆かれることだろう。
エ 今ここでこの方を討ち取っても討ち取らなくても、戦いの勝敗に大きな影響はない。

【長野県】

〈Note〉

第二十四講　古文の読解⑦

Step 1

一　次の文章を読んで、後の㈠～㈣の問いに答えなさい。

城陸奥守泰盛（じやうのむつのかみやすもり）は、Aさうなき馬乗りなりけり。馬を引き出（いだ）させけるに、足をそろへて閾（しきみ）をゆらりと越ゆるを見ては、「是（これ）は勇める馬なり。」とて、鞍（くら）を置きかへさせけり。又、足を伸べて閾に蹴（け）あてぬれば、「是は鈍くして、あやまちあるべし（あるにちがいない）。」とて、B乗らざりけり。

道を知らざらん人（その道を極めていない人）、かばかり（これほど）［　　］なんや（だろうか）。

（「徒然草」より）

（注）城陸奥守泰盛……鎌倉時代の人。
閾……敷居（しきい）。
鞍……人を乗せるために馬の背に置く道具。

㈠　文中═「そろへて」を現代仮名遣いで書きなさい。

［　　　　］

(二) 文中A――「さうなき」は「並ぶ者がいないほど優れた」という意味になります。漢字を用いた場合の、この意味にふさわしい書き表し方として、次のア～エから最も適切なものを選びなさい。

ア 送無き　イ 想無き　ウ 早無き　エ 双無き

(三) 文中B――「乗らざりけり」とありますが、泰盛がこの馬に乗らなかったのは、この馬についてどのように判断したからですか、簡潔に書きなさい。

(四) この文章の最後の一文は、泰盛の行動を踏まえたまとめの文となっています。文中□に当てはまる語として、次のア～エから最も適切なものを選びなさい。

ア 慌て　イ 怒り　ウ 恐れ　エ 怠け

【群馬県】

Step 2・3

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

注(1)亀山殿（かめやまどの）建てられんとて、地を引かれけるに、大きなる蛇、数も知らず凝（こ）り集まりたる塚注(2)ありけり。この所の神なりといひて、ことのよしを
（お建てになろうとして、地ならしをなさったところ、／数えきれないほど集まっている／神である／事の次第を）

まうしければ、「①いかがあるべき」と勅問（ちょくもん）ありけるに、「古くよりこの地を占めたる物ならば、②さうなく掘り捨てられがたし」と
（お知らせしたところ、／上皇がお尋ねになったので、／この土地を居場所としているものならば、／むやみに掘り起こしてお捨てになることは難しいです。）

皆人まうされけるに、この大臣注(3)（おとど）一人、「王土にをらん蟲（むし）、皇居を建てられんに、何のたたりをかなすべき。鬼神注(4)はよこし注(5)まなし。
（その場にいた人々は皆返答いたされたが、／上皇が治める土地にいる生き物が、／お建てになる時に、／何の災いももたらすはずがありません。）

③とがむべからず。ただ皆掘り捨つべし」とまうされたりければ、塚をくづして、蛇をば大井河に流してけり。さらにたたりな
（（蛇は）決して責めるはずがありません。／掘り起こして捨てるべきです。／進言なさったので、／流してしまった。／まったく災いは起こら）

かりけり。
（なかった。）

（「徒然草（つれづれぐさ）」より）

注(1)　亀山殿……後嵯峨（ごさが）上皇が造営した宮殿。
注(2)　塚……土が小高く盛り上がっているところ。
注(3)　この大臣……亀山殿の建設の責任者。
注(4)　鬼神……本文一行目の「神」と同じ。
注(5)　よこしま……道理に外れた行い。

Step 2

問一 ══線部を現代かなづかいに直して書け。

Step 2

問二 ――線部①について、上皇はどういうことを尋ねているのか。最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア 蛇をどのように扱えばよいのかということ。
イ どうして蛇が集まっているのかということ。
ウ どれくらいの数の蛇がいるのかということ。
エ どのような姿形の蛇であるのかということ。

Step 3

問三 ――線部②について、人々がこのように言った理由を説明した次の文中の空欄にあてはまる内容を、本文中（現代語訳は含まない）から［1］は**五字**で、［2］は**三字**でそれぞれ抜き出して書け。

蛇は、「［1］」であり、むやみに掘って捨てるようなことをすれば、「［2］」があると考えたから。

1 □□□□□

2 □□□

Step 3
問四　――線部③について、「この大臣」がこのように言ったのはなぜか。解答欄に合う形で二十字以内の現代語で書け。

□ことは当然の行いであり、その結果として塚を壊されたとしても蛇がそれを責めるのは道理に外れるから。

Step 3
問五　本文において「この大臣」はどういう人物として描かれているか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書け。

ア　神を敬う心を持たずに信心深い人々を見下す無礼な人物。
イ　自らの危険を顧みず人々のために行動できる勇敢な人物。
ウ　筋の通った話で周囲を納得させ任務を果たす賢明な人物。
エ　他者の忠告を無視して自分の考えを押し通す強引な人物。

【長崎県】

〈Note〉

第二十五講　漢文の読解①

Step 1

一　次の文章を読んで、後の㈠～㈢の問いに答えなさい。

楚人有渉江者。其剣自舟中墜於水。遽刻其舟曰、「是吾剣之所従墜。」
舟止。従其所刻者、入水求之。舟已行矣。而剣不行。求剣若此、不亦惑乎。

（「呂氏春秋」より）

書き下し文

楚人に江を渉る者有り。其の剣舟中より水に墜つ。遽かに其の舟に刻みて曰はく、「是れ吾が剣の従りて墜ちし所なり。」と。舟止まる。其の刻みし所の者より、水に入りて之を求む。舟は已に行けり。而も剣は行かず。剣を求むること此くのごときは、亦惑ひならずや。

（注）楚……古代中国の国名。
遽……大急ぎで。
所従墜……落ちた場所。
所刻者……目印を付けた箇所。
而……しかし。

若此……このようなやり方をすること。

惑……愚かである。

(一) 文中＝＝「刻ミテ其ノ舟ニ」に、書き下し文の読み方になるように返り点を書きなさい。

刻ミテ　其ノ　舟ニ

(二) 文中――「求ムルコトレ剣ヲ若キハレ此クノ」とは、どのようなことを指していますか、次のア～エから最も適切なものを選びなさい。

ア　水の中に剣を落としたのに、落とした本人ではなく、目印を付けた別の人が剣を探すこと。

イ　舟は移動してしまったのに、その舟に付けた目印を頼りにして、水の中に落とした剣を探すこと。

ウ　水に投げ入れた目印が流されてしまったのに、そのことに気づかないまま、落とした剣を探すこと。

エ　すぐに舟から飛び込んだのに、目印が何であったかを忘れてしまい、勘を頼りに落とした剣を探すこと。

㈢　この文章の中で、楚人の行動はどのようなことのたとえになっていると考えられますか、次のア～エから最も適切なものを選びなさい。

ア　困ったことがあっても、何も対策を立てないでいること。
イ　他人に責任をとらせ、自分は何もしないままでいること。
ウ　遠くばかり見ていて、身近なもののよさに気づかないこと。
エ　古い習慣にこだわり、時の流れについていっていないこと。

□

【群馬県】

二　次の文章Ⅰ、文章Ⅱを読んで、あとの問いに答えなさい。文章Ⅱは、文章Ⅰのもとになった漢文である。

文章Ⅰ

（李広は弓の名人で、以前、勇猛な虎をたった一矢で射止めたことがある。）

（李広）（李広は）また注1冥山の陽（南側で狩りをした）に猟す。また［①］、矢を没して羽を飲む（矢は羽根の部分まで深く突き刺さった）。進みて（近寄って）これをみるにすなはち（なんと）石なり。その形、虎に類す（似ていた）。
退きてさらに（いったん離れてもう一度）射るに、注2鏃破れ（くだけ）注3幹折れて石は傷つかず。
余、かつてもつて（私は、以前にこのことについて）注4揚子雲に問ふ。子雲（揚子雲）曰はく、「至誠あれば、すなはち（そのときには）注5金石ために開く（至誠のために割れる）。」と。

文章Ⅱ

（李広）復猟二於冥山之陽一。又見二臥虎一射レ之、没レ矢飲レ羽。進而視レ之乃石也。其形、類レ虎。
退而更射、鏃破レ幹折レ而石不レ傷。
余、嘗以問二揚子雲一。子雲曰、「至誠、則金石為開。」

（「西京雑記」より）

注1　山の名。
注2　矢の先端のとがった部分。
注3　矢の先端と羽根を除く棒状の部分。
注4　中国古代の学者。
注5　金属や石のような硬いもの。
注6　寝そべっている虎。

Step 2

1　文章Ⅱの「曰（いハク）」の読み方を、現代仮名遣いに直してすべてひらがなで書きなさい。

Step 3

2　文章Ⅰの ① には、文章Ⅱの「見（み）二臥（が）虎（こヲ）一射（ルニ）レ之（これヲ）」を漢字仮名交じりの文にしたものが入る。その文として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア　臥虎を射るにこれを見
イ　臥虎を見これを射るに
ウ　これを射るに臥虎を見
エ　これを見臥虎を射るに
オ　見臥虎を射るにこれを

Step 3

3　次の会話は、文章Ⅰについて、授業で話し合ったときの内容の一部である。あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

Aさん「矢を射て近寄ってみたら、[②]だったとは驚きだね。」
Bさん「しかも、矢が深く突き刺さっていたなんてね。」
Aさん「でも、二度目の矢は刺さらなかったね。なぜかな。」
Cさん「射る前から[②]だと分かっていたからだと思う。常識的に考えたら矢を深く突き刺すことなどできるわけがないよね。」
Bさん「揚子雲という人は『至誠あれば、すなはち金石ために開く。』と言っているね。」
Cさん「漢和辞典で意味を調べたら、『至誠』には『このうえなく誠実な心。まごころ。』とあるよ。」
Aさん「なるほど。心から虎だと信じる、誠実で純粋な気持ちがあったからこそだね。」

(1)　[②]にあてはまる言葉として最も適当なものを、文章Ⅰから**一字**でそのまま書き抜きなさい。

(2)　「至誠あれば、すなはち金石ために開く。」とあるが、揚子雲は李広の体験から、人間の生き方や考え方に関してどのようなことを言おうとしているか。右の会話の内容を踏まえて、**四十字以内**で書きなさい。

【福島県】

第二十六講　漢文の読解②

Step 1

一　次の【漢詩】を読んで、あとの(1)～(3)に答えなさい。

【漢詩】

秋思（しゅうし）　　張籍（ちょうせき）

洛陽城裏（らくようじょうり）秋風（しゅうふう）を見る
家書を作らんと欲（ほっ）して意（おも）ひ万重（ばんちょう）
復（ま）た恐（おそ）る怱怱（そうそう）として説きて尽くさざるを
行人（こうじん）発するに臨みて又封を開く

洛(注1)陽城裏見ル二秋風ヲ一
欲シテレ作ラント二家書ヲ一意ヒ万重
復タ恐ル怱(注2)怱トシテ説(注3)キテ不ルヲレ尽クサ
行人臨ミテレ発スルニ又開クレ封ヲ

（注1）洛陽城裏……洛陽の町中。洛陽は河南（かなん）省の都。筆者は故郷を離れて洛陽にいる。

（注２）怱怱……慌ただしい様子。
（注３）説……言う。

(1) ある生徒が、【漢詩】の内容について次のようにまとめました。[A]、[B]に入る適切な内容を、[A]は**十字以内**で、[B]は**十五字以内**で、それぞれ書きなさい。

洛陽の町中に、秋風が吹く頃になった。
[A]を書こうとするが、さまざまな思いが重なる。
慌ただしく書いたので、[B]のではないかとまた心配になり、手紙を託す旅人が出発するとき、もう一度手紙の封を開いてしまう。

A

B

(2) 行人臨ミテ発スルニ又開ク封ヲに、書き下し文を参考にして、**返り点**をつけなさい。

行　人　臨ミテ　発スルニ　又　開ク　封ヲ

(3) 【漢詩】にこめられた思いとして最も適切なものを、次の１～４の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

１　惜別　　２　博愛　　３　悔恨　　４　望郷

【青森県】

Step 2・3

二

次の李白（りはく）の漢詩を読んで、1～5の問いに答えなさい。

【Ⅰ】　＊汪倫（おうりん）に贈る

李白舟に乗つて＊将（まさ）に行かんと欲す
忽（たちま）ち聞く岸上踏歌＊の声
＊桃花潭（たん）水深さ千尺
及ばず汪倫我を送るの情に

李白乗舟将欲行
忽チ聞ク岸上踏歌ノ声
桃花潭水深サ千尺
不レ及バ汪倫送ルノレ我ヲ情ニ

【注】
＊汪倫……李白の友人の名前
＊将に……今にも
＊踏歌……足で地を踏んで調子を取って歌うこと　またその歌
＊桃花潭……川の名前　潭は水が深くよどむところ

【Ⅱ】 黄鶴楼（くわうかくろう）にて孟浩然（まうかうねん）の広陵に之（ゆ）くを送る

故人西のかた黄鶴楼を辞し
煙花三月揚州（やうしう）に下る
孤帆の遠影碧空（へきくう）に尽き
惟（た）だ見る長江の天際に流るるを

故人西辞黄鶴楼
煙花三月下揚州
孤帆遠影碧空尽
惟見長江天際流

【注】
＊黄鶴楼……長江のほとりにあった高い建物
＊揚州……長江下流の都市　広陵のこと
＊惟……「唯」と表記される場合もある
＊天際……空の果て

Step 2

1 【Ⅰ】【Ⅱ】に共通する漢詩の形式を、**漢字四字**で書きなさい。

Step 2

2　【Ⅰ】の李白乗舟将欲行に、返り点と送り仮名を補うとき、書き下し文を参考にして、解答欄の□に返り点を、（　）に送り仮名を書きなさい。

李　白　乗□（　）舟（　）将ニ　欲□（　）行（　）

Step 2

3　【Ⅱ】の詩の中で「別れを告げる」の意味で用いられている**漢字一字**を、抜き書きしなさい。

□

Step 3

4　【Ⅰ】【Ⅱ】の書き下し文に共通して見られる表現技法として適するものを、次のア〜エから一つ選んで記号を書きなさい。

ア　対句法　　イ　反復法　　ウ　倒置法　　エ　体言止め

□

Step 3

5　次の表は【Ⅰ】【Ⅱ】の漢詩を比較して、まとめたものである。後の(1)〜(3)の問いに答えなさい。

項目＼題	汪倫に贈る	黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る
立場	李白が〔　a　〕立場	李白が〔　b　〕立場
情景	舟が出ようとすると、岸辺から急に、汪倫の声かけで集まった村人たちの歌声が聞こえてくる	花咲き霞(かすみ)たなびく三月、友の乗った一艘(そう)の舟の帆が〔　c　〕、青空の中に消えていく
感動の中心	桃花潭の水深に比べて〔　d　〕に対する感謝の思い	長江の広がりと、それによって際立つ言いようのない孤独感

(1)　【Ⅰ】【Ⅱ】の漢詩は、ともに「送別」をテーマによんだものである。作者の立場の違いが明確になるように、表の〔　a　〕〔　b　〕に適する語句を、それぞれ**五字以内**で書きなさい。

a

b

(2) 表の〔 c 〕に適する内容を、**十字以内**で書きなさい。

(3) 表の〔 d 〕に適する内容を、作者が何に感動したかが分かるように、**十五字以内**で書きなさい。

【秋田県】

〈*Note*〉

第二十七講　課題作文

Step 1

一　下のグラフA、Bは、小学校六年生と中学校三年生を対象に、平成十五年と平成二十二年に行った全国的な調査の中で、朝食について調べた結果を表したものです。

第一段落には、これら二つのグラフを見て気づいたことを書き、第二段落には、第一段落の内容をふまえて、「朝食を食べること」についてのあなたの考えや体験を書きなさい。

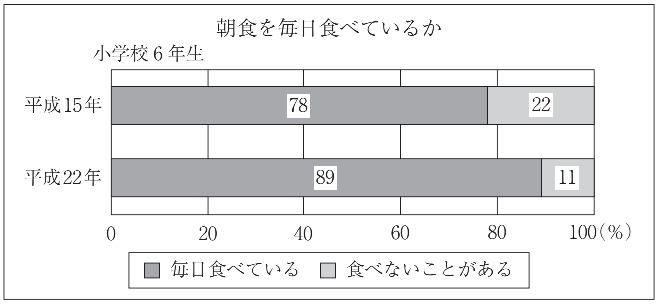
ただし、次の《注意》に従って書くこと。

《注意》

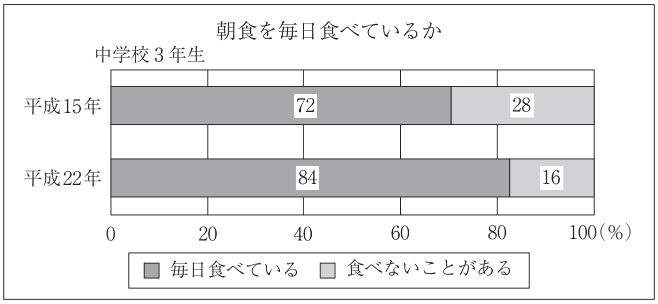
◇「題名」は書かないこと。
◇二段落構成とすること。
◇二〇〇字以上、二四〇字以内で書くこと。
◇文字は、正しく、整えて書くこと。
◇グラフの数値を使う場合は、次の例にならって書くこと。

例　三〇%　五六%

グラフA



グラフB



(「平成22年度　全国学力・学習状況調査」から作成)

【山形県】

240 200 100

Step 2

二　現代はさまざまな面で変化の著しい時代だといわれています。そのような現代において、いつまでも変わらないでほしいとあなたが思うものは何ですか。次の条件にしたがって、あとの原稿用紙に**二百字程度**の文章を書きなさい。

題名や氏名は書かないで、本文から書き始めること。

条件１　最初に、変わらないでほしいと思うものは何かを書くこと。

条件２　次に、なぜそれが変わらないでほしいと思うのかを書くこと。

100

220	200	

【大阪府】

Step 3

三 次の文章をふまえて、人と人とのつながりや出会いについてのあなたの考えを、あとの〈注意〉にしたがって書きなさい。

早起き通勤を始めると、ぼくの生活の中に「ちょっとうれしい」出会いが増えるようになりました。（中略）
まずは、守衛(注)さん。
始業時間ギリギリに行くと、守衛さんと言葉を交わすなんてまずあり得ません。でも、そこはまだ人の少ない時間帯。自然に、あいさつを交わすようになります。
すると、ぼくの気持ちに変化が起こり始めました。
いままで「守衛さん」と呼んでいたその人を、ぼくは守衛さんではなく、「ぼくの知り合いの山田(やまだ)さん」と思うようになったのです。会社の「守衛」「社員」という立場を超えて、ぼくは一個人として、山田さんを見るようになりました。山田さんも、ぼくのことを、「一社員」から「松山(まつやま)さん」と思ってくれるようになりました。
だからって、大きく何かが変わるわけではないのですが、でも着実に「ちょっとうれしい」ことなのです。

（松山真之助(しんのすけ)「30分の朝読書で人生は変わる」より。一部省略等がある。）

（注）守衛＝役所や会社などで、人の出入りを監視し、建物を警備する仕事。ここでは、その役の人。

〈注意〉
1 筆者がどんなことを「出会い」と捉えているのかを簡潔にまとめたうえで、自分の体験や見聞をまじえて書くこと。
2 解答欄の原稿用紙には「題名」や「氏名」は書かないで、本文だけを縦書きで書くこと。
3 書き出しは一マス空け、段落は変えないこと。
4 六行以上、七行以内にまとめて書くこと。

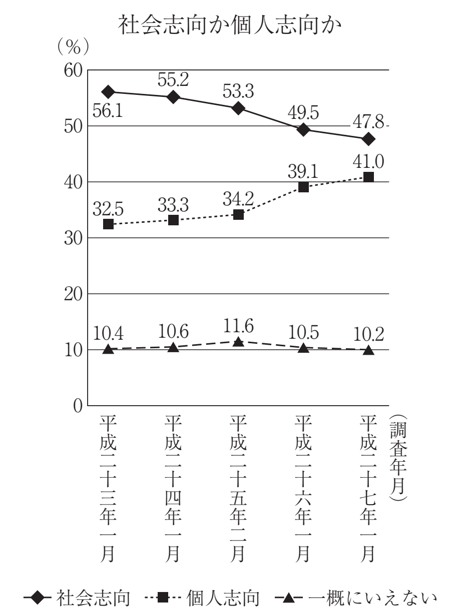
【熊本県】

7　6

第二十八講　資料作文

Step 1

一　次のグラフは、二十歳以上の国民を対象に、「国や社会のことにもっと目を向けるべきだ」という意見（社会志向）と、「個人生活の充実をもっと重視すべきだ」という意見（個人志向）のどちらの意見に近いかを聞いた結果の推移を表している。このグラフを見て**気づいたことと、**気づいたことを踏まえて「社会志向」「個人志向」「一概に（どちらかの意見に近いかをまとめては）いえない」**のどの立場であるかを明確にして、あなたの考え**をあとの**条件**に従って書きなさい。



（内閣府「平成26年度社会意識に関する世論調査」より作成）

条件

1　**二段落構成**とし、前段ではグラフを見て**気づいたこと**を書き、後段では前段を踏まえて「社会志向」「個人志向」「一概にいえない」**のどの立場であるか**を明確にして、**あなたの考え**を書くこと。

2　全体を百五十字以上、二百字以内でまとめること。
3　氏名は書かないで、本文から書き始めること。
4　原稿用紙の使い方に従って、文字や仮名遣いなどを正しく書き、漢字を適切に使うこと。

150
200

【福島県】

Step 2

二　あなたのクラスでは、国語の授業で、次の［　］の中の文章が紹介された。

> 私たちのまわりには、便利な道具がたくさんあります。
> 「自動車ができて、移動時間が短くなった。」
> 「リモコンが発明され、遠くからでも操作ができるようになった。」
> 「携帯電話で、いつでもどこでも話ができるようになった。」
> このまま便利な道具が増えていくことで、私たちの生活はさらに豊かになっていくのでしょうか。

この文章について感想を述べ合ったところ、**「便利な道具があるからこそ、豊かな生活を送ることができる。」**という発言をした人がいた。そこでこの発言について、それぞれが賛成、反対の立場に立って意見を述べることになった。あなたならどちらの立場で、どのような意見を述べるか。そう考える理由も含めて、あなたの意見を書きなさい。ただし、次の条件1、2にしたがうこと。

条件1　一マス目から書き始め、段落は設けないこと。
条件2　字数は、百五十字以上、百八十字以内とすること。

180

150

【静岡県】

Step 3

三 あなたのクラスで、「人を支えることや人に支えられることの意味」ということについて話し合いをすることになりました。あなたならどのような意見を発表しますか。あなたの意見を、そう考える理由がよくわかるように、体験や具体例を示しながら、次の〔注意〕に従って、解答欄に、二百五十字程度で書きなさい。

〔注意〕

一　段落や構成に注意して百五十字（六行）以上書くこと。

二　原稿用紙の正しい使い方に従って書くこと。ただし、部分的な書き直しや書き加えなどをするときは、必ずしも「ますめ」にとらわれなくてよい。

三　**題名や氏名は書かないで、**本文から書き始めること。また、本文の中にも氏名や在学（出身）校名は書かないこと。

150

【香川県】

250

第一講　文法

Step 1

一
解答　ウ
解説　修飾語と被修飾語は続けて読んで一つのまとまりのある文となる。よくどうするのかということを述べた部分にかかる。

二
解答　ア
解説　「ない」をつけると直前の音が「エ段」の音になる下一段活用の動詞と、「ア段」の音になる五段活用の動詞を区別する。

三
解答　1
解説　主語を表し、「が」に置きかえることができる「の」が二つある。下の名詞につなげて連体修飾語をつくる「の」や、「こと」と言いかえられ、体言のかわりをする「の」と区別する。

四

解答
イ

解説
手段や方法を表す格助詞である。アは、言い切りの形が「〜だ」となる形容動詞の活用語尾。ウは、推定を表す助動詞「ようだ」の一部。エは接続助詞「て」の音が濁ったもの。

Step 2

五

解答
(2)

解説
(2)は「聞く」の謙譲語で、語り手自身の動作に用いる。(1)は「見る」、(3)は「する」、(4)は「来る」の尊敬語で、相手の動作に用いる。

六

解答
ウ・オ

解説
「いただく」「申し上げる」は、自分や身内の言動に対して用いる謙譲語。「お客さん」の言動に対しては、「召し上がる」「おっしゃる」などの尊敬語を用いる。

七

解答
イ

解説
「拝見する」は謙譲語。先生に見てもらう場合には、「ご覧ください」などの尊敬語を使う。

八
解答
エ
解説
「母」にとって、「先生」は目上の人である。「申し上げる」は、「言う」の謙譲語。

Step 3

九
解答
イ
解説
副詞の「ゆっくり」が動詞（用言）の「歩く」を修飾している。

十
解答
一、ウ　二、イ
解説
一、活用しない自立語で、用言を修飾する。「…ように」というたとえの語と呼応することにも着目する。
二、「高く」は、山がどのようにそびえているかを説明した文節で、「そびえる」という述語にかかっている。

十二

解答

エ

解説

お世話に「なる」に、「いる」がついて、お世話になる状態が続いているという意味を添えている。

第二講　論理的文章の読解①

Step 1

一

解答

(一) A、うば(われて)　B、とうさい　C、届(かない)　D、認識　(二) イ　(三) 多くの人が関心をもって話題にするようになること。
(同意可)　(四) 人間の知的な活動の一面をまねしている技術　(五) われわれは　(六) 未知のことにひきつけられる思い（15字）（同意可）
(七) ウ

解説

(二) 「音便」は、後に来る言葉によって、音の一部がもとの音から違うものになること。「呼ぶ」の場合、「た（だ）」に続くとき、「呼んだ」と「ん」の音になる。アは「乗った」、イは「積んだ」、ウは「頂いた」となる。エは「預けた」となるので音便にはならない。
(三) 「人間の能力を超えるのではないか」と言われ、プロ棋士との将棋の対戦が注目されていることなどから考える。
(四) ②は、将棋をすることに限定された知能であり、③は、一つの能力に限定されず、「人間のように考えるコンピュータ」である。「人間の持つ知能は深遠で」あることと対比させ、②の人工知能について、「人間の…『人工知能』と呼ばれる」と述べていることに着目する。
(五) 「人間の持つ知能」の原理を指す。「自分たちの脳がどういう仕組みで…わかってない」と述べた後で、「われわれは、なぜ…行動することができるのか」「なぜ…学ぶことができるのか」ということを、「根本原理」として示している。
(六) 「その二つの『ワクワク』」が指す内容に着目する。一つは、春香さんの発言から、「人間の知能がまだまだ謎ばかりだ」というように「驚くような気持ち」、もう一つは、陽一さんの発言から、「新しいものが出てくる話を聞くとワクワクする」というように「楽しみにしている」気持ちをおさえてまとめる。

(七)「人工知能が…人間の能力を超えるのではないか」と騒がれていることに対して、「実は、人工知能は…まだできていない」「多くの人が誤解している」と指摘している。その上で、現在の「人工知能」の技術と人間の知能との違いや、人間の知能の原理がまだよくわかっていないという現状などを述べている。

Step 2・3

二

解答

問一、(まかせて)任せて　(けっこう)結構　問二、人間としての行動の規範　問三、生分解性プラスチック・通信妨害電波・(クルマの)速度制御装置　問四、人が配慮する必要のない状態。(14字)(同意可)　問五、道徳的な判断力が衰え、社会が荒廃してしまう危なさ。(25字)(同意可)

解説

問二、「道徳と言えば堅苦しいが…のことで」という形で、「道徳」をわかりやすく言い換えている。

問三、前に「それらによって」とあることに着目する。愛知万博で二酸化炭素の排出を削減するために使われた技術、映画館や学校で静寂を守るために使われる技術、クルマがスピード違反をしなくて済むようにする技術が、「それら」の指すものである。

問四、自分の判断でゴミを捨てないようにしたり、映画館や学校でケータイを使わないようにしたり、クルマのスピード違反をしないようにしたりするというような「人に迷惑をかけないための配慮」が、「技術」により不必要な状態である。

問五、「…だろう」と将来について予測している文に着目する。「技術が道徳の代行をするうちに、私たちが生来的に持ち…衰えていくことにならないだろうか」「人々の道徳心を涵養し…であり続けねば、社会は荒廃してしまうだろう」とある。

第三講　論理的文章の読解②

Step 1

一

解答

1、D　2、ウ　3、木の大きさと七千年という歳月（14字）（同意可）　4、種類のちがういろいろな落葉や、広葉樹に寄ってきた虫の死骸や鳥のおとす糞が、縄文杉のまわりの土を育てている点。（54字）（同意可）

解説

1、上の漢字が下の漢字を修飾している熟語と、同意の漢字の組み合わせの熟語を区別する。

2、「さまざまの広葉樹」が着生し、虫や鳥がやってくると述べたあとで、「たしか二十種類ばかりの着生木が、縄文杉を足場にして育っている」「縄文杉と着生木もまるでそれだけでもひとつの森のように共生している」とある。

3、「あの木の下」での「一夜」を「縄文杉の下での夕方と夜と朝の時間」と言い換え、「まるで森だなあ」という思いよりも、「むしろ木の大きさに圧倒され、七千年という歳月に圧倒されていた」と述べている。

4、「着生木との共生が…生かしつづけているのではないかという気がする」としたあと、くわしく説明している。「落葉」「虫たち」「鳥たち」がもたらすものをおさえる。

Step 2・3

二

解答

〔問1〕a（または、c）〔問2〕(1) 柳〔など〕(2) Ⅲ　(3) エ　〔問3〕生物多様性とそれがもたらす自然の恵みが、急速に失われて

いっている状況。（35字）（同意可）〔問4〕ア〔問5〕イ〔問6〕生命をいただいているという思いをたいせつにすることにつながり、身近な自然や地球の未来に対する関心を保っていくことに結びついていくから。（67字）（同意可）
〔問7〕（例）「おはよう」は、一日の始まりのあいさつの言葉である。朝学校に行き、友だちと「おはよう」という一言を交わすだけで、今日もみんなと一緒の一日が始まるという気になり、やる気がわいてくる。さらに、その日の天気や宿題などについて会話が始まるきっかけにもなる。このように、「おはよう」は、朝そこに集まった人たちの心を一瞬にして結びつける力や、一日を前向きに過ごそうという気持ちにさせてくれる力をもつ言葉だと思う。（10行）

解説

〔問1〕「恵み」は活用のない自立語で、主語にすることができる名詞。cは、昔という意味の名詞として使われることがある。
〔問2〕(1) 前のⅢの主語を指している。(2) 文中に係助詞の「ぞ・なむ(ん)・や・か」があると、文末は連体形で結ばれ、「こそ」があると已然形で結ばれる。(3) 桃の花が咲きはじめる様子や、柳が芽ぶく様子を「をかし」とし、芽がひろがってしまっているのは「うたて」としている。
〔問3〕「魚や貝、あるいは澄んだ水や空気」があり、「木々だって…またすぐに生えてくる」という、「『生物多様性』とそれがもたらす自然の恵み」は「あってあたりまえ」だと思っていたが、「身近なところからも…失われていっている」という状況になっている。
〔問4〕「私たちが口にしているもの」の多くは「自然の恵み」であるので、四つの「サービス」の説明から、「食料」をもたらしてくれるサービスをおさえる。
〔問5〕「自然の恵みに感謝し、あなたの生命をありがたくいただきます」という思いが込められずに使われている、ということ。
〔問6〕「自然の恵みに感謝し…たいせつにすること」は「私たちが身近な…大事な一歩となるように思われる」ということが、「よい方向に向かうのではないか」と考える理由となっている。

口語訳

三月三日は、うららかにのどかに日が照っている。桃の花が今咲きはじめる。柳などが趣があるのはなおさらである。それもまだ、芽ぶいて十分にひろがらないのが趣がある。ひろがっていては不愉快に見えることだ。

第四講　論理的文章の読解③

Step 1

一

解答

(一) 1、しさ　2、流域　3、似(て)　4、せんれつ　5、さんぶつ　6、散(る)　7、移(り)　(二) 主体　(三) 手がかり　(四) 2　(五) 丸い輪郭線　(六) A、視覚以外　B、想像上の線　(七) 星の位置で自己の位置を確認せざるを得ない状況。(23字)(同意可)　(八) 3

解説

(二)「客体」は、人が認識する対象になるものを意味する。その対義語は、「客体」を認識するその人自身を表す語である。

(三)「端緒」は、ものごとのはじまり、ものごとを判断するいとぐち、という意味。人類が現在も、星の位置を見定めるために「星座という架空の形態」を利用していることに着目する。

(四)「ここでいう想像力」は、「夢想や幻想の力」ではなく、「あらゆる現実について…統一する能力」であり、「外から与えられる無数の感覚刺激を…準備をする力」であると述べている。

(五) 球体を描く線で、現実にはない線を指している。

(六) 古代人が「あの星くずを見てその間を想像上の線でつなぎ…おびただしい星座の絵を描いた」ということを、「驚くべきこと」としている。それが驚くべきことだという理由については、「地上にある対象」のように「別の感覚能力の助けを借りる」ことをしないで、星座の絵を描いたからとしている。Aには、「見る」という感覚能力ではない「別の感覚能力」を表す言葉が入る。Bには、星座の絵を描いた線を表す言葉が入る。

(七) 地上や洋上に目印が何もないという状態で、位置を確認する方法を考える。

(八)「最初の知的認識を生んだ目の活動は、ほかならぬあの天空を見ることから始まったと考えてよいだろう」と述べている。

Step 2・3

二

解答

問一、A、エ　B、イ　C、ア　D、エ　問二、③強いる　⑥満たす　問三、ホビーとしての手仕事・試作品を造る仕事　問四、ウ
問五、a・b、ア　c、キ　問六、エ　問七、ア　問八、イ

解説

問一、A、「際」と書く。アは「細」、イは「災」、ウは「採」。B、「投」と書く。アは「刀」、ウは「討」、エは「登」。C、「益」と書く。イは「液」、ウは「易」、エは「駅」。D、「層」と書く。アは「走」、イは「創」、ウは「送」。

問二、動詞の終止形は最後がウ段の音になる。③に含まれている動詞は「強い」。⑥に含まれている動詞は「満たさ」。

問三、「一つは…ホビーとしての手仕事」「もう一つ重要なのは知的活動の延長としてなされる手仕事」とあり、あとの仕事は「すなわち…」ということばを使って言い換えられている。

問四、②には言うまでもなく、まちがいなくという意味のことばが入る。④には「緊張が現在の充実をもたらしている」ことを強調することばが入る。

問五、a・b、従来のもの造りでは、試作品の「完成が一連の知的活動の終着点である」としている。ここでの知的活動とは、作業過程を表している。c、現代のもの造りでは「試作品が設計の…目的が手段によって修正を迫られることも少なくない」とある。

問六、あとに「芸術は…愛好され」ることを、「芸術のホビー化」と表していることをおさえる。

問七、もの造りが愛好されることを、スポーツの興隆にたとえ、現代のスポーツでは試合が「ドラマにも似た起伏を見せ、試合ごとに完結した現在をかたちづくる」ことに着目する。また、大会ごとの勝負では「その時点における現在の完結」を見ることができ、名勝負に「充実」を感じているとある。

問八、「知的活動は宿命的に孤独な営み」であり、だからこそ「人は互いに有エキな刺激を受けやすい環境」、つまり、「相互に尊敬しあえる他者によって…刺激を与えあう人間関係」が必要だと述べている。

第五講　論理的文章の読解④

Step 1

一

解答

1、（異なるものの記号）d（活用の種類の記号）ア　2、エ　3、ウ　4、イ　5、(1)a、大海原　b、大自然　(2)c、ストレートに風流とかきれいなどと表現する（20字）（同意可）　d、間接的に美を表現する　6、自然の美を身の回りに再現して見立てを楽しむ(こと。)　7、エ

解説

1、「ない」をつけると、直前の音が「ア段」の音になるのが五段活用、「イ段」の音になるのが上一段活用、「エ段」の音になるのが下一段活用である。「来る」はカ行変格活用、「する」はサ行変格活用である。それぞれに「ない」をつけると、aは「見ない」、bは「用いない」、cは「浴びない」、dは「飾らない」となる。

2、Aでは、「枯山水」と「落語」という二つの例を並べて挙げている。Bでは、前の「金色」を「財」と言い換えて説明している。

3、「多岐」は、多方面に物事や道筋が分かれていることをいう。

4、アは、荒々しく、洗練されていないこと、イは、目で見える範囲のこと、ウは、野原に生えている草のこと、エは、身の程を考えない望みのことである。

5、(1)「枯山水」の見立てについて、「石は山を…表現する」と述べられている。また、「茶の湯」の見立てについて、「茶室という閉じられた住空間に…再現する」と述べられている。(2)「日本料理」を例に挙げて説明した後、「日本独自の見立てという美意識」についてまとめている。

6、12段落で、「季節の花を生け…食器で食事をする」という「衣食住」において、日本人が「粋」を求め続けてきたことを説明して

いる。「知恵を絞り、工夫を重ねて」と同じ意味を表す「心を砕いて」という表現に着目する。

7、⑬段落に「今、見立ての枠という…デザインなどに生かされ」と述べられている。

Step 2・3

二

解答

1、B　2、相手を思いやる気遣い　3、ウ　4、イ　5、a、相手や周囲の状況　b、なれなれしくしてはいけない相手には敬語を使った会話をし、親しくなるにつれてうち解けた言葉遣いや敬語を使わない会話をする（59字）（同意可）

6、（例）私や友人たちは、敬語を使うことが苦手で、先生や目上の人に対しても、友だちのような言葉遣いをしてしまうことがあります。また、相手の気持ちを考慮しないで、自分の言いたいことをそのまま言ってしまうこともよくあります。これは、相手に失礼なだけでなく、相手の気持ちを傷つけてしまうことにもなります。だから、私は、今後、相手がどういう立場の人か、こういう言い方をされたらどういうふうに思うかを考え、適切な敬語を使うとともに、人の気持ちを思いやる言葉遣いをすることに取り組んでいきたいと考えています。そうすることで、人との距離感をうまくコントロールし、相手の心に伝わる適切な言葉遣いができるようになると思います。（298字）

解説

1、活用のない自立語で、用言を修飾する副詞と、活用のある自立語で、言い切りの形が「～い」となる形容詞を区別する。

2、「言葉」以前に、「相手に…その気遣いや姿勢」を見つめ直すことが、「良い言葉遣い」を生み出すと述べている。「言葉」について説明したあとで、「言葉遣いに配慮することは…から生まれます」とし、言葉は「形」だが、「その元にある心遣い」が重要であるとまとめている。

4、「お洋服」という言い方は「服を敬って言っているのではなく、持ち主を敬っている表現」であり、「いらっしゃる」という言い方は「行くという行為ではなく、行為する人を敬っている表現」であることを表したことばが入る。

５、ａ、敬語表現の使い分けについて、「〝です・ます調〟の言葉遣いを…考えてタイミングを計る」としている。ｂ、「初対面の人には、まずは互いに敬語を使って会話します」とし、そして「親しくなるにつれて…と変化していきます」と述べている。

第六講　論理的文章の読解⑤

Step 1

一

解答

1、ウ　2、イ　3、ア　4、a、一対一の関係性　b、誰か他人が与えた物の役割、物の意味付け　5、存在が意識にのぼらないくらいに物と親密な関係になり、物の機能性を十分に発揮させるとともに、時間の経過につれてその物が秘めている様々な用途を発見していく（75字）（同意可）

解説

1、「用の美」は、「使用して見出される美しさ」があるという考え方であり、その考えには「単に美の新しい領域を開拓したということ」だけでなく、「様々な意味での生活の全体性の回復」ということが込められていると述べている。

2、「〜される」という、受け身の意味で使われている。アは可能、ウは尊敬、エは自発。

3、「意識にのぼって」いない、「忘れられている」と逆で、愛でる対象として認識している状態を考える。

4、「用の美」と反対の考え方を表している。aは、「物」と「用途」の関係に着目して、「一つの物が様々な用途を秘めていたり…同じ用途がいろんな物に解放されていたり」という関係と逆の関係をおさえる。bは、直前の文で、「自分と物との距離感をゼロから取り戻す」ために、「束縛されないで」としているものをおさえる。

5、「使う」ということは「時間の経過を念頭に置いている行為」であり、「発見の過程、プロセス」が「『使う』『使いこなす』ということ」であると述べている。また、「使いこなす」ということについて、「人と物との関係の親密さを表す」として、「物の機能性が本当に発揮されて…その存在が意識にのぼらないくらいに自分にフィットしている」と述べている。

Step 2・3

二

解答

〔問1〕ウ　〔問2〕繊維があらゆる方向にからみ合っているから・要らないごみ類が入っていないから（それぞれ同意可）〔問3〕ア
〔問4〕空気の湿気や風や石の重さや太陽の状態など　〔問5〕どんな植物からでも糸を紡ぎ、立っている木で簡単な織り機を作って、あらゆる生活必需品を作り出すこと。（49字）（同意可）〔問6〕エ

解説

〔問1〕「見方・考え方」を意味している。
〔問2〕「なぜこういうことになるのか…」から、「全身のしている仕事」であることによる効果、「またこういうことでもあった…」から、「腕を動かしながら…ごみ類を見分けている」ことによる効果をおさえる。
〔問3〕「コストダウン」が目的であるのに「費用がかかること」から、いいところがないことを意味する文脈になる。
〔問4〕紙を漉き、「水を切るには…石を置いて何日か放置する」「干す時には…天日で乾かす」という作業で、人間には「コントロールしきれないもの」に「身をゆだねている」と述べていることに着目する。
〔問5〕「一個の人間が自然に立ち向かうことで…ものを作り出す」という方法を、機織り職人の「手仕事」からまとめる。「紙を漉けばたいていのものは作れるだろう」に続いて、作業の内容をくわしく説明し、「自然とひとりの人間」が深くかかわる仕事であるとしている。
〔問6〕「手仕事とは何か」の説明で、「第二に」として、「自然力を征服することではなくて、自然の偶然性に身をゆだねること」であり、「自然の不規則性」を「個性」として取り込んでしまうと述べている。また「第三に」として、「一方ではおのれの全身と、もう一方では自然そのものと、深くかかわってする仕事」であると述べている。さらに「第四に」で、「作られたものの特徴」として、「機械製よりはるかに精巧で丈夫なもの」であり、「『手間』と『時間』」などの「贅沢なもの」が入っていることを挙げている。

第七講　論理的文章の読解⑥

Step 1

一

解答

問一、あ ふんいき　い 断片　問二、ウ　問三、近代の人間　問四、エ　問五、ウ　問六、乱読や乱談の内容が、意識下にある関心と偶然に結びつくことをおもしろいと感じ、新しい発見をすること。（49字）（同意可）

解説

問二、「こと」に言いかえられ、体言のかわりをする「の」。ア・エは「が」に言いかえられ、主語を示す。イは下の名詞につなげて連体修飾語を作る。

問三、「そのこと」は、「話すこと」が重要であることを指す。「学問のない人、本を読まない人は…軽蔑される」というように、話すことが軽んじられ、活字を読むことが「高級」であると考えられていたことをおさえる。

問四、「思考のだんぺん」を「めいめい」ふりまいていることから、いろいろなものが混じってまとまりのない様子を表す言葉を考える。

問五、「セレンディピティ」がおこることについて、「数人のものがクラブのようなものをこしらえる」という例を挙げたり、「いろいろな種類の…星のかがやく夜空のようだ」「星のように飛び出るかもしれない…爆発するということがおこる」という比喩表現を用いたりして説明している。

問六、「手当たり次第読む」という「乱読」で、「読む側の頭に眠っていた関心と…偶然の出会いをする」ことで「何より不思議な喜びを覚える…新しいものを見つけたという気がする」ことを、「小さいながらセレンディピティである」と述べている。「乱談」では、「自分でも考えたことがなかったようなことが…飛び出す」ことを「セレンディピティの一部だったりする」と述べ、「半分は意識下にあった関心も…飛び出るかもしれない」とたとえている。「乱読」と「乱談」の共通点をおさえてまとめる。

Step 2・3

二

解答

問一、a、招(きやすい)　b、典型　c、なか(ば)　問二、ア　問三、省略されている部分を予想することができる（20字）（同意可）
問四、ア　問五、ウ　問六、あたたかさ、含み、おもしろさ（14字）　問七、イ　問八、エ

解説

問二、「話の筋道」についてたとえている。
問三、「家族の間で交わされることば」は、間を省略してもそれに続くことばを「受け手は予想する」ため、「それが省略と感じられないようになっている」と述べていることをおさえる。
問四、「つまり」は、それまでのことを言い換えてまとめるときに用いる。
問五、反意の漢字の組み合わせ。アは上の漢字が下の漢字を修飾している。イは同意の漢字の組み合わせ。エは上下の漢字が主述の関係。
問六、「この点的論理」とあるので、直前の「点的表現は点的論理を生む…省略の文化が生まれる」ということに着目する。
問七、「点的表現では意味の半ばは、受け手に委ねられている」から、「十人十色の意味化があっておかしくない」と筆者は述べている。
問八、「線的論理は切れ目がない…その線をたどっていけば、脱線ということはない」ため、「脱線すれば、受け手の責任である」ことをおさえる。

第八講　論理的文章の読解⑦

Step 1

一

解答

㈠ア　㈡ウ　㈢エ　㈣エラーをす　㈤ウ　㈥イ

解説

㈠この文の「このこと」は、人間が「世界と自分をはっきりと分けて認識している」こと、「言い換えれば人間は…『自然（＝世界）』の中に生きていない」ことをさしている。

㈢「地下鉄」や「ジェット機」の例で、「言葉」や、「数学」「物理学」「工学」など「人間が自然を学びながらつくり出した体系」を学ばなければならないと述べていることに着目する。

㈣第六段落で「物理学者のある友人」のことを取り上げたあと、第七段落で、「知らない」ことがもたらす「可能性」を挙げて、「大きな力にもなりうる」としていることをおさえる。

㈤「『若い力』とは『知らない』力であり…『知らない』ということのほうが重要なのである」という意見を述べたあと、その理由や、友人の例などを挙げて、筆者の主張が分かりやすく伝えられている。

㈥第四段落で、「新発見というものは…十五〜十六歳の頃からその種を自分の中に宿していることが多い」として「若い力」を取り上げ、第六段落では、「皆さんの年頃に抱いた…違和感と疑問を持ち続け、それが花開いた」具体例として「物理学者のある友人」を取り上げ、「知らない」ことの重要さを説いている。

Step 2・3

二

解答

(1)(ア)　(2)(イ)　(3)Ⅰ、(ア)　Ⅱ、(キ)　(4)(対)処　(5)(ア)　(6)(ウ)　(7)(ウ)　(8)(イ)　(9)前提そのものを問いただそうとするものであり、既定のマニュアルなどありえない（37字）（同意可）

解説

(1)頻度が高い、しばしばあるという意味で使われている。十分に、という意味で使われているものと区別する。

(2)筆者は、「問いの構造じたいを問いなおす…アプローチの仕方を吟味する」ということを「哲学の重要な仕事」と考えている。講演を聴いた生徒が、「問いに対する答えではなく、その『手がかり』を摑むために哲学があるらしい」と捉え、筆者が「想像もしていなかった」表現でまとめていたことをおさえる。

(3)「満」は満ちる、「足」は足りるという意味である。(カ)の熟語は(ウ)、(ク)は(イ)、(ケ)は(エ)の成り立ちである。

(5)主語は「何が」「何は」にあたる文節。「そんなときにたいせつなことは」が主部で、「わからないけれど…摑むこと」「そのわからないものに…対ショできるということ」をあげ、最後に「いいかえると」として、「性急に答えを…知的耐性を身につけることだ」と結論づけている文である。

(6)じぶんが「下敷きにしてみずからの生の軌跡を描いてきた」、その基となるものを指している。

(7)「じぶん（たち）の生を…《初期設定》や《フォーマット》」を「吟味」し、「書き換える」ことで、「より見晴らしのよい…場所に立てるようになる」ことを表している。ここでの「より見晴らしのよい」とは、問題がよく見える状態を表していることをおさえる。

(8)3段落には、1・2段落であげられた、「解決する手がかりをつかむ」という表現に筆者が注目した理由が述べられている。

(9)「その意味で…マニュアルではありえない」という筆者の主張をふまえて、その後の「前提そのものを…ありえないのである」の部分をまとめる。

第九講　論理的文章の読解⑧

Step 1

一

解答

(ア) 1　(イ) 2　(ウ) Ⅰ、承認　Ⅱ、社会的役割　(エ) それぞれの時点では自分が傾倒する役割に没頭しつつも、そこに自己のアイデンティティを限定せず、別の可能性にも自己を開いておく生き方。（65字）（同意可）　(オ) 1　(カ) 4　(キ) 3

解説

(ア) Aでは、「かつてのモラトリアム」について前文で述べたことを、わかりやすくまとめている。Bでは、「義務はないのに…自由で気楽な時期といった感じ」について例を挙げている。

(イ) 直前の「こうして」が指す内容をおさえる。社会が目まぐるしく変わり続けるので「まったく先が読めない」という時代で、「無理に自己確立などせずに可能性を残しておきたい」という心理になっていることを指す。「義務はないのに権利はある」という「現代のモラトリアム」が、そうした心理を受け入れやすくなっていることもおさえる。

(ウ) 「エリクソンのいうアイデンティティ」の「三つの側面」のうち、②と③に注目。「アイデンティティ確立の条件」として、「他者からの…必須だということ」「それには社会の中で何らかの役割を引き受けることが必要になるということ」を挙げている。「何らかの役割」について、先に「自己の確立」の条件として、「何らかの…を担うことができる」ということを挙げていることに着目する。

(エ) 「プロテウス的人間」が「環境の変化に応じて自分自身を変身させ…最大限発揮しようとするタイプ」の人間であることをおさえる。「こんなに変動の激しい時代」での生き方を述べ、「そんなふうに状況に応じて…目を向ける気持ちの余裕をもつ」という「生き方」を示していることにも着目してまとめる。

(オ) 直後に、アイデンティティを確立することは「それ以外の可能性を切り捨てること…そのようにみなされてきた」と説明している。

また、ひとつの可能性だけを選ぶ「これまで」のような「固定的なアイデンティティ」について、「多様性をもつ自分の人生を単線化するのは…社会を安定化させるためとみることができる」と述べていることをおさえる。

(カ)ここでの「自分を封じ込めない」は、「無理をして自分をひとつの道に封じ込めなくてもいい」ということである。「社会そのものの変動が激しくなり、労働の形態も著しく変化する」という状況で、こうした「生き方」が広まったことを表している。

(キ)「モラトリアム」の変化について説明し、「エリクソンのいうアイデンティティ」や、社会学者リフトンの「プロテウス的人間という生き方」などを取り上げて、今の時代に求められるアイデンティティを示している。

Step 2・3

二

解答

1、㋐こうかん　㋑こころ(みる)　㋒あんねい　2、社会的な動物　3、エ　4、意図を達成するために合理的にふるまい、安定した態度や特性を表現する一貫性のある言動を行う（44字）（同意可）　5、a、道徳的なコミュニティ　b、賞賛や非難を与え合う

6、(例)方法Aでは、自分の経験をふまえて他者の心を読むことから、他者の喜びや苦しみを自分のものとしてとらえられるという利点がある。自分自身の経験にあてはめ、そのときの心情を思い起こすことで、他者の心情をより深く理解することができる。しかし、他者の経験と自分の経験がまったく同じであることはあり得ない。また性格や考え方も異なっている。そのため、この方法で他者を的確に理解できるとは限らない。自分にあてはめることで思考の範囲が限定され、他者の状況が見えにくくなるということが、問題点としてあげられる。自分の経験を参考にしながら、それにとらわれ過ぎず、他者の立場にたった理解を心がけていくことが必要だと思う。（298字）

解説

2、「社会の中」で「他者」とかかわっていることを表す語と、人間を生き物として表現している語の組み合わせに着目する。

3、「私たちが進化の過程で心を読む志向性を獲得したかどうか」ということについて、「直接その歴史を検証できない」ため、作り上

げられた「物語」に過ぎないのかもしれないと考えていることをおさえる。

4、「私たち」が「他者の心を読もうとする」ことについて、「他者を、意図を達成するためにふるまう…エージェントとして認知する」ことで、「理解や予測、統制が可能な存在とすることができる」と説明している。

5、ａ、「他者に心を認める」ことについて、「共感的理解に基づく関係を築」くことと、「他者を正当に扱い、害や苦痛を与えることのないよう…の中におく」ことをあげている。ｂ、「他者の心にある意図や動機を読み…与え合うこと」により、「他者に対する善い意図や動機が促進され…抑制されることになる」と述べている。

追加講　論理的文章の読解⑨

Step 1

一

解答

(1) a エ　d カ　(2) エ　(3) ウ　(4) e おちい(る)　f さかのぼ(って)　(5) ア　(6) (加)担　(7) イ

(8) ㈠ 心の在り方を示すもの　㈡ B 認識の限界を乗り越えること（同意可）　C 他者への理解（同意可）

解説

(2) 問題文では「そうした痛み」は何によって引き起こされるものか、を問われている。本文冒頭「心がチクりと痛むこと」と痛みについて書かれているため、その直前「なにかしらのすれ違いやトラブルもある」が根拠となる。

(3) 設問文で空欄を含む文が「痛みを認め、［　］とすべき」とあるため、本文で似た記述がある箇所を探す。傍線部を含む文の次の文が設問文の言い換えとなっている。

(5) 「うまく／生きて」は「うまく」が「生きて」を修飾している。

(7) 傍線部「それ」は、「それ」を含む段落の始まりから「それ」の直前までを指している。「問いかける側の理屈になんらかの欠点・難点があることを指摘」「レッテルを一方的に貼りつけてその言説を無効化」などの内容と合致した選択肢を選ぶ。

(8) ㈠ 会話文で［A］を含む文と似た内容を本文から探す。痛みが有用であることを記述しているのは第二段落。

㈡ 会話文と似た箇所を本文から探し、空欄に当てはまるようにまとめる。会話文「自分の世界は、今の自分が持つ［B］によって大きくなり」と似た箇所は、第三段落の「それまでの限界を乗り越えたとき、あなたにとっての世界は拡がってゆく」である。「それまでの限界」は前の文から「認識」の限界と読み取れる。また、「［C］を深める」と似た内容は第三段落「他人をより良く理解することにもつながる」であり、字数に合うように解答する。

Step 2

二

解答

問一、ア　問二、アリの巣に「怠け者」が存在する（十五字）（同意可）　問三、一種類だけ植える
問四、㈠いろんな環境　㈡エ　問五、一見怠け者に見えるアリが、実は労働量不足の事態に備え、力を蓄えて待機している予備軍だということ。（四十八字）（同意可）

解説

問一、傍線部①「そうした生き方」によって「姉妹たちの生存率を上げる」こと、「遺伝子が次の世代に残る確率を最大化する」ことにつながる。傍線部①「そうした生き方」には指示語があるので直前段落も確認し、内容が合致する選択肢を選ぶ。
問二、全員が働き者になるはずだという「理論」とは異なる「事実」をまとめる。
問三、会話文「草原に生える草の種類をコントロールする実験の例」を【文章Ⅱ】から探す。
問四、傍線部④「生物多様性が高いメリット」は「ほかにもある」とあるため、傍線部④の内容は前の段落から始まっていたことがわかる。⑴は傍線部④より前、⑵は傍線部④の後ろの内容から読み取る。
問五、【文章Ⅰ】の働きアリの話の中から、「『怠け者』たちは、労働量が不足する事態が発生したときに巣全体の労働量を補填するための予備軍」という箇所を「冗長性」の観点からまとめる。

Step 3

三

解答

1、ウ 2、エ 3、⑴オ ⑵個々のものがもっていた微妙な差異 4、ア
5、言葉には実際に経験したことの一部しか伝えられない限界があるが、相手と経験を共有することで豊かな意味あいを伝える働きもあるということ。（同意可）

解説

2、本文の「『事＝言』として事柄全体を言い表したものではなく、そのほんの一端を言い表したものにすぎない」という内容を表した選択肢を選ぶ。
3、⑴はBさんとCさんの発言の内容に該当する本文の内容を探す。アは第四段落、イは第五・六段落、ウは第六段落、エは第二・五段落の内容に該当する。
⑵ノートの［　］を含む文は第四段落、矢印の左の文は第五段落に対応している。
4、第六段落では言葉の制約や、人によって言葉の捉え方が違うことを示し、最後に「言葉はこの具体的な経験とのあいだにある隔たりを乗りこえることができないのでしょうか。」と問題提起をしている。
5、第二段落と第三段落および第七段落に示される言葉の限界と、第七段落に示される言葉の発展的な特徴をまとめる。

第十講　物語・小説の読解①

Step 1

一

解答

問一、a、ひ(えて)　b、ま(し)　問二、3　問三、2　問四、自分が約束を破ったことは、取り返しがつかない行為だ(ということ。)(25字)(同意可)　問五、3

解説

問二、13画。1は11画、2は14画、4は12画。

問三、ミオの家に来るときのふたりの様子を、「手をつないで歩くふたりに、犬はやっぱりほえかかったはずだし…追いやったはずだった」と想像して、いてもたってもいられない気持ちになっている。

問四、「今日のふたりには二度と会えない…追いかえしてしまったふたりにはもう二度と会うことはできないのだ」と考えている。ふたりと遊ぶ約束を忘れたことがもたらすものの大きさに気づき、心から悔いていることをおさえる。

問五、㋐は、約束を忘れてふたりを追い返してしまったため、気持ちが重苦しくなっている様子を表現している。㋑は、一刻も早くふたりのところへ駆けつけようと焦るミオに、さらに逆風がおそう様子。㋒は、ふたりにすまないと思う気持ちで、吹きつける風や雪から痛みを感じる様子。㋓は、この後、「ミオが追いかけたとたんにふたりの影は遠ざかった」とあることから、ふたりに手がとどかない状況を描いている。

Step 2・3

二

解答

問1、ウ　問2、ア、美しい切削ができるのにいつものように淡々と作業を続けている（29字）（同意可）　イ、あせり　問3、断片的に視覚や聴覚に訴える非日常の不思議さに満ちて見えていたが、今は作業の全体像がつかめ、きわめて地道な仕事の場であった（60字）（同意可）　問4、エ　問5、ア(と)オ

解説

問1、原口に配られた「メニュー」を見て、「こんなにも意欲はあるのに、それを発揮する手立てがない」と不満を持ち、このあと「ごく自然に、あたりまえの作業として…こんなにうまくなったのに」と思っている。

問2、亀井のテーパを手に取り、「なめらかだった…できるなんて」と思ったあとに、「いつものように…続けている」という亀井を見て「焦れるような熱」を感じている。

問3、次の段落に「当時」と「今」の違いが書かれている。「当時」については「断片的に視覚や聴覚に訴えていた」「幼い目には…見えていた」とあり、「今」については「確かな作業のつながりを伴って目の前にある」「きわめて地道な…理解した」とある。

問4、「一日も早くすべての…本物だったはずだ」という考えを否定し、「見当ちがいに原口を邪推し…どこかがゆがんでいた」と感じている。

問5、心の視点から書かれた文章である。また、「今」という時間の経過に沿って展開されている話であり、「回想の場面」は「祖父の工場」を思い出している場面だけである。

第十一講　物語・小説の読解②

Step 1

一

解答

1、荷を下ろせ　2、Ⅰ、具体的なコーチ　Ⅱ、好きに走らせろ　3、去年の結果を引きずらないで、今の加納の姿を見ろということ。（29字）（同意可）　4、抑制の利いた美しさに加えて、強さやたくましさまでもが備わった走り。（33字）（同意可）　5、イ

解説

1、「この数ヶ月…」以降が、信哉の視点から書かれた文章となっている。苦しい状況での「碧李の決意」について、信哉は「見事だ」と感じている。

2、Ⅰ、「今、加納に必要なのは…じゃないんですか」と言おうか迷っている。Ⅱ、「その監督が…信哉には見えない光が灯っているのかもしれない」と考えるようになっている。

3、「おまえらの見ているのは、今の加納じゃない」「去年の結果を引きずっているのは…おまえたちじゃないか」「しっかり目を開けて、今の加納を見てみろ」と言っている。

4、「久々に、碧李の走りを見た」と思い感動している。さらに、入部した日の「抑制の美しさ」に加えて、「一年生のときより、ずっと強く、たくましくなっている」ということに気づいている。

5、去年の秋、現在、一年生の春という異なる時期での碧李の走りや思い、まわりの者の思いを描くことで、碧李の成長が伝わる文章である。

Step 2・3

二

解答

〔問1〕ウ　〔問2〕イ　〔問3〕ア　〔問4〕エ　〔問5〕イ

解説

〔問1〕「いきなり背後から聞こえた声」に「びっくり」したこと、声をかけてきた相手が「スカートを穿いているのに気付き、よけいにびっくりした」ことなどから、「驚かされたことに腹が立って」いると考える。

〔問2〕「なぜ、あいつ、俺がカーブを…わかったんだ?」と疑問に思い、さらにボールの握り方がまちがっていると言われたことが理解できなくて、とまどいながら少女を注視する気持ちを考える。

〔問3〕「口を半開きにして」は、驚いてあっけにとられる様子を表している。「ボールもよく曲がったが、それ以上…迫力があった」ことに驚き、ぽかんとしていることをおさえる。

〔問4〕「唇を噛む」は、悔しさを表す動作。よく曲がり迫力のあるカーブを目の前で見せられ、ボールの握り方を教わって、「はあ」と「うなずいて」しまったことへの悔しさを感じている。

〔問5〕見知らぬ少女からカーブの投げ方を教わるうちに、いつのまにか時間が過ぎていたことに気づいた場面である。

第十二講　物語・小説の読解③

Step 1

一

解答

(1) 夏　(2) 自分の句で瑞穂と茜の表情が一変した。(18字)(同意可)　(3) エ　(4) Ⅰ、緊張　Ⅱ、遠慮せずに意見を言う一年生 (13字)
(それぞれ同意可)　(5) エ　(6) ウ

解説

(1) 草を使うので、最も緑が豊かな季節を表す。

(2) 直前の「瑞穂がはっとしたように顔を上げた」「茜は…徐々に表情をほころばせる」に着目する。東子が披講した直後に「一変」した二人の様子をまとめる。

(3) 「井野先輩」の句は「草笛は空耳課題はかどらず」である。「空耳」は実際は聞こえていないのに、聞こえたような気がすること。

(4) Ⅰ、句評が始まって、東子は自分の句についての評を聞き「どきどきしてきた」のだが、そのあと「肩の力が抜けるのを感じ」て、小さく笑っている。張りつめていた気持ちがほぐれている。Ⅱ、「この一年生トリオは強い…引きずらない」というように、一年生の意見のやり取りを聞いて、ほほえんでいることに着目する。

(5) 茜の「それが『友』との言葉ならば…耳にやわらかいんじゃないか」という言葉が、東子の句の「言葉にまとめられぬ」に通じるものがあり、続く瑞穂の「覚えていられないほど…しゃべってきてる」も、それを裏付けている。

(6) 東子は「六番目の会員」であり、作句すると「自分に才能がないのは…瑞穂が気にしそうだった」と思っている。そんな中で、今自分の句が「いいと…評価された」こと、その後の茜と瑞穂の言葉によって、自分が仲間に受け止められていることを東子は強く感じている。

Step 2・3

二

解答

問一、あにもの　い暑(い)　うしょうじょう　え危(うく)　問二、エ　問三、ウ　問四、イ　問五、頼りにしていた

問六、それまでは妹が真似をするから立派に行動するということがお手本の意味であり、ここでは妹を安心させようという思い(が込められている)。(55字または63字)(同意可)

解説

問二、上の漢字が動作を表し、下の漢字がその対象を表している。アは同意の漢字の組み合わせ、イは上下の漢字が主述の関係、ウは反意の漢字の組み合わせ。

問三、「食事のときは、きまってそうなのだ」とあるので、ママの言うことが予想できたことを表す言葉を考える。

問四、「二人を処置室へ…別々のベッドに寝かせた」「看護婦さんの真剣な表情…おろおろしているママの姿」「達夫だって…泣きだすところを、じっと我慢しているのだ」という状況である。看護婦が達夫の左腕にするどい針を刺すのは、このあとの場面である。

問五、幼稚園にいるときの二人の様子に着目する。達夫が「妹の世話」をし、「秀子のほうも兄にべったりへばりついて…」という関係から、秀子の気持ちをおさえる。

問六、「秀子のお手本になってちょうだいよ」と言われて、はじめは意味がわからなかったが、そのうちに「いつも秀子が見ていて…立派にしなくちゃいけないんだな」と理解するようになっている。また、ここは、ママから「お病気のときは我慢しないで、泣いてもいいのよ」と言われたにもかかわらず、達夫が「怖そうに見つめている妹」に笑ってみせ、「ちっとも痛くないよ」と優しく声をかけている場面である。

第十三講　物語・小説の読解④

Step 1

一

解答

1、イ　2、戦　3、鏡の前に立って、何度も笑顔の練習をした結果、自然に笑顔が浮かべられるようになった。（41字）（同意可）

4、⑴営業一部に長く漂っている喪失感　⑵ a、顔の芯を成すもの　b、一緒にいる人間を安心させて　c、存在そのもの

d、心をなごませ鎮めさせて

解説

1、Aには、「ルーシェ」の料理がおいしいことを、間違いないと認める言葉が入る。Bでは、「ビルのオーナー夫人のおかげ」であるという前文に対し、「マスター」のおかげでもあるという考えを示している。

3、息子の前で笑顔でいるために、「鏡の前に立って、何度も笑顔の練習をした」結果、「自然に笑顔が浮かべられるようになったんだ」と述べている。

4、⑴日吉と「同種類」の穏やかさを持つ人間として、脇田千春を思い出した場面で「そうか、脇田千春が辞めたあと…それだったか」と納得していることに着目する。⑵ a、日吉京介について「晴れた日の凪いだ海の…包まれている」ように感じさせたものをおさえる。b、日吉から「変わったと思うか？」と聞かれたときに、自分が感じていることを答えている。c、「とりたてて目に見える特徴があったわけではない」という脇田千春について、「あの子の存在そのもの」が周りを穏やかにさせたとしている。d、「殺気だった営業の…働いている者たちの心」に与えた影響をおさえる。

Step 2・3

二

解答

問1、（オわれて）追（われて）（コウコウ）孝行（覆って）おお（って）（帰郷）ききょう　問2、お母さん　問3、D→B→C→A
問4、ウ　問5、見るからに疲れている。問6、大学をやめたいという自分の気持ちを伝えることで、父の怒りを買うのではないかと不安に感じていたから。（同意可）　問7、エ　問8、兄が、自分の本心を言わずに、大学をやめる言い訳として、親の手助けや祖母の世話の話を持ち出したから。（49字）（同意可）　問9、（例）（「言葉」）「自分の気持ちを正直に言った方がいいよ。」（「理由」）兄が自分の思いを素直に伝えずに、母を怒らせてしまったことを残念に思ったから。

解説

問2、「くれた」は、もらった人物がつかう言葉である。「いつも家事にオわれているお母さんに…プレゼントしたのだ」とあることに着目する。

問3、母に「お休み券」をプレゼントしたときのことを思いだしているのは、現在の場面である。兄がつくろうと言いだし、兄とわたしの間で内容について取り決めをしたあとで母にわたした、という「昔」の展開をおさえる。

問4、孤独な生活に耐え切れず自宅に帰っているときに、母から「たまには休んでいいのよ」と言われたことへの気持ちを考える。

問5、帰ってきたときの父の姿に着目する。

問6、父に「大学やめて…こっちの大学受け直す」と切りだす直前の気持ちを考える。

問7、「間が空くのを怖がるように」とある。時間が空かないように話しつづける様子を表す語が入る。

問8、兄が大学をやめる理由として「おばあちゃんの具合が悪いわけでしょ」「お父さんもお母さんも…使える手があったほうがいいわけじゃない」などと言ったことへの反応であり、「ひとのことを言い訳につかう」ことに感情を高ぶらせている。

問9、兄が「ちょっとでもウチのこと…したいわけだよ」と言ったことに対し、「わたし」が「お兄ちゃん、それ違う。絶対に違う」と思っていることをおさえ、このあとに母や父が兄へ言ったことと合わせて考える。

第十四講　物語・小説の読解⑤

Step 1

一

解答

1、（漢字）①届（いて）　②格別　（読み）③かとく　④きじ　2、犬（を）安産のお守り（とすること）　3、「柏の葉っ（または、柏の葉っぱ）」　4、A、たくさん食べさせてやりたい（13字）　B、立派な跡取りに育てていきたい（14字）（それぞれ同意可）

5、a、畑で仕事　b、母親のよし・姉のみさき　c、〔家で〕柏餅を食べる（それぞれ同意可）　6、仕事に精を出し、仲良く暮らす（家族の姿）（14字）（同意可）

解説

2、父親の亮助がくろをもらってきた理由に着目する。

3、くろがもらわれてきたときのことが書かれた後、一三が「そっちに行ったら駄目」な理由をくろに話す場面になっている。

4、直前の「それゆえ」は、「亮太が柏餅を…甘い物好きだからである」ということと「跡取りがすこやかに…このうえない喜びだった」ということを指している。この二点と関連させて考える。

5、a、「おかあちゃんが…見に行ってみようか」という一三の言葉に着目する。b、「亮太の好物を…仕事だった」とある。c、一三が「お昼過ぎには…できるんだって」「おかあちゃんが…帰ってきてからだよ」と話していることから考える。

6、「実を結ぶ」から、順調に進む様子を読み取り、この文章全体で描かれた家族の様子と合わせてまとめる。

Step 2・3

二

解答

1、イ　2、ア　3、小悪魔ども　4、少年たちが私に鮒をくれると言ったこと。(19字)（同意可）　5、鮒を売ってくれという私の一言が、本来純粋な少年たちを狡猾で貪欲な気持ちにさせていたのだと思ったから。(50字)（同意可）　6、ウ

解説

1、ようやく私が「かれらの奸悪な計略を理解した」とある。かれらの「計略」「狙い」をおさえる。

2、「自分に言い聞かせ」て、「味噌煮にしておけば…済むわけだ」と考え納得しようとしている。

3、「かれらの奸悪な計略」という表現や、「私はそこでもまた自分が罠に落ち…買い取った」という状況をふまえて、「私」につきまとう少年たちを表現するたとえをさがす。

4、失望した少年たちが「どうしたものかと…鮒を見まもった」ととまどいを見せた後にとった行動をおさえる。

5、少年たちの態度の変化によって、「私は自分の大きな過誤を恥じた」とある。「大きな過誤」「私の責任」の内容をおさえる。

6、「ここまで読まれた方は…想像されるにちがいない」という表現によって、読者に直接語りかけている。地元の人々と少年たちの触れ合いは描かれていないので、アは不適。主人公の人柄が厳格で近寄りがたいとは読み取れないので、イは不適。風景描写はほとんど見られないので、エは不適。

第十五講　物語・小説の読解⑥

Step 1

一

解答

1、四　2、ウ　3、外に自分を駆り立てるものは何なのかわからない（にもかかわらず父と母を悲しませることになるから）（22字）（同意可）　4、A、古い家系の守護者　B、わずかな自由　5、（古い血の重圧があるからこそ）反発を感じて、一人の人間として精いっぱい自由に（生きること）（23字）（同意可）

解説

1、文節で区切ると、「元司の／頬の／ほてりは／おさまらなかった」となる。
2、自分の部屋へ入ってから、「家を離れることを…胸をふくらませていた」ことに着目する。
3、直後の「父と母を悲しませ…という思いだった」に注目。
4、A、旧家の血を継いだ者は、「家系の守護者としての役割」を強いられることをおさえる。B、「家系の守護者」となった祖父と父について、「祖父も父も…甘んじてきた」とある。
5、「古い血の重圧」とあるので、「祖父や父は、古い血の重圧に堪えて…生き方を選んだ」に着目する。それに対して元司は、「だがその重さに…それがおれだ」と思い、「精いっぱい生きたい」「一人の人間として、自由に生きたい」と考えていることをおさえる。

Step 2・3

二

解答

1、①こが(らし)　②すなお　③むとんちゃく(または、むとんじゃく)　2、ウ　3、どうしてもきみ子に会いたい（13字）（同意可）　4、Ⅱ、頰が熱くなった（同意可）　Ⅲ、エ　Ⅳ、啓吉と別れなければならなかったこと（17字）（同意可）　5、ウ

解説

2、「忘れていた」ということは、ざくろの実をとって食べることもない生活を表している。前の文に「忘れていたという言葉から、きみ子は自分達のさびしさを思い出した」とある。

3、「いきなり庭の方へ廻った」ということは、玄関で案内を乞う手間を省くほど急いでいる気持ちを表している。啓吉が出征することと、啓吉が「待ち切れぬ」ような眼できみ子を見ていることから考える。

4、Ⅱ、「微笑し合ったことに気がつくと…熱くなった」とあることや、啓吉の残したざくろを差し出されたときに「顔をしかめて…熱くなると」とあることをおさえる。Ⅲ、ざくろは好意を寄せている啓吉が触れたものであり、きみ子にとって啓吉そのものを表していることをおさえる。Ⅳ、もう啓吉は去っていっており、啓吉は出征して帰ってくるかどうか分からないということを踏まえて考える。

5、きみ子は「母がよく父の残しものを食べていた」ということに、「啓吉に知られないで、心いっぱいの別れ方をした」と思える自分の姿を重ね合わせている。

第十六講　韻文の鑑賞①

Step 1

一

解答

1、F　2、D　3、(1)空さわぐ　(2)ア

解説

1、名詞で終わる表現技巧の体言止めが使われているのは、CとF。Fの「花吹雪」が、「春の空の下」での動きや、「空間の広がりと美しさ」を表している。

2、冬の句はBとDで、どちらも「かな」という切れ字が使われている。Dの「怒濤」が、「目の前で繰り返される激しい動き」を表している。

3、(1)「風の吹く中で見上げた空が…ているように感じたこと」に着目して、鑑賞文はAの句について述べたものだということをおさえる。この句で、空が揺れ動く様子を表現している言葉を抜き出す。(2)葉桜のすき間から、空の光がちらちらと輝いて見える様子をおさえる。

Step 2・3

二

解答

1、㋐おど(り出た)　㋑かしょ　㋒ひんぱん　2、a、魚と海との親しい関係　b、魚の生動感　3、ウ　4、鳥の中にすっと入って、身体の重みを風に乗せるコツを自分の筋肉と筋肉の間に置くこと。(41字)(同意可)　5、エ　6、Ⅰ、地平線　Ⅱ、イ

解説

2、「海面に魚が躍り出た」という表現からは「全く伝わってきません」とされていることがらに着目し、aは海との関係、bは身体の動きを表すことばをおさえる。
3、「すぽんと海を脱ぐ魚」という表現と、「海面に魚が躍り出た」という表現の違いから、詩の表現の特徴を示している。
4、「僕がお前に／すっと入ってしまうやり方」を考え、次に凧に乗ることを考えている。
5、直前の「ここ」は、「身体の重みを…置けないかしら」と持ちかけられると、「川崎さんと一緒になって…気分になって」しまうことを指している。最終段落で、詩では「訴えを聞く人が…丁寧な話の持ちかけかたが大事」であるとまとめている。
6、Ⅰ、最初に「飛びつく」ものである。Ⅱ、「僕は世界にぶら下った」「僕は赤くなる」「僕は収縮する」「大きく世界が一回転して／僕が上になる」という「僕」の姿の描写から伝わるものを考える。

第十七講　韻文の鑑賞②

Step 1

一

解答

(1) エ　(2) 色　(3) ウ

解説

(1) Aの俳句では「〜如くに」と比喩を示す語が用いられているので「直喩」。エの俳句も「〜のようなる」と同様の語が用いられている。

(2)「火を投げし…」と「火の独楽を…」の二つの俳句は、本文の初めに示した「物の色や形を言葉で言い表す」ものの例として挙げている。前者は「統合した比喩」で、後者はイメージを分けた比喩であると説明している。

(3) Bの俳句は「抽象的・不可視的なもの（人生の岐路）を、具象的・可視的なもの（双頭の蛇）に喩え」たもの。設問の俳句では「去年今年」のつながり、つまり「歳月の移ろい」が「抽象的・不可視的なもの」であり、それを可視的な「棒」で表現している。

Step 2・3

二

解答

1、B　2、E　3、(1) 秋の光　(2) 山みな声となりて

解説

1、「ごとく」というたとえを示す語句を用いて、階段が輝く様子を滝にたとえている。

２、音を立てることなく、夜空に光の広大な模様を描き出すオーロラを詠んでいる。

３、⑴Ｃは、「けり」という句切れを示す語が二句目にある。「旅人の耳」という聴覚から「光」という視覚へ、そして「おと聴くほどに」という聴覚に戻っている。⑵Ａが、「一つ二つ」とひぐらしの啼く数が増えるにつれ、山全体が声を発しているかのように表現している。

第十八講　古文の読解①

Step 1

一

解答

(1) おおきに　(2) (はじめ) 上東門院の (～終わり) みたりける　(3) ① 点のつけ方　② のちの天皇の誕生 (それぞれ同意可)　(4) エ

解説

(1) 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。
(2) 上東門院の御帳の内で起きた出来事を指している。
(3) ① 大の字の上に点をつけると「天」、下につけると「太」となることを言っている。② 「太子生れさせ給ひて、天子にいたらせ給ふべし」と推測している点に着目する。
(4) 貴人の室内で犬が出産することは珍しく驚くべきことだが、あえてそれを吉事とした匡衡の機転について述べている。

口語訳

本当に、この御代に、一つの不思議なことがあった。上東門院彰子の御方の御帳台の中で、犬が子を生んだことが、思いがけずめったにないことだったので、(上東門院は) たいそう驚きなさって、江匡衡という博士におたずねになったところ、(匡衡は)「これはめでたくよろこばしい事です。犬という字は、大の字のそばに点をつけたものです。その点を大の上につければ、天になります。下につければ、太になります。その下に子という字を続ければ、天皇とも、皇太子とも読むことができます。このようであるから、皇太子がお生まれになって、天皇にまでおなりになることでしょう」と申し上げた。

そののち、その言葉通りに皇子のご誕生があって、まもなく位にお就きになった。後一条天皇がその人である。匡衡は、詩文の才能にめぐまれていただけでなく、このようなことにも心遣いが深かった。

Step 2・3

二

解答

問一、わずらい　問二、ウ　問三、(1)エ　(2)行く　問四、(1)ア　(2)イ　(3)ウ

解説

問一、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。また、「づ」は「ず」にする。
問二、2は、病気になった娘のかたわらで、母が泣いている。3は、泣いている母の顔を、娘がじっと見ている。
問三、(2)「いく」という言葉に、「生く」と「行く」という二つの意味を持たせている。
問四、(1)小式部内侍が重い病気で、今にも死にそうになっていた。「身のあたたかさも…なりにけり」は、その病気がよくなったことを表している。(2)本文で、この声の主は「あはれ」と思っている。「古今和歌集」の冒頭で、「あはれ」と思ったとされている者が入る。(3)「いかにせむ…道を知らねば」と詠んだのは、娘である小式部内侍。病気で生きる方法も、これから行くところもわからないという気持ちを詠んでいる。

口語訳

小式部内侍が、はなはだしく病気になった。もう終わりかというまでになり、人の顔なども見分けがつかないほどになってしまって、寝ていたところ、和泉式部がそばに寄り添って、額をおさえて泣いていると、（小式部内侍が）目を少しだけ開けて、母の顔をじっと見て、苦しい息の下で、
どうしたらいいのでしょうか。生きる方法もわからず、行くべき方向もわかりません。親に先だって死んでいく道も知りませんので
とふるえる声でよみましたところ、天井の上から、あくびをかみ殺したかと思われるような声で、「ああ、あはれなことだ」と言った。そして、体の熱も引いて、小式部内侍の病気はよくなったことだ。

第十九講　古文の読解②

Step 1

一

解答

問一、(思)うよう　問二、ア　問三、1、男の射た矢がそれて、わなをつないでいたつなを切ったから。(28字)(同意可)　2、エ
問四、ウ

解説

問一、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」を「わ・い・う・え・お」にし、「au」は「ou」と発音するので「やう」は「よう」にする。
問二、「よし」は「事情。事がら」の意。「せ」は「～させる」という意味の使役の助動詞。直訳すると「弓が上手であるということを人に聞かせよう」になる。
問三、1、弓が上手だと言いふらすために放った矢が、「鹿にはあたらずして…かづら射切られて」となったことをおさえる。2、本当はわなを仕掛けて鹿を捕らえたのに、射殺して「弓の上手」に見せかけようとした気持ちから、鹿には逃げられる結果になっている。
問四、男がわなを仕掛けて鹿を捕らえたままではよかったが、わざわざ矢を射たことで鹿を逃がしてしまったという話。付け加える必要がない余分なもの、という内容を伝えている。

口語訳

前の大和の国守であった源時賢の墓地は、長谷というところにある。そこの墓守をする男が、わなを仕掛けて鹿を取っていたところ、ある日、大鹿がかかった。この男が思うことには、「わなにかけて捕まえるのはたやすいことだ。射殺したと言って、弓が上手であることを人に言いふらそう」と思って、わなにかけた鹿に向かって大雁股という矢をつがえて射たところ、その矢は、鹿には当たらず、わなにかけていたつなに当たってしまったので、つなが射切られて、鹿はなんなく走って逃げていってしまった。この男は、頭を

かいて悔しがったが、どうにもならなかった。

Step 2・3

二

解答

(1) (エ)　(2) いいたりける　(3) (ウ)　(4) (オ)　(5) ㊀ 西の枝から始まる（同意可）　㊁ まことに

解説

(1) 「はつもみぢ」は、秋になって初めて色づいたもみじのこと。「失せに」は、そのもみじが散ったことを表している。

(2) 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。

(3) 「係り結び」は、「ぞ・なむ・か・や」という係助詞に呼応して結びが連体形、「こそ」という係助詞に呼応して結びが已然形になるという法則である。「ぞ」という係助詞が使われている文に着目する。

(4) 蔵人永継が「西の枝にこそ候ひけめ」と言ったことに感心し、「この比は…優に候ふものかな」と言った人物である。

(5) ㊀ 紅葉した葉の場所を答えていることや、「木のはの色づくは西こそ秋の初めなりけれ」という「『古今』の歌」に着目して考える。㊁ 右中将実忠朝臣が言ったことに、みんながそのとおりだと感心したというところまでが、具体的なエピソードを述べた部分になっている。

口語訳

少将の内侍が台盤所のお庭のかえでの木を見つけて、「このかえでに初めて紅葉していた葉が散ってしまったなあ」と言ったのを、頭の中将が聞いて、「どちらの方でございますか」と言って、梢を見上げたところ、人々もみな注目して見たところ、蔵人永継がすぐに、「西の枝でございましょう」と申し上げたのを、右中将実忠朝臣が、御剣の役のために参って、同じくその場所に控えていたのが、この言葉に感心して、「この頃は、これほどの事も察しがよく言葉にして言い出せる人はめったにいないのに、りっぱなことだ」とため息をついたところ、人々はみなたいしたものだと喜び楽しんで、その場にいる人全員が感心した。ほんとうにすぐに言い出したも

のも、またただちに気づいて感心したということも、たいへん立派なことです。「古今」の歌に
　同じ枝を分けて木の葉が色づくのは、西こそ秋の初めであることだ
とあるのを考えついて言ったものなのでしょう。

第二十講　古文の読解③

Step 1

一

解答

㈠④　㈡食わずして　㈢エ

解説

㈠「医師」であり、餅を好むのは「入道」。餅をつかせたのは「主」。
㈡語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。
㈢ある僧に「朝の粥を忘れて食はずして…起きず」ということの理由を聞くと、「粥よりも…味の吉きなり」と答えていたことに着目する。

口語訳

餅を好む入道がいた。医者だったので、呼んで、入道が大の餅好きだと聞いた主人が、餅をつかせたところ、この音を聞いた入道が、「おうおう」と声を揚げ、叫びながら、はてには畳の縁をつかんで、もがき苦しんで、「ああ耐えがたい。入道が聞こえないところでおつきくだされ。餅をつく音を聞くのは耐えがたくてなりません」と言ったので、これ程極端なことは希であるが、人は皆好むものがある。どんなにものを好まない人でも、ある者はつまらないことを好み、ある者は昼寝を好んだりする。ある僧は、朝の粥を忘れて食べずに、日が高く昇るまで寝ていた。「どうして朝の粥を召し上がらないのか」と人が言ったところ、「粥よりも、寝ているほうが、遥かに美味なものですから」と言ったことだ。

Step 2・3

二

解答

(1) (ウ)　(2) (エ)　(3) (払)うべし　(4) (イ)　(5) (ア)　(6) ㈠ 守ろうとした（同意可）　㈡ (エ)

解説

(1) 別当が上東門院に命じられて持っていこうとしたものが入る。
(2) 別当が上東門院のところに東円堂の前の桜を持っていこうとしたことを表している。
(3) 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。
(4) 「重科」は、重い罰という意味。上東門院の命令に背いて桜を守るため、別当を追い払おうとしたことに対して、重い罰が下されたとしても、ということ。
(5) 桜を守ろうとするような心を表している。
(6) ㈠ 大衆は、自分たちの寺の桜を持っていかせないようにしている。㈡「伊賀国与野と云ふ…これを守らせる」という上東門院の対応が入る。

口語訳

奈良の都に八重桜として世に知られるものは、当時も東円堂の前にあった。その昔、当時の后である上東門院が、興福寺の別当にお命じになって、その桜を持ってこさせようとなさったので、掘って車に載せて差し上げた。

興福寺の僧侶集団の中のある僧が居合わせて、事情を聞いたので、「これこれ」と答えたのを、「名木と言われた桜を、簡単に人に差し上げなさる別当は、本当に道理にはずれている。間違いである。また、風情もない。后のご命令だとしても、これほどの名木をどうして差し上げようか。やめさせろ」と言って、すぐにほら貝を吹き、僧侶集団を扇動して（桜を持っていくのを）止めて、「別当も追い払おう」などとまで大声で騒いで、「このことで、どのような重い罰が私に与えられることになっても、私が張本人だと名乗り出よう」と言ったことだ。

このことを、女院がお聞きになられて、「奈良の法師は風流を解する心がない者だと思っていたが、すばらしい僧侶集団の心であることだ。風情があることだ」と言われ、「それならば、我が桜として名付けよう」ということで、伊賀国の与野という荘園を寄進し、桜の花の盛りの七日間、警備を行う人を置いて、桜の花を守らせた。今もこの荘園は寺領である。昔もこのような優美なできごとがあったということだ。

第二十一講　古文の読解④

Step 1

一

解答

(ア) 2　(イ) 1　(ウ) 4　(エ) 3

解説

(ア)「あまりに寒くはべり…得たまはせよ」という「女」の訴えに、「さこそ寒かるらめ」と同情したことが理由である。

(イ)「あるとき」小袖を与え、「あくる日」にも「女」がやって来て着物を欲しがったので与えたところ、「又つぎの日」も「着物ひとつ給べ」と言われ、「瞻西上人」が「女」の行動に疑問を感じるようになったことをおさえる。

(ウ)「女」は「汝は極まりて心小さかりけり…施をば、我受けず」と言っている。これ以上着物を与えられないという「瞻西上人」を、心が狭いと非難し、施しを受けるつもりはないと伝えている。

(エ)「女」が姿を消したあとに「瞻西上人」は、「女」が「化人」で、「我が心をはかりたまへりけるにこそ」と気づき、自分の行いをひどく悔やみ悲しんでいる。

口語訳

東の都、雲居寺というところに、瞻西上人という人がいらっしゃった。知識と徳行ともに備わっていて、ひたすら現世を関心がないと見放して、ほかの思いもなく極楽往生のためのお勤めのみを果たしていました。

あるとき、冬だったのだろう、怪しげな女がやって来まして、「あまりに寒いです。どんなものでもけっこうですのでくださいませ。」と申し上げましたので、さぞや寒いことだろうと、気の毒にお思いになって、着ておられた小袖をお与えになった。

さて、その翌日、またこの前の女が来て、「昨日の小袖は、思いがけなく失くしてしまいました。またいただきたいのです。」と言

う。すぐにまたお与えになった。そのようなことがあるだろうかと思っているところに、そのまた次の日、むしろだけを身にまとって「着物を一枚ください。」と言うと、この上人は納得できないと思って、「二度は慈悲の心によっておまえに与えた。それほど自分に力はない。与えることはできない。」とおっしゃると、この女は、気分を害し、「おまえは極めて心が狭かったのだ。心の狭い人間の施しを、私は受けない。」と言って、二枚の小袖を投げて返し、姿をかき消すようにしていなくなってしまった。上人は、化人が来て、自分の心をお試しになったのだと、自分の心の至らなさを自ら恥じ責めて、悔やみ悲しまれたことこそ、気の毒でもったいないと思っております。

聖の心はつゆほども汚れていなかったからこそ、澄んだ月の空が曇ってしまう間違いもありましたのでしょうと、かえすがえすも慕わしく思われるのです。

Step 2・3

二

解答

㈠ おもいのほかなる　㈡ 疑ひなき往生人　㈢ いみじき功　㈣ イ

解説

㈠ 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。
㈡ 聖の臨終の様子に、「弟子もあたりの人も…と信じて過ぎけるほどに」とある。
㈢ 最後の段落で、筆者の考えと「ある人」の話が述べられている。
㈣ 「徳たかく聞こゆる聖」が死後、天狗になってある人に取り付き、「なき徳を称じて…作りし仏」であると打ち明け、「かかる身となりて後は…苦患まさるなり」と言っている。

口語訳

ある山寺に、徳が高いと噂される僧がいた。長年の間、堂を建て、仏を作り、さまざまな善行を積み、立派に修行したが、臨終も見

事だったので、弟子もまわりの人も、疑いなく極楽往生した人だと信じていたところ、ある人にその僧の霊がとりついて、納得のいかないことを言った。
聞けば、もう天狗になってしまったということだ。弟子たちは、意外なことだという気がして、たいそう残念に思ったが、どうすることもできず、気がかりなことなど聞いたところ、（僧の霊が）不思議なことをいろいろと言う中に、「私が生きている時、周囲の評判をとても気にして、ない徳をあるように称して、人をだまして作った仏なので、このような身となった後は、この寺を人が拝み尊く思う日に、私の苦しみとわずらいは増してしまうのだ」と言ったことだ。
すばらしい功徳を積んだとしても、心が伴わなければ、それは甲斐がないことに違いない。「今のことなので、（その僧の）名前はわかっているが、わざと明らかにはしない」と、ある人は語ったことだ。

第二十二講　古文の読解⑤

Step 1

一

解答

(一) あらわれぬ　(二) 1　(三) 4　(四) 3

解説

(一) 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。

(二) 月を「いと心許なく待たせ給ふ」という人が、月を待ちかねて「出でたりや」と尋ねている。「せ給ふ」は非常に高い尊敬の程度を表すので、本文で最も身分の高い人が主語となる。

(三) 「出でたりや」という質問に対する返事を、いろいろ様子を変えて申し上げるということ。

(四) 「なほ」は「やはり」という意味の語。月は「此方」と思っても、やはり待たれる、ということである。

口語訳

摂政殿が参上なさって、二十一日の夜の月をたいそうじれったい様子で待っておられたが、人々に「もう（月は）出たかね」とお聞きになるので、いろいろと返事をおもしろく工夫して申し上げる中に、「山のこちら側へはもう出ておりますが、光がまだ届きませんで」と申す人がいましたのを、「この申し方は、よく考えられていてなるほどと納得する」など、人々もおっしゃったので、弁は次のように詠んだ、

山から出る月の大変遅くじれったく感じられる夜は、山のこちら側へはもう出ていると思っても、やはり待たれることだ

Step 2・3

二

解答

㈠おもわん　㈡だれが優れているかをどうしても聞き出したい気持ち。（同意可）　㈢秋が過ぎ去ること。（同意可）
㈣（はじめ）当時正しき　（終わり）ぐれ侍る。　㈤以前から、「明けば又」の和歌に趣を感じていたから。（25字）（同意可）　㈥ア
㈦時代を代表する歌人である定家と家隆が、互いの和歌を認め合っていたように、優れた和歌を見極め、素直に認める心は、和歌の名手に一致しているものと思われるということ。（80字）（同意可）

解説

㈠語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。
㈡「どうだどうだ」という意味で、摂政殿が「当時正しき歌よみ…いづれかすぐれ侍る」という質問についての答えを宮内卿に強く要求していることから考える。
㈢〈Ⅰ〉の和歌の解釈で、上の句の部分に注目。今宵八月十五日が明けたら、秋の半ばも過ぎる、そのことを惜しんでいる。
㈣摂政殿の宮内卿に対する質問を指している。
㈤治部卿の歌を「ただ、もとよりおもしろくおぼえて」というのが、その理由になっている。「もとより」は以前から、「おもしろし」は趣がある、の意。
㈥〈Ⅱ〉の和歌の解釈から読みとる。山の峰に一面に降った霜から、天空に白くかかる橋を想像し、かささぎが渡す橋という伝説を重ねあわせている。
㈦「当時正しき歌よみ…いづれかすぐれ侍る」という摂政殿の質問に対して、和歌の名手とされる宮内卿家隆と治部卿定家がそれぞれ相手の和歌をあげたことから、本当の名手は、このように相手を認め合うということで一致している、という考えを述べている。

口語訳

ある時、摂政殿が宮内卿をお呼び寄せになって、「現在正統的な歌人が多く知られている中で、だれがすぐれているのか。心に思う

ことを、ありのままに（答えよ）」とお尋ねになったところ、「どなたとも判別しがたく存じます」とだけ申し上げて、思うことがありそうな様子なので、「どうだどうだ」と強いてお尋ねになられたところ、ふところから畳紙を落として、そのまま退出してしまった。（摂政殿が）ご覧になったところ、

明けば又秋のなかばも過ぎぬべし　かたぶく月の惜しきのみかは

と書いてあった。この歌は治部卿の歌である。このようなお尋ねがあるだろうとはどうして知ろうか。ただ、以前から趣があると思っていて、書き付けて、持っていたものであろう。

その後、又治部卿をお呼び寄せになって、前の（宮内卿の）ときと同じように尋ねられたところ、これも申し上げようがなくて、

かささぎのわたすやいづこ夕霜の　雲井に白きみねのかけはし

と、高らかに声に出してうたって退出した。これは宮内卿の歌であった。まことの名手の心は、このように一つであることだ。

第二十三講　古文の読解⑥

Step 1

一

解答

問1、紅葉がなかったから。（同意可）　問2、ア　問3、おしえける　問4、ア

解説

問1、「已然形＋ば」は理由を表すので、「紅葉を叡覧なるに、なかりければ」が理由にあたる。

問2、一字戻って読む場合には「レ点」を、二字以上戻って読む場合には「一・二点」を用いる。

問3、助詞以外の「を」は「お」にする。また、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。

問4、下役人が酒をあたためるために散った紅葉を焼いたことについて、「林間煖酒焼紅葉」という漢詩を引用してほめている。

口語訳

当番の蔵人が、天皇のお出ましより先に行こうと急いで行ってみると（紅葉は）跡形もない。「どうした。」と聞いたところこうこう（しました）と言う。蔵人はたいへん驚き、「ああ、大変だ。天皇があれほど執着しておられた紅葉を、このようにするとはあきれたことだ。わかっていないだろうが、おまえたちは、今すぐ獄に入れられたり流されたりすることになり、私自身もどんなお叱りをこうむることだろう。」と嘆いているところに、天皇はふだんより早くご寝所をお出になるとすぐに、そちらへお出ましになって紅葉をご覧になると、（紅葉が）なかったので、「どうした。」とお尋ねになったところ、蔵人は天皇に申し上げようがない。ありのままに申し上げた。天皇のご機嫌は特別こころよげで微笑まれ、「林間に酒を温めるため紅葉を焼くという漢詩の心を、そなたたちにはだれが教えたのだ。風流におこなったことだ。」とおっしゃられて、かえっておほめにあずかったうえに、特に天皇のおとがめはなかった。

Step 2・3

二

解答

(1) エ　(2) ① おさえて　③ よわい　④ いずく　(3) むず〔と〕・どう〔ど〕・きつ〔と〕（いずれか2つ）　(4) イ　(5) 年十六

(6) （直実）物その～郎直実　（敦盛）さては～ずるぞ　(7) ア　(8) ウ・エ

解説

(2) 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。また、「づ」は「ず」にする。

(3) 擬態語とは、状態や行動を音で表現した言葉。直実が敦盛と組んで馬から落ちる場面と、直実が後ろを見やる場面で使われている。

(4) 敦盛をとっておさえた人物。

(5) 直実が「とっておさへて…おしあふのけて」見た敦盛の印象をおさえる。

(6) 「…と名のり申す」「…とぞ宣ひける」と引用を表す「と」や、発言を表す言葉に着目する。

(7) 「あつぱれ」は、相手の言動がみごとだと感心を表す。敦盛が「なんぢにあうては名のるまじいぞ…見知らうずるぞ」と言ったことに着目する。

(8) 「此人一人…よもあらじ」「小次郎がうす手…なげき給はんずらん」とあることから考える。

口語訳

（敦盛が）波打ちぎわにあがろうとするところに、（馬を）並べてむずと組んでどしんと落ち、（敦盛を）とっておさえて首を討ち取ろうと甲を押し上げてみると、年のころは十六、七くらいだが、薄化粧をして、歯を黒く染めている。自分の子の小次郎の年齢くらいで、容貌は非常に美しかったので、どこに刀を立てていいかもわからない。「そもそもあなたはどういう人でいらっしゃいますか。お名のりください。お助けしましょう」と申し上げたところ、「お前はだれだ」とおたずねになる。「たいした者ではございませんが、武蔵国住人、熊谷次郎直実」と名のり申す。（敦盛は）「そういうことなら、お前に対しては、名のる必要もない。お前のためにはよい敵であるぞ。名のらずとも首をとって人に問え。（自分を）見知っていることだろうよ」とおっしゃった。熊谷は、「あっぱれ、立派な将

軍だ。この人、一人を討ち申し上げたとしても、負けるにちがいない戦に勝つはずもない。また、討ち申さなくても、勝つにちがいない戦に負けることもまさかあるまい。小次郎が軽傷を負っているのさえ、直実はつらく思っているのに、この殿の父は、討ち取られたと聞いて、どれほど嘆かれることだろう。ああ、お助け申し上げたい」と思って、後ろをきっと見たところ、（源氏の武将の）土肥、梶原が五十騎ほど続いていた。

第二十四講　古文の読解⑦

Step 1

一

解答

㈠ そろえて　㈡ エ　㈢ 鈍い馬で、まちがいがあるにちがいないと判断したから。（同意可）　㈣ ウ

解説

㈠ 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。

㈡ 「並ぶ者がいないほど」を、「二人といないほど」と言い換えて考える。

㈢ 直前の「是は鈍くして、あやまちあるべし」に注目。

㈣ 馬の細かい動作を見て「この馬には乗らない」と判断した泰盛の行動を言い表した語である。

口語訳

城陸奥守泰盛は、並ぶ者がいないほど優れた馬乗りであったという。馬を引き出させた時に、（馬が）足をそろえて敷居をゆらりと越えるのを見た時には、「これは気性の荒い馬だ。」と言って、鞍を（別の馬に）置き替えさせた。また、（別の馬が）足を伸ばして敷居に蹴り当てていると、「これは鈍い馬で、まちがいがあるにちがいない。」と言って、乗らなかった。その道を極めていない人なら、これほど用心するものだろうか。

Step 2・3

二

解答

問一、もうしければ　問二、ア　問三、1、この所の神　2、たたり　問四、上皇が治める土地に自ら宮殿を建てる（17字）（同意可）

問五、ウ

解説

問一、「au」は「ou」と発音するので、「まう」は「もう」にする。

問二、この上皇の質問に対して、人が「古くよりこの地を…掘り捨てられがたし」と、蛇の対処について答えていることをおさえる。

問三、1、塚に集まっている蛇を「この所の神なり」と言っている。2、人々が申し上げたことに対して、大臣が「何のたたりをかなすべき」と言ったことから考える。

問四、直前の「王土にをらん蟲…鬼神はよこしまなし」に注目。

問五、「この大臣」は「王土にをらん…とがむべからず。ただ皆掘り捨つべし」と言い、そのようにしたところたたりもなく、その考えは正しかったということから判断する。

口語訳

亀山殿をお建てになろうとして、地ならしをなさったところ、大きな蛇が、数えきれないほど集まっている塚があった。この場所の神であると言って、事の次第をお知らせしたところ、「どうしたらよいか」と上皇がお尋ねになったので、「古くからこの土地を居場所としているものならば、むやみに掘り起こしてお捨てになることは難しいです」とその場にいた人々は皆返答いたされたが、この大臣一人が、「上皇が治める土地にいる生き物が、皇居をお建てになる時に、何の災いももたらすはずがありません。鬼神は道理にはずれた行いはしません。（蛇は）決して責めるはずがありません。ただすべて掘り起こして捨てるべきです」と進言なさったので、塚をくずして、蛇を大井川に流してしまった。まったく災いは起こらなかった。

第二十五講　漢文の読解①

Step 1

一

解答

(一) 刻ミテ二其ノ舟ニ一　(二) イ　(三) エ

解説

(一) 二字以上戻って読む場合には「一・二点」を用いる。

(二) 「舟は已に行けり。而も剣は行かず」ということを考慮しないで、水中の剣を探すことを指している。

(三) 楚人は舟が動いてしまっているにも関わらず、舟が停まる前に付けた目印を参考にしようとしている。つまり楚人が頼みにしているのは「以前の出来事」であることをおさえる。

口語訳

楚の人で大きな川を渡る者がいた。その人の剣が船から水の中へと落ちてしまった。その人が大急ぎで舟に（目印を）刻み付けて言ったことには、「これが私の剣が落ちた場所である。」と。舟が停まった。その目印を付けた箇所から、水に入って剣を探した。舟はすでに（剣を落とした場所から）動いてしまっていた。しかし剣は（落ちた場所から）動かない。剣を探すのにこのようなやり方をすることは、なんと愚かであるか。

Step 2・3

二

解答

1、いわく　2、イ　3、(1)石　(2)誠実で純粋な気持ちで行うと、常識的には不可能なことでも達成できるということ。（38字）（同意可）

解説

1、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。
2、「一・二点」は、「一」のついている字から「二」のついている字へと戻って読む。「レ点」は、一字戻って読む。
3、(1)「進みてこれをみるにすなはち石なり」とある。(2)「心から虎だと信じる、誠実で純粋な気持ち」があると、石でも深く射ることができたという李広の体験から考える。

口語訳

（李広は）また冥山の南側で狩りをした。また寝ている虎を見てこれを射たところ、矢は羽根の部分まで深く突き刺さった。近寄ってこれを見たところ、なんと石であった。その形は、虎に似ていた。いったん離れてもう一度射たところ、鏃はくだけ、簳は折れて石は傷つかなかった。

私は、以前にこのことについて揚子雲に尋ねた。揚子雲は「誠実で純粋な気持ちがあれば、そのときには金属や石のような硬いものでも至誠のために割れる」と言った。

第二十六講　漢文の読解②

Step 1

一

解答

(1) A、家族にあてた手紙(または、故郷にあてた手紙)(8字)　B、思いを言い尽くせていない(または、言い残した思いがある)(12字、または10字)(それぞれ同意可)　(2) 行 人 臨ミテレ発スルニ 又 開クレ封ヲ　(3) 4

解説

(1) A、「家書」の意味が入る。ここでの「書」とは手紙を指す。B、「説きて尽くさざる」ということを心配している。

(2) 一字戻って読む場合には「レ点」を、二字以上戻って読む場合には「一・二点」を用いる。

(3) 「家書を作らん」と欲し、その思いを言い尽くしたいという気持ちを表している。

Step 2・3

二

解答

1、七言絶句　2、李 白 乗ツテレ舟ニ 将(ニ)欲スレ行カント　3、辞　4、ウ　5、(1) a、見送られる　b、見送る(それぞれ同意可)

(2) 次第に遠ざかり(同意可)　(3) さらに深い汪倫の心づかい(12字)(同意可)

解説

1、一句が七文字で、四句からなる漢詩である。

2、一字戻って読む場合には「レ点」を、二字以上戻って読む場合には「一・二点」を用いる。

3、「辞する」は「別れる」という意味で用いられている。

4、Ⅰでは「岸上踏歌の声」と「忽ち聞く」、「汪倫我を送るの情に」と「及ばず」の順番が入れかわっている。Ⅱでは「長江の天際に流るるを」と「惟だ見る」の順番が入れかわっている。

5、(1) Ⅰは、李白が舟に乗って行こうとしているときによんだ詩であり、Ⅱは、孟浩然が広陵へ行くときに李白がよんだ詩である。

(2)「孤帆の遠影」が「碧空に尽き」とある。舟の姿が遠くに見えるようになり、やがて青空に消えて見えなくなる様子が表されている。(3) 桃花潭の深さが、汪倫の自分を送る気持ちに及ばないということであり、汪倫の気持ちがそれだけ深いことを言ったものである。

口語訳

Ⅰ、李白は舟に乗って今にも行こうとしている。突然、岸から足で調子を取って歌う声が聞こえる。桃花潭の深さは千尺もあるが、汪倫が私を送る気持ちの深さには及ばない。

Ⅱ、旧友が西の方角の黄鶴楼に別れを告げ、花が煙るように咲く三月に広陵へ下っていく。一そうの舟の帆の遠影が青空に消えていき、ただ長江が空の果てに流れるのを見るだけである。

第二十七講　課題作文

Step 1

一

解答

（例）グラフを見ると、小学校六年生より中学校三年生の方が朝食を毎朝食べる人の割合は少ないが、どちらの学年も七年間のうちに、その割合が増えていることがわかる。

朝食を食べないと、勉強や運動に集中できないという話をよく聞く。僕自身も、寝坊して朝食を食べられなかったときに、身体に力が入らず、授業に集中できなかったことがある。その経験からも、一日にとる食事の中で最も大切なのは、やはり朝食だと思う。どんなに忙しいときでも、これからも積極的に毎日朝食を食べるように心がけたい。（236字）

Step 2

二

解答

（例）僕がいつまでも変わらないでほしいと思うのは、友達とのつながりだ。そう思うのは、卒業が近づくにつれ、サッカー部で一緒にがんばってきたメンバーとの別れがとても惜しまれるからだ。彼らとは、朝と放課後の厳しい練習でお互いを励まし合ったり、試合で悔しさやうれしさを共有したりしてきた。進学先がばらばらなので、これからはなかなか会えなくなるだろう。でも、部活動での思い出とそこで築かれたつながりを、これからも大切にしていきたいと思う。（212字）

Step 3

三

解答

（例）筆者は、守衛と一社員の関係にすぎなかった相手を、自分の知り合いとして見られるようになったことを、うれしい出会いと捉えている。私は、学校で顔を知っていても話したことのない人も多いが、テニス部で出会い、練習に励んできた仲間とは、強いつながりを感じるようになった。喜びも苦しみも共に味わってきたこの仲間との出会いは、中学時代に得た大きな宝物である。（7行）

解説

筆者が、「守衛さん」と呼んでいた人を、「ぼくの知り合いの山田さん」というように個人として見られるようになったことを、「出会い」と捉えていることをおさえる。

第二十八講　資料作文

Step 1

一

解答

（例）グラフでは、社会志向よりも個人志向の人がこの数年で増えていることがわかる。

この結果は、国や社会とは離れた個人の生活を楽しみたいと考える人が増えてきていることを表している。しかし、私は、どちらの立場かということは一概には言えないと思う。それは、個人生活の充実は、国や社会がきちんと機能することによって生まれるものであり、個人生活と国や社会は切り離して考えることはできないと思うからである。（196字）

Step 2

二

解答

（例）私はこの発言に反対です。たしかに自動車は移動時間を短縮し、リモコンは電気製品の操作を簡単にします。その一方で、ゆっくりした移動や操作の楽しみが失われているように感じます。また、携帯電話があると会話やメールが手軽にできますが、いつも周囲との連絡にしばられることになります。このような経験から、私は、便利さが必ずしも豊かさをもたらすとはかぎらないと思っています。（179字）

Step 3

三

解答

（例）人が何か目標に向かって努力するとき、誰かに支えられることは大きな力になります。逆に、自分が誰かの支えになることも、自信をもたらし大きな力になります。

私は陸上部で思うような成績が出なかったとき、同じ陸上部の友人に励ましてもらい、さらに努力を続けることができました。その友人が壁にぶつかったときは私が声をかけ勇気づけるようにしました。一人で頑張るのでなく二人で励まし合うことで、競技を続けることができたと思います。こうした経験から、私は、人を支えることや支えられることの意味は、お互いを成長させ自分の可能性を広げてくれることだと思っています。（271字）